市原市瀬又北・瀬又南、千葉市大木戸・板倉町遺跡

—千葉外房有料道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書—

1984

千葉県道路公社
財団法人 千葉県文化財センター

市原市瀬又北・瀬又南、千葉市大木戸・板倉町遺跡

—千葉外房有料道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書—

1984

千葉県道路公社
財団法人 千葉県文化財センター

序　　文

房総半島のほぼ中央部を横断する大網街道は、近年、車輛の通行量が急激に増加し続けているので、その緩和のため千葉県では千葉外房有料道路の建設を計画しました。

ところが、その路線となる千葉市南部および市原市北部の境界付近の村田川流域は自然環境に恵まれていたとみえ、先土器時代から歴史時代に至るまでの遺跡が数多く所在しています。

そこで、千葉県教育委員会は、路線内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県道路公社をはじめとする関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりました。

その結果、遺跡を現状保存する路線変更に困難性を認めましたので、やむを得ず記録保存を行なうことになりました。記録保存に当たっては、財団法人千葉県文化財センターが調査機関の指定を受け、昭和57年4月から昭和58年3月まで調査を実施しました。

調査の結果、先土器時代、縄文時代、歴史時代の貴重な資料を得ることができ、特に瀬又北遺跡は先土器時代の優秀な遺跡であり、この度、その成果を「千葉外房有料道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書」として刊行する運びとなりました。

本書が、学術資料としてはもとより、教育資料及び文化財保護思想の涵養に広く活用されることを願ってやみません。

終りに当たり、発掘調査から報告書刊行まで種々ご指導をいただいた千葉県教育委員会（文化課）をはじめ、千葉県道路公社、地元関係機関等各位のご協力にお礼申し上げるとともに、調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和58年9月30日

財団法人　千葉県文化財センター理事長　　今　井　　正

凡　　例

1．本書は、千葉県道路公社による千葉外房有料道路の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書に所収する内容は、市原市瀬又字三郎右衛門谷1012－17他に所在する瀬又北（せまたきた）遺跡、市原市瀬又字小咲台1017他に所在する瀬又南（せまたみなみ）遺跡、千葉市大木戸町1215－13他に所在する大木戸（おおきど）遺跡、千葉市板倉町513－1他に所在する板倉町（いたくらちょう）遺跡の調査報告である。

3．発掘調査は、昭和57年4月1日から翌58年3月31日まで実施した。なお、板倉町遺跡の土塁及び地形測量は、委託して行った。

4．発掘調査は、千葉県道路公社の依頼により、千葉県教育庁文化課の要請と指導を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

5．発掘調査は、調査部長　白石竹雄，部長補佐　岡川宏道，班長　根本弘の指導のもとに、調査研究員　小久貫隆史，横山仁が担当した。

6．整理作業は、昭和58年4月1日から昭和58年9月30日まで、調査部長　白石竹雄，部長補佐　岡川宏道，班長　矢戸三男の指導のもとに、調査研究員　横山仁が担当した。

7．本書の執筆は横山が行い、それを矢戸が加筆、補正した。

8．各遺跡の市町村コード及び遺跡コードは、瀬又北遺跡219－017，瀬又南遺跡219－018，大木戸遺跡201－036，板倉町遺跡201－037である。

9．本書の作成にあたり、赤外線テレビ撮影による墨書土器の文字判読には国立歴史民俗博物館助教授　平川南氏、石器類の石質鑑定については調査研究員　沢野弘氏、また、英文については鄙紀子氏の御協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

10．発掘調査から本書の刊行に至るまで、千葉県道路公社、千葉県教育庁文化課の関係者各位をはじめとして、多くの方々から御指導、助言を戴いた。深く感謝の意を表する次第である。

11．本書の第1図は、国土地理院著作発行の1：25,000地形図、蘇我（千葉15号－2）・東金（千葉11号－4）・海士有木（千葉16号－1）・茂原（千葉12号－3）を合成し、使用した。第3図は、市原市都市計画課による1：2,500市原市地形図（B－9）を、第37図は国土地理院著作発行の1：2,500千葉市基本図（IX－LE　79－3）を、第42図は千葉市都市計画課発行の1：2,500千葉市都市図（P－12－二）をそれぞれ再トレースして5,000分の1に縮尺した。

12．方位は地形図が座標北を、　　・遺構図および先土器時代の遺物分布図が磁北を示す。

13．スクリーントーンの表示については、挿図中に示したが、それ以外は下記のとおりである。

遺構

カマド袖

遺物

繊維土器

内黒土器

目　　次

序　　文
凡　　例
目　　次
第1章　序　説……1
　第1節　調査にいたる経緯……1
　第2節　環境と周辺遺跡……1
　第3節　調査の方法と経過……4
第2章　瀬又北遺跡……7
　第1節　立　地……7
　第2節　層　序……7
　第3節　遺構と遺物……11
　　1．先土器時代……11
　　2．その他の時代……25
　第4節　まとめ……29
第3章　瀬又南遺跡……33
　第1節　立　地……33
　第2節　層　序……33
　第3節　遺構と遺物……36
　　1．先土器時代……36
　　2．縄文時代……47
　第4節　まとめ……51
第4章　大木戸遺跡……53
　第1節　立　地……53
　第2節　層　序……53
　第3節　遺構と遺物……56
　第4節　まとめ……58
第5章　板倉町遺跡……59
　第1節　立　地……59
　第2節　層　序……59
　第3節　遺構と遺物……64
　　1．先土器時代……64

2．縄文時代……78
3．歴史時代……89
第4節　まとめ……97
英文解説……100

挿図目次

第1図　遺跡周辺地形図（1/25,000）……2
第2図　グリッド分割図……4
第3図　瀬又北・瀬又南遺跡周辺地形図（1/5,000）……8
第4図　グリッド配置図及び遺構分布図（1/1,000）……9
第5図　グリッド配置図及び先土器時代調査図（1/1,000）……10
第6図　標準層序（1/40）……7
第7図　第1ユニット遺物出土状況図（1/40）……12
第8図　第1ユニット遺物出土状況拡大図（1/20）……13
第9図　第1ユニット出土遺物実測図(1)（2/3）……16
第10図　第1ユニット出土遺物実測図(2)（2/3）……17
第11図　第1ユニット出土遺物実測図(3)（2/3）……18
第12図　第1ユニット出土遺物実測図(4)（2/3）……19
第13図　第1ユニット出土遺物実測図(5)（2/3）……20
第14図　第1ユニット出土遺物実測図(6)（2/3）……21
第15図　第1ユニット出土遺物実測図(7)（2/3）……22
第16図　第1ユニット出土遺物実測図(8)（2/3）……23
第17図　第1ユニット出土遺物実測図(9)（2/3）……24
第18図　第1ユニット出土遺物実測図(10)（2/3）……25
第19図　1・2号土坑実測図（1/40）……26
第20図　3・4号土坑実測図（1/20）……27
第21図　グリッド出土遺物拓影・実測図（1/3，1/4，1/2）……29
第22図　剝片剝離過程模式図……31
第23図　グリッド配置図及び遺構分布図（1/1,000）……34
第24図　グリッド配置図及び先土器時代調査図（1/1,000）……35
第25図　標準層序（1/40）……33

第26図　第１ユニット遺物出土状況図（１/40）……37
第27図　第１ユニット出土遺物実測図（２/３）……38
第28図　第２ユニット遺物出土状況図（１/40）……39
第29図　第２ユニット出土遺物実測図(1)（２/３）……40
第30図　第２ユニット出土遺物実測図(2)（２/３）……41
第31図　第３ユニット遺物出土状況図（１/40）……43
第32図　第３ユニット出土遺物実測図(1)（２/３）……45
第33図　第３ユニット出土遺物実測図(2)（２/３）……46
第34図　第３ユニット出土遺物実測図(3)（２/３）……47
第35図　１・２・３号土坑実測図（１/40）……49
第36図　グリッド出土遺物拓影・実測図（１/３，１/４，２/３）……50
第37図　大木戸遺跡周辺地形図（１/5,000）……54
第38図　グリッド配置図及び遺構分布図（１/1,000）……55
第39図　標準層序（１/40）……53
第40図　１号土坑実測図（１/40）……57
第41図　グリッド出土遺物拓影・実測図（１/３）……57
第42図　板倉町遺跡周辺地形図（１/5,000）……60
第43図　グリッド配置図及び遺構分布図（１/1,000）……61
第44図　グリッド配置図及び先土器時代調査図（１/1,000）……62
第45図　標準層序（１/40）……59
第46図　先土器時代遺物分布図（１/200）……63
第47図　第１ユニット遺物出土状況図（１/40）……65
第48図　第１ユニット出土遺物実測図（２/３）……65
第49図　第２ユニット遺物出土状況・出土遺物実測図（１/40，２/３）……66
第50図　第３ユニット遺物出土状況図（１/40）……67
第51図　第３ユニット出土遺物実測図（２/３）……68
第52図　第４ユニット遺物出土状況図（１/40）……69
第53図　第４ユニット出土遺物実測図(1)（２/３）……72
第54図　第４ユニット出土遺物実測図(2)（２/３）……73
第55図　第４ユニット出土遺物実測図(3)（２/３）……74
第56図　第５ユニット遺物出土状況図（１/40）……75
第57図　第５ユニット出土遺物実測図（２/３）……75
第58図　第６ユニット遺物出土状況図（１/40）……76

第59図　第６ユニット出土遺物実測図（２/３）……76
第60図　第７ユニット遺物出土状況・出土遺物実測図（１/40，２/３）……77
第61図　１・２号炉穴実測図（１/20）……79
第62図　１号土坑実測図（１/40）……80
第63図　２・３・４号土坑実測図（１/40）……82
第64図　５・６・７号土坑実測図（１/40）……83
第65図　８・９号土坑実測図（１/40）……85
第66図　グリッド出土遺物拓影図(1)（１/３）……88
第67図　グリッド出土遺物拓影・実測図(2)（１/３）……89
第68図　１号住居跡実測図（１/60）……90
第69図　１号住居跡カマド実測図（１/30）……91
第70図　１号住居跡出土遺物実測図（１/４，１/２）……91
第71図　ピット群実測・出土遺物実測図（１/120，１/２）……93
第72図　グリッド出土遺物実測図（１/４，１/２）……96
別図１　板倉町遺跡地形測量図（１/1,000）

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表……３
第２表　グリッド出土鉄滓および羽口一覧表……97

図　版　目　次

図版１　瀬又北遺跡　調査前遺跡近景(1)
　　調査前遺跡近景(2)
図版２　瀬又北遺跡　第１ユニット遺物出土状況(1)
　　第１ユニット遺物出土状況(2)
図版３　瀬又北遺跡　第１ユニット出土遺物(1)
図版４　瀬又北遺跡　第１ユニット出土遺物(2)
図版５　瀬又北遺跡　第１ユニット出土遺物(3)
図版６　瀬又北遺跡　第１ユニット出土遺物(4)
図版７　瀬又北遺跡　第１ユニット出土遺物(5)

図版 8　瀬又北遺跡　第 1 ユニット出土遺物(6)
図版 9　瀬又北遺跡　第 1 ユニット出土遺物(7)
図版10　瀬又北遺跡　第 1 ユニット出土遺物(8)
図版11　瀬又北遺跡　1 号土坑全景
2 号土坑全景
3 号土坑全景
4 号土坑全景
図版12　瀬又北遺跡　グリッド出土遺物
3・4 号土坑内貝ブロック出土貝類サンプル
図版13　瀬又南遺跡　調査前遺跡近景
第 1 ユニット遺物出土状況
図版14　瀬又南遺跡　第 2 ユニット遺物出土状況
第 3 ユニット遺物出土状況
図版15　瀬又南遺跡　第 1 ユニット出土遺物
第 2 ユニット出土遺物(1)
図版16　瀬又南遺跡　第 2 ユニット出土遺物(2)
図版17　瀬又南遺跡　第 2 ユニット出土遺物(3)
図版18　瀬又南遺跡　第 3 ユニット出土遺物(1)
図版19　瀬又南遺跡　第 3 ユニット出土遺物(2)
図版20　瀬又南遺跡　1 号土坑全景
2 号土坑全景
3 号土坑全景
図版21　瀬又南遺跡　グリッド出土遺物
図版22　大木戸遺跡　調査前遺跡近景(1)
調査前遺跡近景(2)
図版23　大木戸遺跡　1 号土坑全景
グリッド出土遺物
図版24　板倉町遺跡　遺跡全景（航空写真）
図版25　板倉町遺跡　調査前遺跡近景(1)
調査前遺跡近景(2)
図版26　板倉町遺跡　第 1 ユニット遺物出土状況
第 3 ユニット遺物出土状況
図版27　板倉町遺跡　第 4 ユニット遺物出土状況

		第5ユニット遺物出土状況
図版28	板倉町遺跡	第6ユニット遺物出土状況
		第7ユニット遺物出土状況
図版29	板倉町遺跡	第1・2・3・5ユニット出土遺物
図版30	板倉町遺跡	第4ユニット出土遺物(1)
図版31	板倉町遺跡	第4ユニット出土遺物(2)
図版32	板倉町遺跡	第4・6・7ユニット出土遺物
図版33	板倉町遺跡	1号炉穴全景
		2号炉穴全景
		1号土坑全景
		2号土坑全景
		3号土坑全景
図版34	板倉町遺跡	4号土坑全景
		5号土坑全景
		6号土坑全景
		7号土坑全景
図版35	板倉町遺跡	8号土坑全景
		9号土坑全景
		ピット群全景
図版36	板倉町遺跡	1号住居跡全景
		1号住居跡遺物出土状況
		1号住居跡カマド
図版37	板倉町遺跡	1号住居跡出土遺物
		ピット群出土遺物
図版38	板倉町遺跡	遺跡遠景
		第1土墨
		第2土墨(1)
		第2土墨(2)
		第3土墨
		溝
		テラス
図版39	板倉町遺跡	グリッド出土遺物(1)
図版40	板倉町遺跡	グリッド出土遺物(2)

第1章　序　　説

第1節　調査にいたる経緯

千葉一大網，茂原間における道路は、車輌の通行量の急激な増加に伴い、飽和状態となっているため千葉県道路公社は千葉外房有料道路（生実，本納線）の建設を実施することとした。

これに先立ち、事業者である千葉県道路公社から千葉県教育委員会へ路線内における埋蔵文化財の所在の有無について照会があった。そこで、県教育委員会は現地を踏査したところ、4ケ所の遺跡が確認されたため、その旨を県道路公社へ回答し、慎重に協議を重ねた。その結果、県教育委員会は、やむなく記録保存の措置を講ずることに決定し、財団法人千葉県文化財センターを発掘調査の担当に指定した。

これに基づき、昭和57年4月に千葉県道路公社と当千葉県文化財センターとの間で発掘調査の委託契約が結ばれ、発掘調査を実施する運びとなった。

なお、路線内の遺跡は瀬又北遺跡，瀬又南遺跡，大木戸遺跡，板倉町遺跡と命名し、発掘調査を実施した。

各遺跡の調査期間は以下のとおりである。

瀬又北遺跡（2,670㎡）昭和57年5月10日～昭和57年7月10日

板倉町遺跡（5,620㎡）昭和57年7月12日～昭和57年11月30日

瀬又南遺跡（3,150㎡）昭和57年12月8日～昭和58年2月8日

大木戸遺跡（　600㎡）昭和58年2月8日～昭和58年3月7日

第2節　環境と周辺遺跡（第1図）

今回、報告する瀬又北・瀬又南・大木戸・板倉町の各遺跡は千葉市の南東部と市原市の北東部の境界付近に位置する。そのうち、瀬又北・瀬又南の両遺跡は市原市に、大木戸・板倉町両遺跡は千葉市に所在する。

これらの各遺跡は、小支谷の侵入によって樹枝状に開析された舌状台地上にあり、標高は約70m前後とかなり高い。また、これらの台地を縫うように、市原市金剛地を源とする村田川が、蛇行しながら東京湾の東岸に注いでいる。

各遺跡の周辺には、かなり多くの遺跡が分布する。なかでも、村田川を臨む舌状台地上に遺跡が密集している。

発掘調査した4遺跡と周辺遺跡との位置関係は、第1図のとおりである。なお、図中の●（黒丸印）は包蔵地、■（黒四角印）は城跡あるいは砦跡を表わす。また、本報告書の板倉町遺跡は、「千葉県埋蔵文化財分布図」において「千葉市―971番猪ノ台遺跡」として報告されている

第1図 遺跡周辺地形図(1/25,000)

遺跡と同一である。

第1表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代
1	瀬又北	市原市瀬又字三郎右衛門谷1012-17他	先土器、縄文、土師
2	瀬又南	市原市瀬又字小咲台1017他	先土器、縄文
3	大木戸	千葉市大木戸町1215-13他	縄文
4	板倉町(猪ノ台)	千葉市板倉町513-1他	先土器、縄文、土師
5	西古坂	千葉市越智町西古坂	縄文
6	大谷	千葉市越智町大谷、内谷	縄文、土師
7	岡本台	千葉市越智町岡本台	土師
8	下谷	千葉市越智町下谷	土師
9	栅山	千葉市越智町栅山	土師
10	茨ケ台西	千葉市越智町茨ケ台	縄文、土師
11	千眼下	千葉市越智町千眼下、大野	縄文
12	広台	千葉市越智町広台	土師
13	西大野第1	千葉市大木戸西大野	縄文、土師
14	西大野第2	千葉市大木戸町西大野	縄文、土師
15	西大野第3	千葉市大木戸町西大野	縄文
16	大野	千葉市大木戸町大野	縄文
17	南大野第1	千葉市大木戸町南大野	縄文
18	南大野第2	千葉市大木戸町南大野	縄文、土師
19	南大野第3	千葉市大木戸村南大野	縄文
20	南大野	千葉市大木戸町南大野	縄文、土師
21	東大野南	千葉市大木戸町東大野	縄文、土師
22	東大野東	千葉市大木戸町東大野	土師
23	東大野	千葉市大木戸町東大野	土師
24	茨ケ台	千葉市大木戸町茨ケ台	縄文、土師
25	御霊窪	千葉市大木戸町御霊窪	土師
26	堀込	千葉市大木戸町堀込	土師
27	永田	千葉市大木戸町永田	土師
28	永田東	千葉市大木戸町永田	縄文、土師
29	間中輪	千葉市大木戸町間中輪	縄文、土師
30	狐塚	千葉市大木戸町狐塚	土師
31	中原	千葉市大木戸町中原	土師
32	美濃戸	千葉市大木戸町美濃戸	縄文、土師
33	立山城跡	千葉市大木戸町立山	中・近世
34	立山南	千葉市大木戸町立山	土師
35	立山	千葉市大木戸町立山	土師
36	八幡前南	千葉市大木戸町八幡前	縄文、土師
37	八幡前	千葉市大木戸町八幡前	土師
38	十六台	千葉市大木戸町十六台	土師
39	二ツ塚	千葉市大木戸町二ツ塚	縄文、土師
40	南河原坂城跡	千葉市小食土町南河原坂	戦国末
41	御堂崎城跡	千葉市大椎町1180他	戦国
42	大椎城跡	千葉市大椎町西要、東要	古代末～中世
43	向砦跡	千葉市板倉町向	中世
44	板倉砦跡	千葉市板倉町宮ノ根、堀之内、内入寺、土郷、松堀	中世
45	土郷	千葉市板倉町土郷	土師
46	土郷東	千葉市板倉町土郷、松堀	縄文、土師
47	松堀	千葉市板倉町松堀	土師
48	堂辺田	千葉市板倉町堂辺田	縄文、土師
49	金剛地猪台	市原市金剛地字猪台	縄文
50	熊野神社内宮台	市原市金剛地字内宮台	縄文

参考文献

千葉県企画部企画課　「千葉県埋蔵文化財分布図」　千葉県広報協会　1978年9月

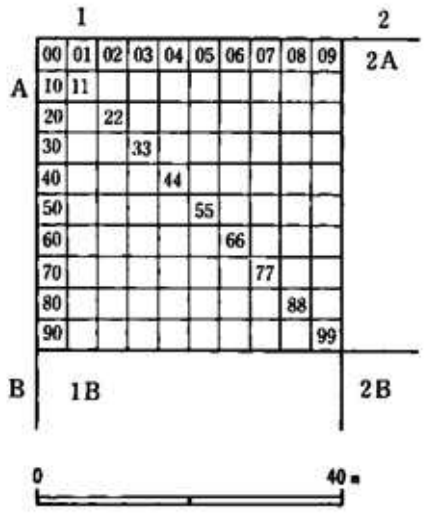
千葉市史編纂委員会　「千葉市史　史料編1」千葉市　1976年3月

千葉市土気地区遺跡調査会　「千葉市土気地区埋蔵文化財調査報告1　第1次予備調査概報」　1980年3月

第3節　調査の方法と経過

瀬又北・瀬又南・板倉町の各遺跡の発掘調査は、対象面積の10%を確認調査し、遺構が検出されたグリッドについては本調査へ移行し、グリッドの周囲を拡張することとした。大木戸遺跡の発掘調査は、対象面積が600㎡と少ないため、当初から本調査として全面積の発掘を実施した。

調査方法については、瀬又北・瀬又南・大木戸の各遺跡は路線内の道路中心杭に、板倉町遺跡は調査区域内に設けた基本杭に従って、地形にあわせて40×40mの大グリッドを設定した。それぞれ、北側から南側へ1→2→…と数字を、東側から西側へA→B→…とアルファベットを標示した。さらに、この内部を4×4mの小グリッドに100分割し、第2図のように00から99までの番号を付けた。



第2図 グリッド分割図

調査にあたって各遺跡とも、方眼に従って2×4mのテストピットを設定して、遺構確認面まで人力で堀り下げた。その時、出土した遺物については、グリッド番号を付けて取り上げることとし、検出された遺構は順番に001号跡，002号跡，……と呼称した。

検出された遺構については、ほとんどが土坑であるため、調査の方法として、①土坑を半分堀る、②土層断面の実測、③残りの半分を堀る、④写真撮影、⑤平面図作成およびエレベーション図作成の手順で実施した。

先土器時代の調査は、各遺跡とも、縄文時代以降の調査がほぼ完了してから対象面積の4%を確認調査した。

調査方法は、2×2mのテストピットを設定し、武蔵野ローム層上面まで掘り下げた。その後、遺物が出土したグリッドについては本調査へ移行し、その周囲を拡張して遺物の分布状況を調査した。調査は、遺物の出土況状撮影→遺物の出土状況図作成→遺物の標高を記入して大グリットごとに取り上げる→土層断面実測の順で実施した。

本調査の結果、各遺跡は以下のとおりの遺構が検出された。

瀬又北遺跡（2,670㎡）	土坑4基（そのうち2基は貝ブロックを含む）
	先土器時代のユニット1ケ所
瀬又南遺跡（3,150㎡）	土坑3基
	先土器時代のユニット3ケ所
大木戸遺跡（ 600㎡）	土坑1基
板倉町遺跡（5,620㎡）	住居跡1軒
	炉穴2基
	土坑9基
	ピット群1ケ所
	先土器時代のユニット7ケ所

なお、板倉町遺跡が所在する台地には、土塁，溝状の遺構が存在しているため、台地全体の空中写真測量を行い、細部に関しては平板測量で補足した。

瀬又北遺跡

(219－017)

第2章　瀬又北遺跡

第1節　立　　地（第3図，図版1）

瀬又北遺跡は市原市瀬又字三郎右衛門谷1012—17他に位置し、国鉄外房線の誉田駅から直線距離にして南東約 1.7 km のところにある。

遺跡が立地する台地は、北側と北西側から南東側に向って入り込んでいる小支谷によって三日月状を呈しながら、西へ延びている。台地東側は南北からの谷の侵入によって、括れ部を形成している。台地の中央は平坦で一番高く、標高73mを測り、谷側に向って緩やかに傾斜している。南側の谷の低湿地との比高差は約26mである。なお遺跡の南約 1 km のところには、東京湾に注ぐ村田川が西へ流れている。

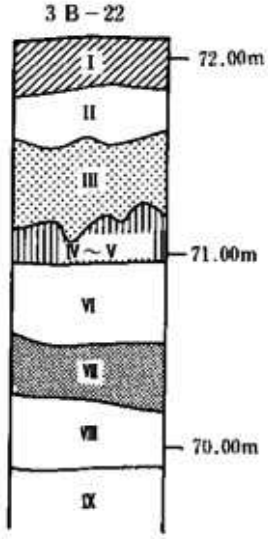
調査区は台地東側の縁辺部70m前後の高さのところで、等高線に沿って南北に走る路線内2670㎡である。南の先端部へ行くに従って路線は斜面を通るため、対象区は徐々にせばまっている。

調査前の状況は、杉の植林と篠類でおおわれていた。しかし、地主の話によると以前は畑地であり、耕作時において貝が出たとのことである。

なお、谷を挟んだ南の台地上には今回調査した瀬又南遺跡が所在する。

第2節　層　　序

本遺跡の層序は第6図のとおりである。3B—22グリッドの南壁断面を標準層序とした。



第6図 標準層序（1/40）

第I層　表土層。黒褐色土層である。

第II層　褐色土層。一部で2層に区分できる所もある。下層の方で黒味を帯びる。

第III層　黄褐色軟質ローム層。いわゆるソフトローム層である。

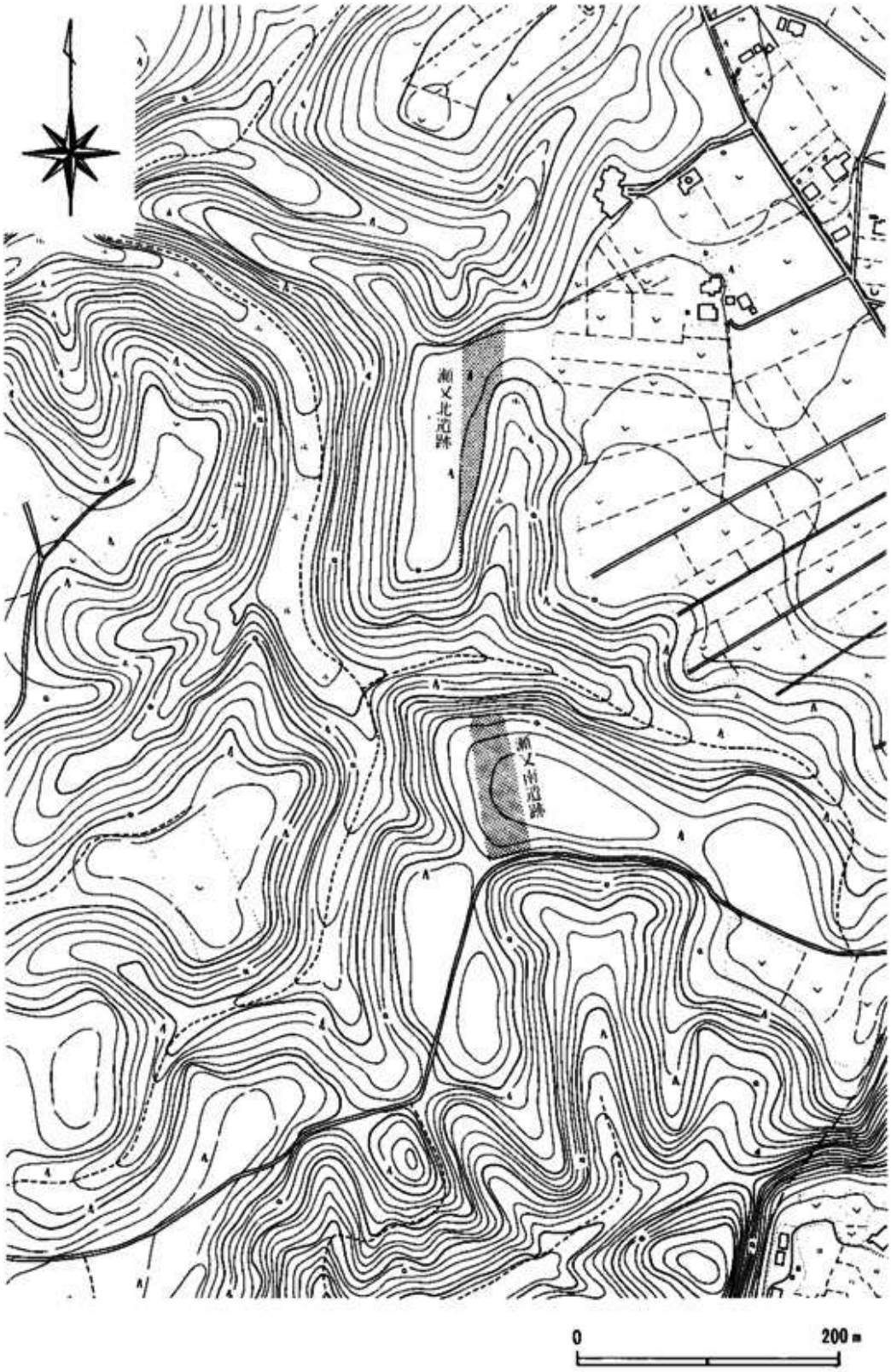
第IV～V層　黄褐色硬質ローム層。IV層とV層の区分は不明確である。乾燥すると剝落しやすい。

第VI層　黄褐色硬質ローム層。IV～V層よりも黄色味を帯びる。

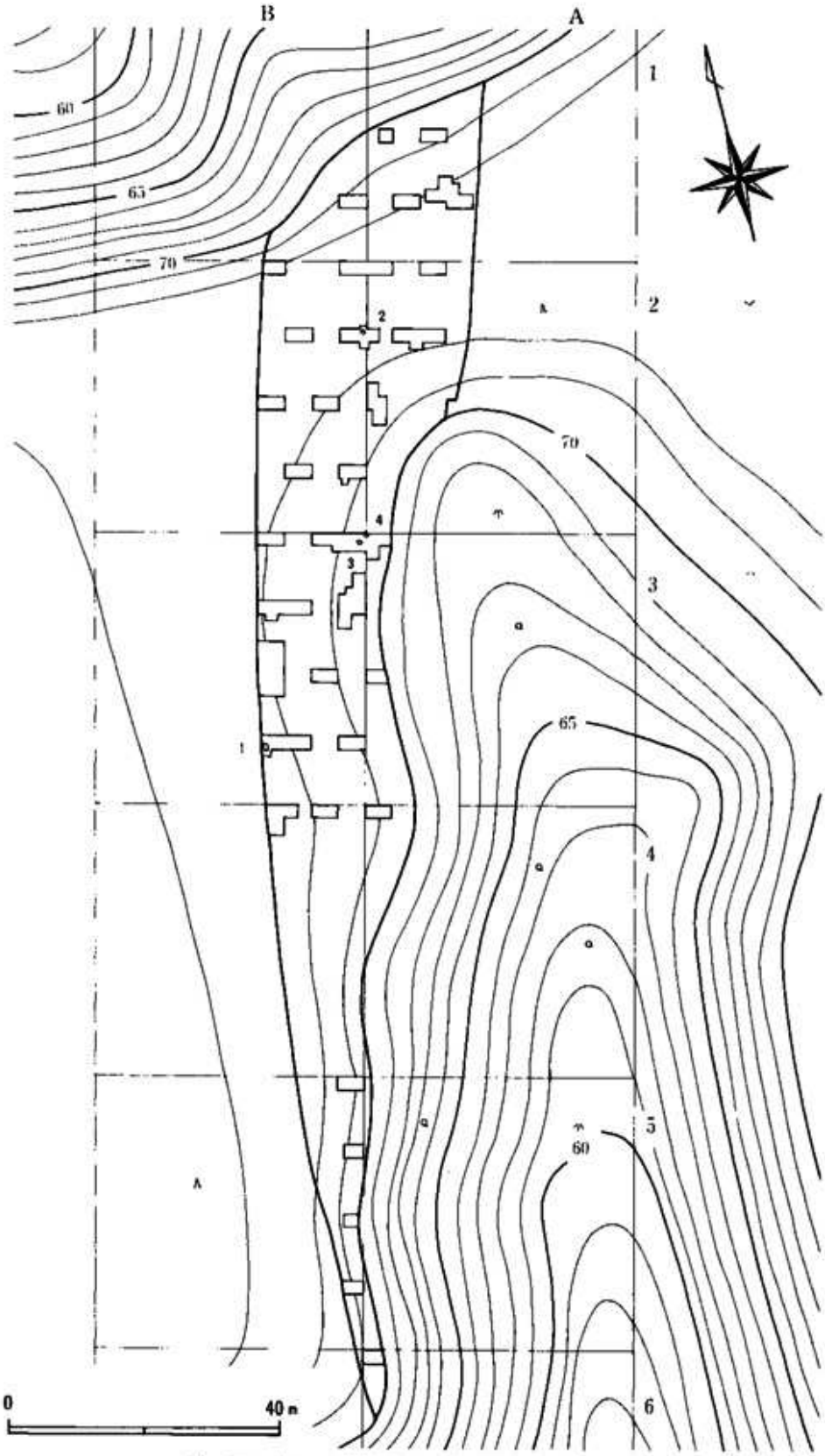
第VII層　褐色ローム層。スコリアを多量に含む。

第VIII層　褐色ローム層。VII層よりもやや薄い。

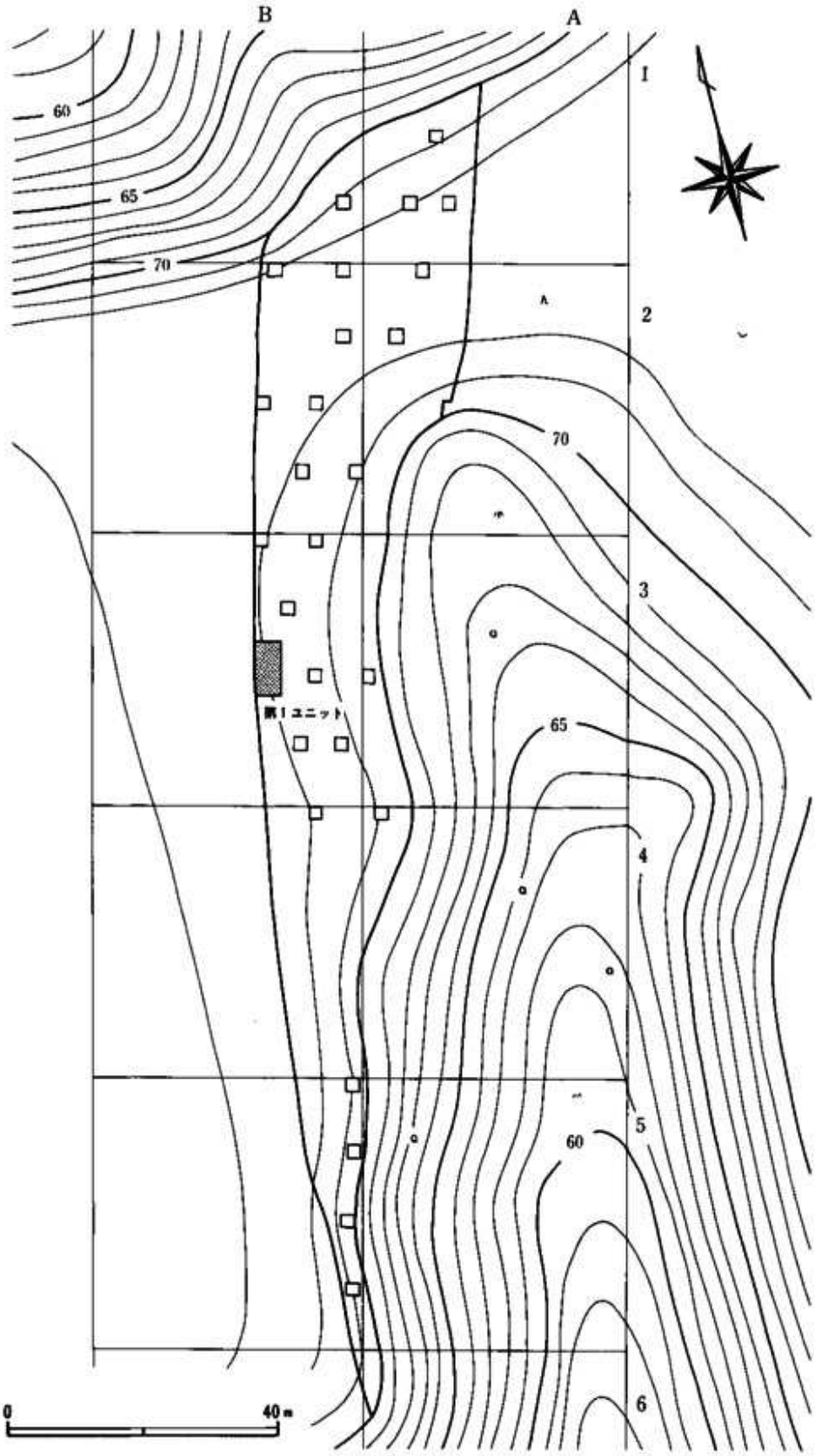
第IX層　淡褐色ローム層。軟質で少し青味を帯びる。この層以下武蔵野ローム層である。



第3図 瀬又北・瀬又南遺跡周辺地形図(1/5000)



第4図 グリッド配置図及び遺構分布図(1/1000)



第5図 グリッド配置図及び先土器時代調査図 (1/1000)

層序は、星谷津遺跡において報告されている層序区分に準じた。以下、瀬又南・大木戸・板倉町の3遺跡においても同様である。

参考文献

財団法人　千葉県文化財センター
佐倉市星谷津遺跡　1978年2月　P25～P26

第3節　遺構と遺物

1．先土器時代（第5図）

一般に先土器時代の調査において遺構が検出されるのは稀である。しかし、遺物は、同じ層位で一定の範囲内に集中して出土する例が多い。このような遺物の集中箇所は、ブロック，ユニット等と称されているが、ここではユニットと呼称することにした。

本遺跡において遺物が出土した地点は、台地の東側縁辺部で調査対象区の西際である。グリッド番号を示すと、3A－34・35・44・45である。遺物出土地点の標高は、72mを測る。

調査区域西側の平坦部は、発掘区域外となるため未調査であるが、おそらくこの部分にも遺物は分布するものと思われる。

調査の結果、1つのユニットを検出した。検出した層位は、第Ⅲ層である。これを、第1ユニットと呼称する。第1ユニットの遺物出土状況および出土遺物は以下のとおりである。

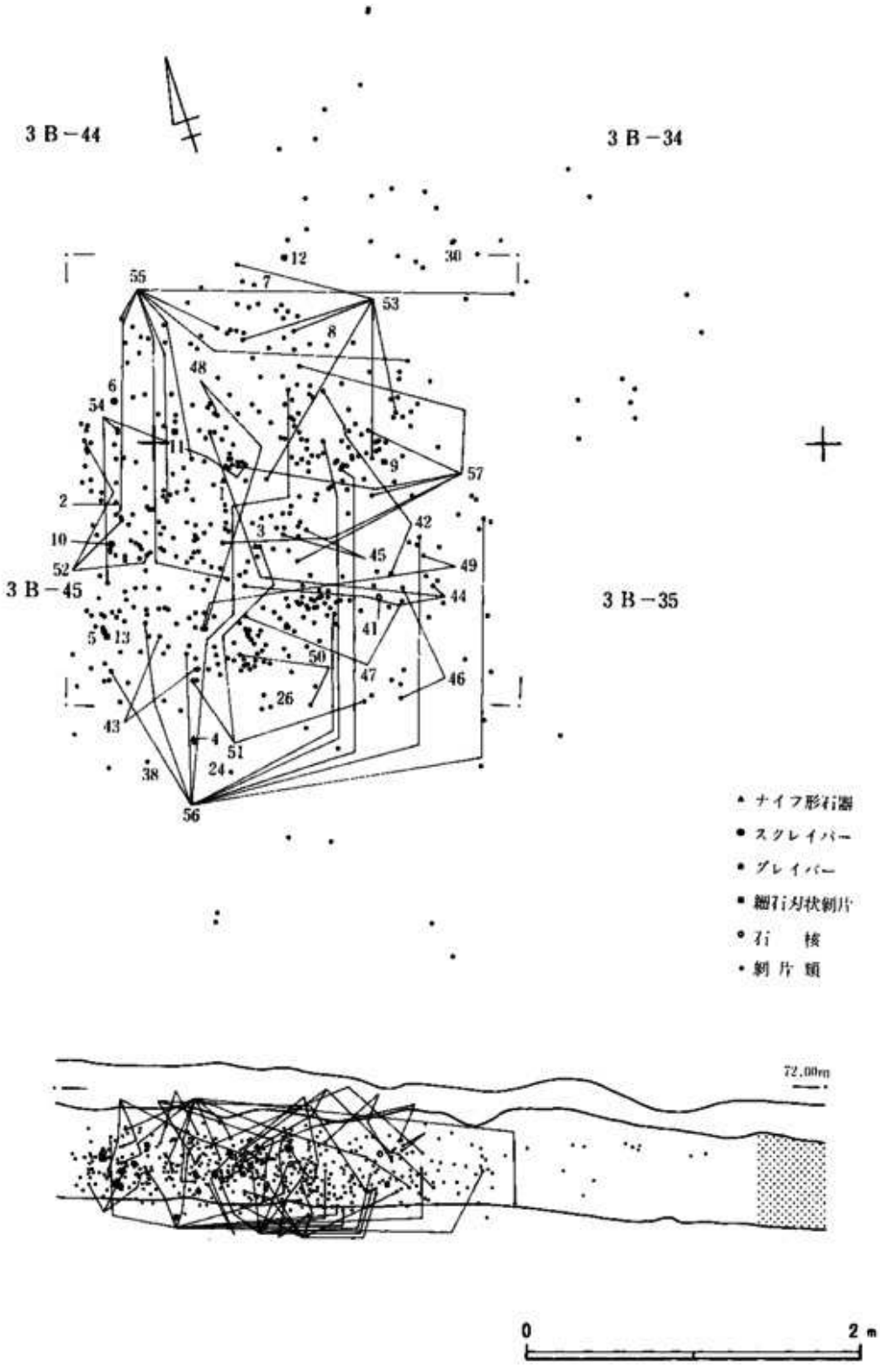
第1ユニット

出土状況（第7・8図，図版2）

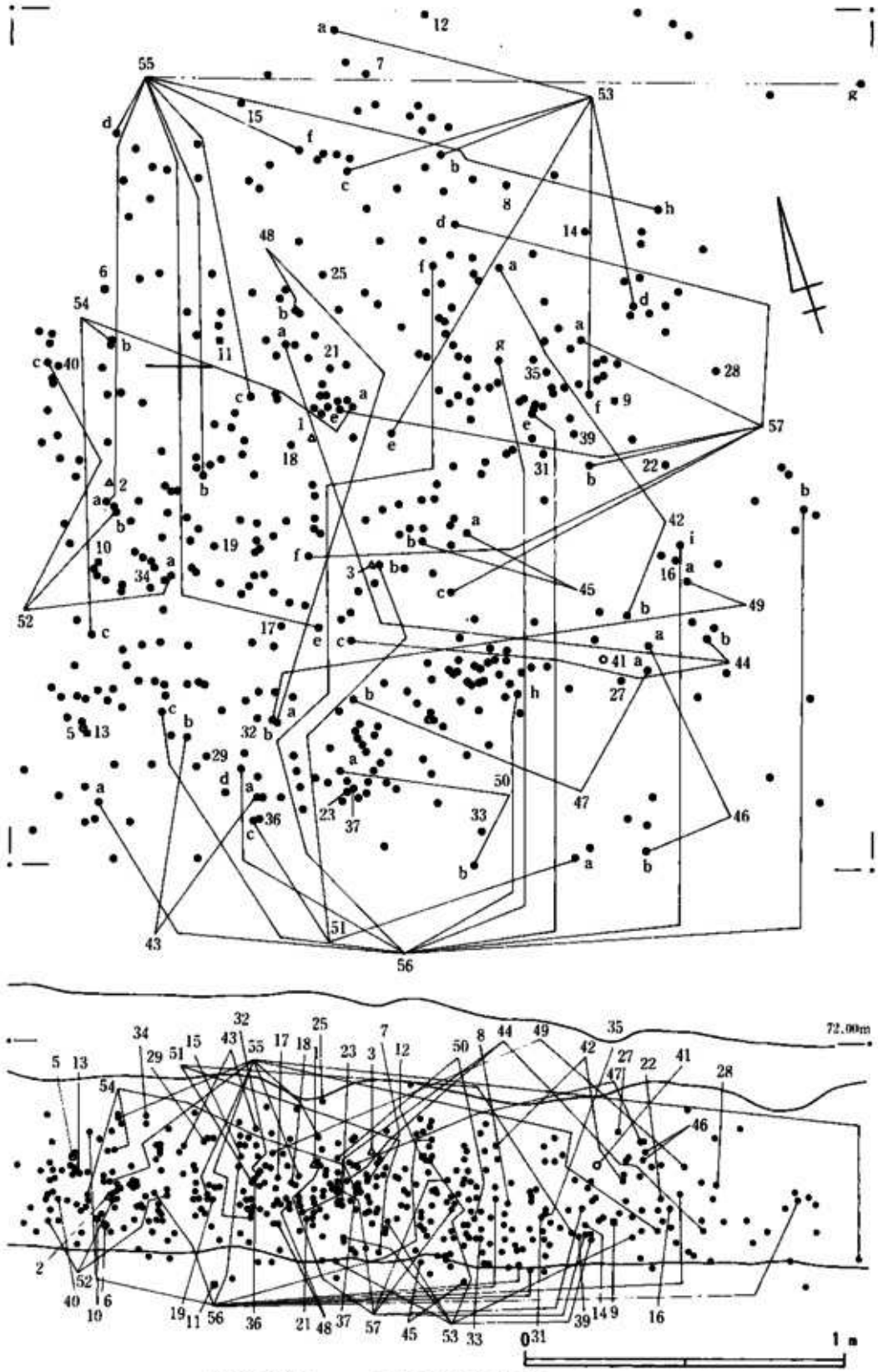
本ユニットは、南へ突出した小台地の東側縁辺部、3B－34・35・44・45の各グリッドにまたがって分布する。規模は南北5.7m，東西4.6mを測る。主に、3B－34グリッドの南西側から3B－35グリッドの北西側にかけて集中している。遺物の出土層位は第Ⅲ層である。

出土遺物（第9～18図，図版3～10）

総数は495点である。そのうちわけは、ナイフ形石器4点，グレイバー1点，スクレイパー1点，細石刃状剥片5点，細部調整のある剥片2点，石核1点（石核と残核の相違が不明であるため、本報告書中では、すべて石核に用語を統一した）、剥片および砕片481点である。石材別に分類すると、頁岩(A)（珪質を含む）322点，頁岩(B)（縞状を呈する）79点，砂岩30点，流紋岩14点，メノウ14点，凝灰岩15点，玄武岩4点，黒曜石7点，安山岩1点，泥岩1点，流紋岩質凝灰岩8点である。本ユニットにおいて、頁岩(A)と頁岩(B)とを合せると、全体の約80％を占める。



第7図 第1ユニット遺物出土状況図（1/40）



第8図 第1ユニット出土状況拡大図 (1/20)

ナイフ形石器（1～4）

1は縦長剝片を両縁調整しているナイフ形石器である。右側上半部に素材の縁辺を残し、その他の縁辺部は、すべてブランティングが施されている。右側縁上半部には使用痕がある。先端は鋭利である。打面は有しないが、先端部の方から剝離している。完形品である。石材は頁岩(A)である。器長 3.7 cm，器幅 1.4 cm，器厚 0.5 cm。

2は縦長剝片を部分調整しているナイフ形石器である。左側縁の先端部だけを細部調整している。基部に打面を有する。完形品である。石材は頁岩(A)である。器長 3.6 cm，器幅 1.3 cm，器厚 0.4 cm。

3は縦長剝片を両縁調整しているナイフ形石器である。左側縁と右側縁基部にブランティングが施され、右側と左側基部に素材の縁辺を残している。先端が少し欠損している。右側縁に使用痕がある。打面は有しないが、基部のほうから剝離している。石材は頁岩(A)である。現長 3.4 cm，器幅 1.4 cm，器厚 0.4 cm。

4は縦長剝片を両縁調整しているナイフ形石器である。先端部と基部を欠損する。右側縁と左側縁基部にブランティングが施されている。右側基部は素材の縁辺を残している。また、左側縁は欠損しているが、素材の縁辺を残していたと思われる。打面を有しないが、基部のほうから剝離している。石材は頁岩(A)である。現長 2.9 cm，現幅 1.3 cm，現厚 0.3 cm。

グレイバー（5）

5は不整形剝片を調整したグレイバーである。左側縁上部に樋状剝離を施し彫刀面を作出している。また右側縁には細部調整が施されている。打面は有しないが基部のほうから剝離している。石材は頁岩(A)である。器長 3.7 cm，器幅 2.3 cm，器厚 1.0 cm，彫刀面の長さ 1.9 cm，彫刀面の幅 0.7 cm。

スクレイパー（6）

6は上半部が欠損しているスクレイパーである。左側縁基部に細部調整が施されている。石材は頁岩(B)である。現長 3.0 cm，現幅 2.6 cm，現厚 0.9 cm。

細部調整を有する剝片（7・8）

7は上縁において、両面からの細部調整が施されている剝片である。おそらくスクレイパーとしての用途を有するのかもしれない。石材は頁岩(A)である。

8は右側縁に細部調整が施されている剝片である。石材は頁岩(A)である。

細石刃状剝片（9～13）

9・10は細石刃と見なしても妥当と思われるが、それに類似する資料も少なく、また細石刃核を出土していないので、細石刃と断定するのは差し控えておく。石材はすべて頁岩(A)である。

剝片類（14～40）

14～20は小形の剝片である。長さは 2 cm 前後である。21～30・32・39は典型的な縦長剝片

である。27は石刃としてもよいかもしれない。32は大形の縦長剥片である。それぞれの断面が台形もしくは三角形を呈する。長さは 4 cm 前後である。これくらいの縦長剥片がナイフ形石器としてつくられたものであろう。31・33～38はやや縦長の不整形剥片である。35・36は打面調整の剥片である。40は横長剥片である。それぞれの石材は、14～30・33・35～38・40が頁岩(A)、31・32・34・39が頁岩(B)である。

石核（41）

41は多方向から剥離されている。剥離面を観察すると良好な剥片は剥離できなかったようである。石材は頁岩(A)である。

接合資料（42～57）

42・43は 2 点が接合したものである。両方とも折損したものである。42は打面調整の剥片である。石材はともに頁岩(A)である

44は 3 点の縦長剥片が接合したものである。石材は頁岩(B)である。

45～48・50は 2 点の縦長剥片が接合したものである。すべて、同一方向に打面を有する。石材はすべて頁岩(A)である。

49は 2 点の不整形剥片が接合したものである。打面転位して剥離している。石材は頁岩(A)である。

51は 3 点の縦長剥片が接合したものである。打面転位による剥離である。51 a と51 b は上部からの剥離で、51 c は下部からの剥離である。51 a →51 b →51 c の順に剥離している。石材は頁岩(A)である。

52は 3 点の剥片が接合したものである。52 a と52 b は折れて分離したものである。52 c を剥離してから90°打面転位して52 a，52 b を剥離している。石材は、頁岩(A)である。

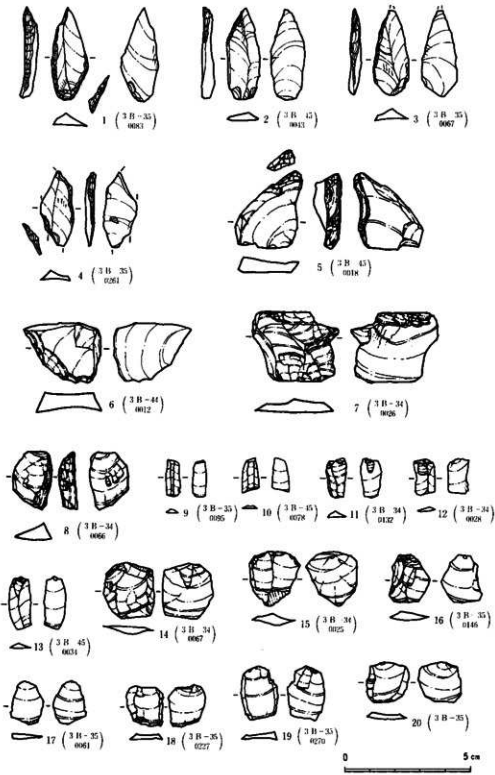
53は 6 点の縦長剥片が接合したものである。53 b は53 a から折損したものである。53 c だけ90°打面転位して剥離している。剥離順序は53 c →53 d →53 a ＋53 b →53 f →53 e である。石材は頁岩(A)である。

54は 3 点の横長剥片が接合したものである。 3 点とも上部からの剥離である。54 c →54 b →54 a の順に剥離している。石材は凝灰岩である。

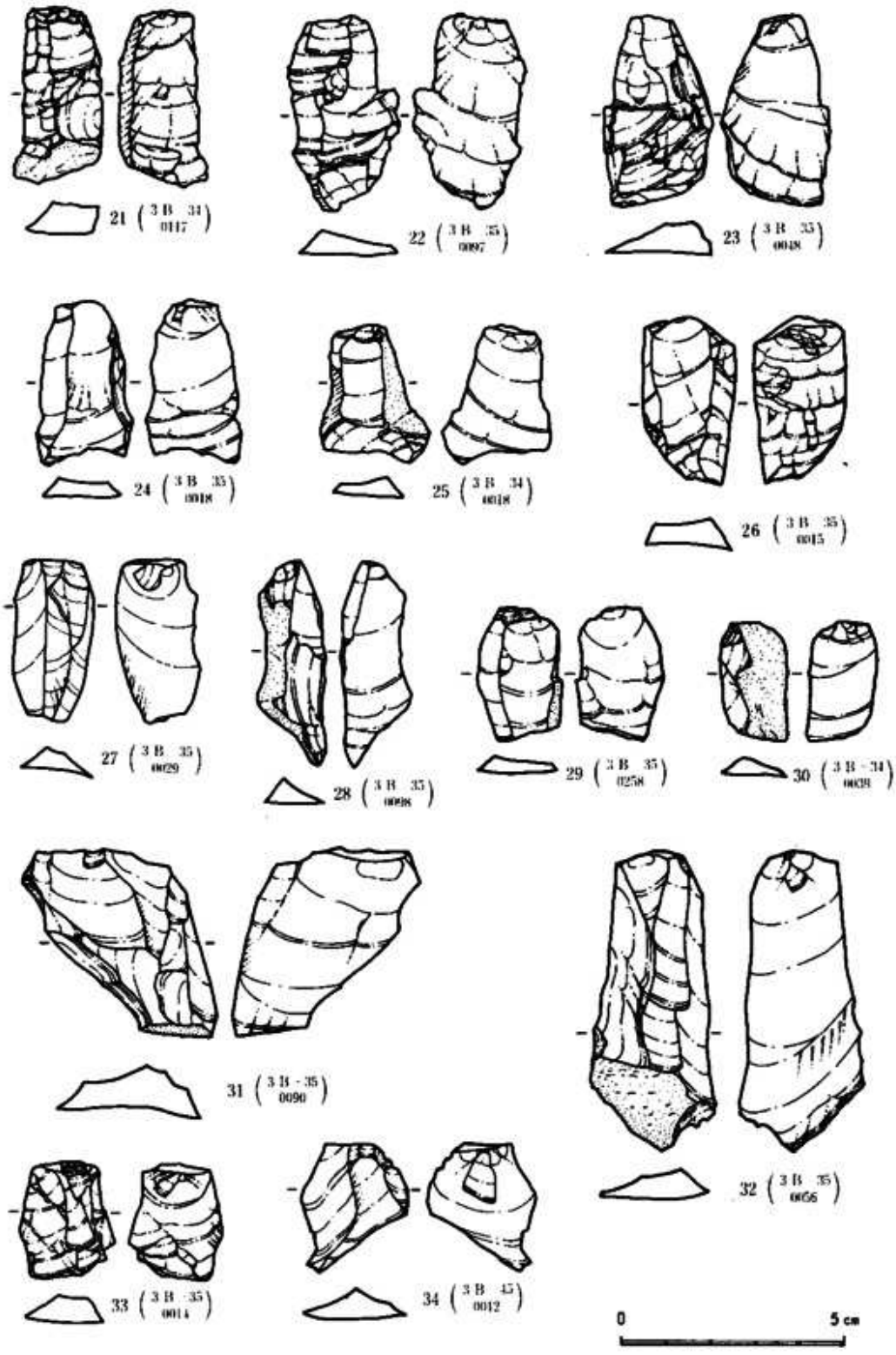
55は 8 点の不整形剥片が接合したものである。55 b・55 c・55 d は折損したものである。打面転位による剥離である。剥離の順序は55 a →55 h →55 f →55 g →55 b ＋55 c ＋55 d →55 e である。石材は頁岩(B)である。

56は 9 点の不整形剥片が接合したものである。打面転位による剥離である。剥離の順序は56 b →56 d →56 e →56 i →56 a →56 c →56 f →56 g →56 h である。56 c →56 f →56 g は同一方向で連続的に剥離している。石材は砂岩である。

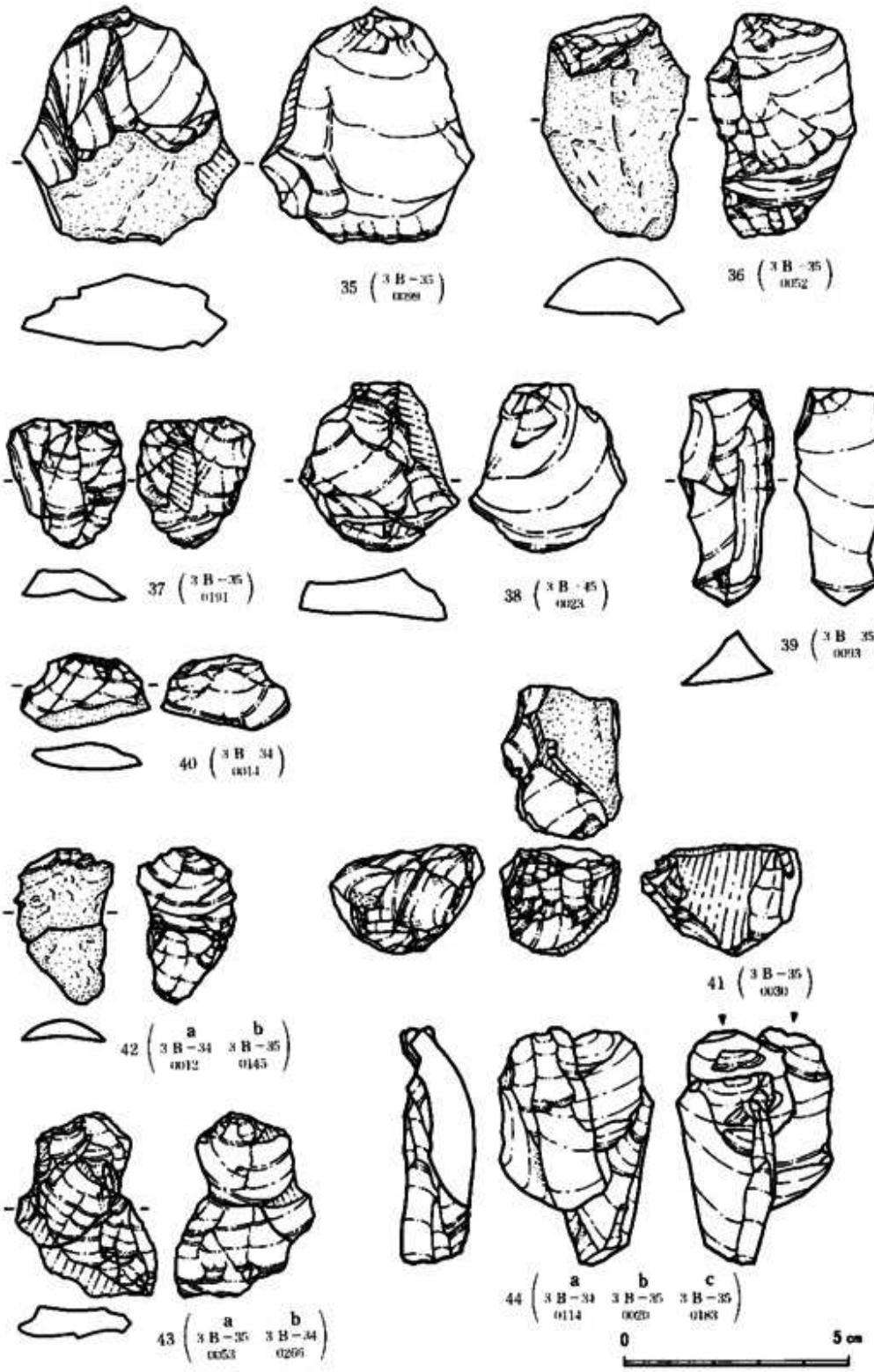
57は 6 点の剥片が接合したものである。57 e と57 f は打面調整剥片で、その他は縦長の目的



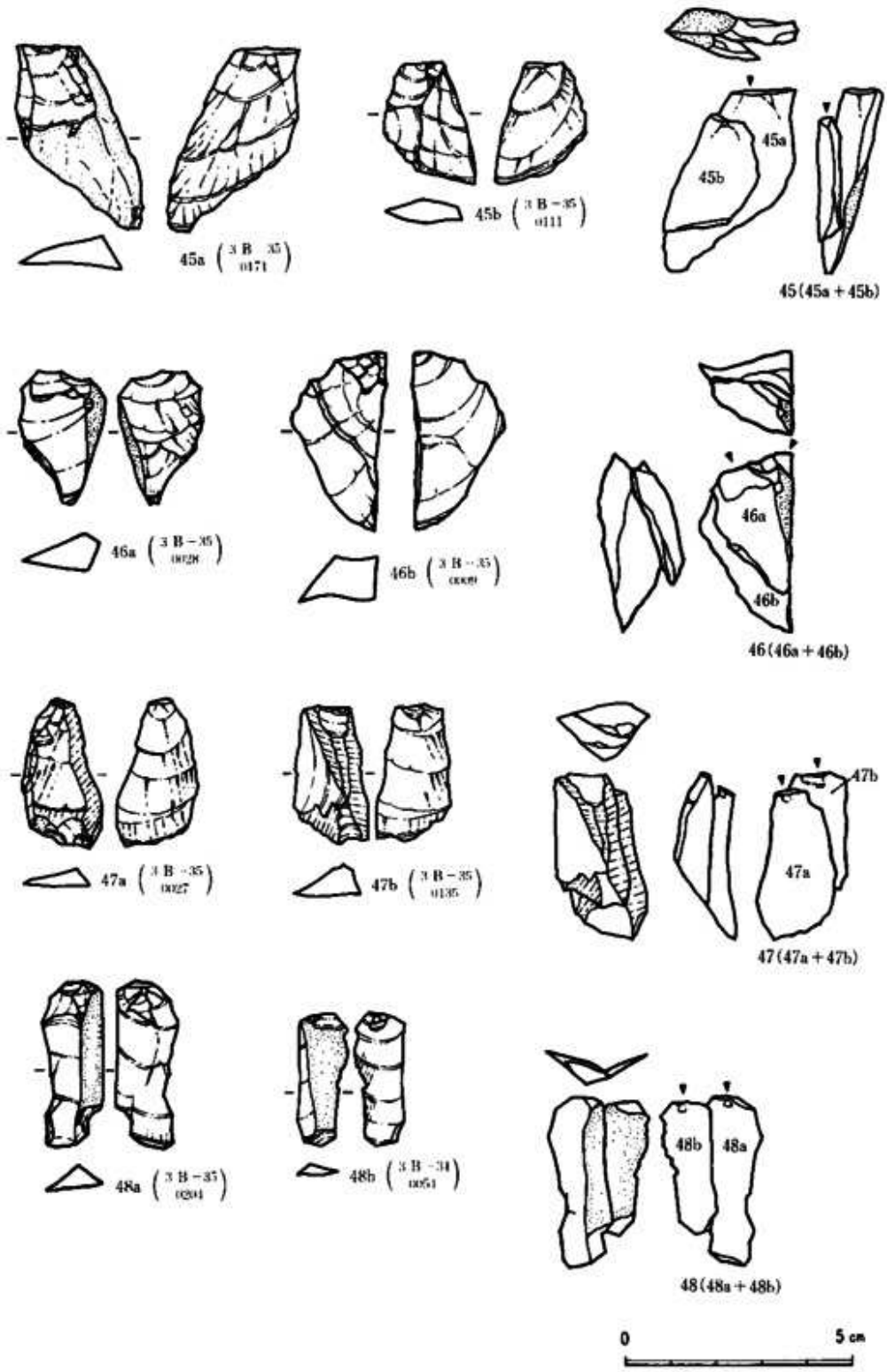
第9図　第1ユニット 出土遺物実測図(1)(2/3)



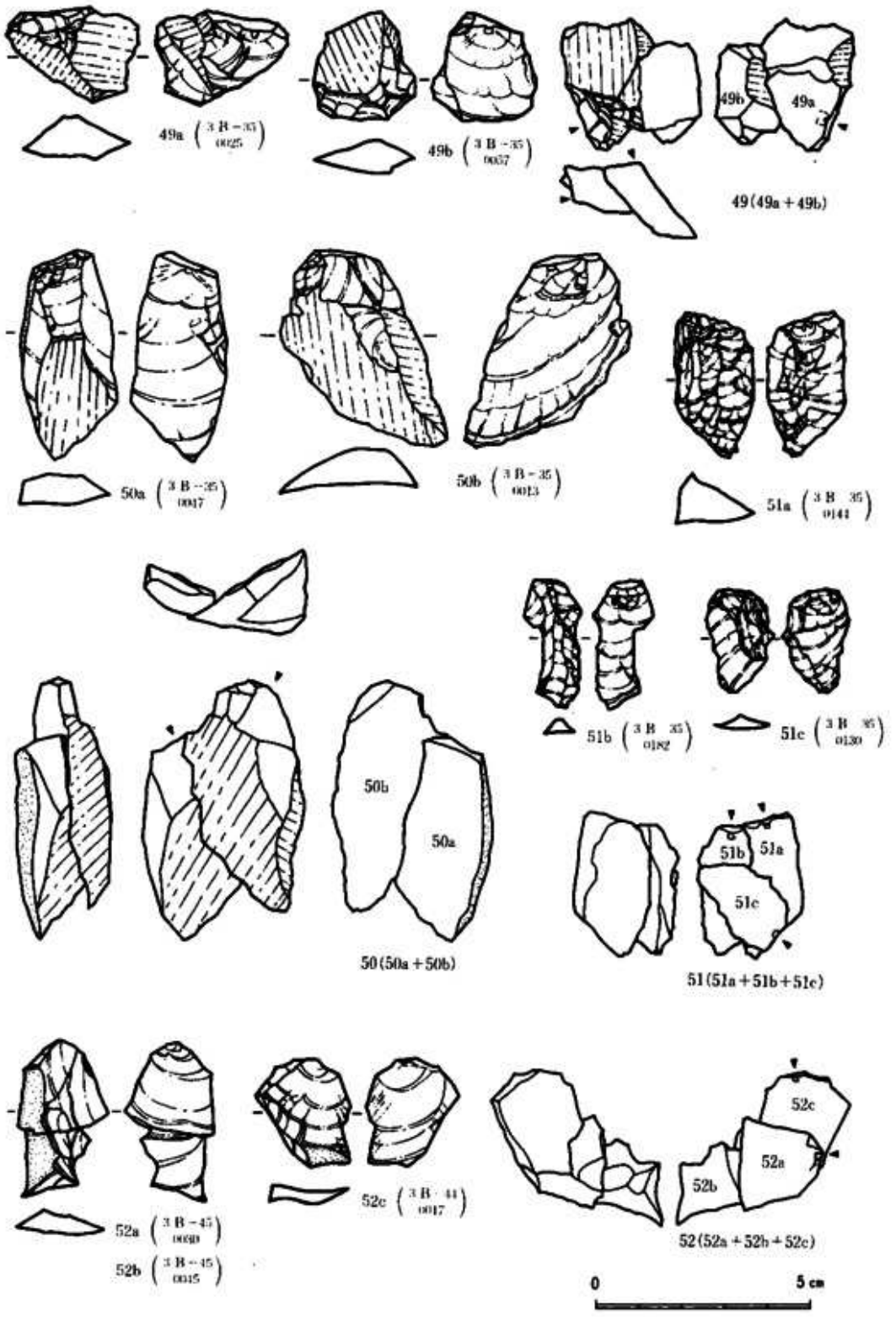
第10図　第1ユニット 出土遺物実測図(2) (2/3)



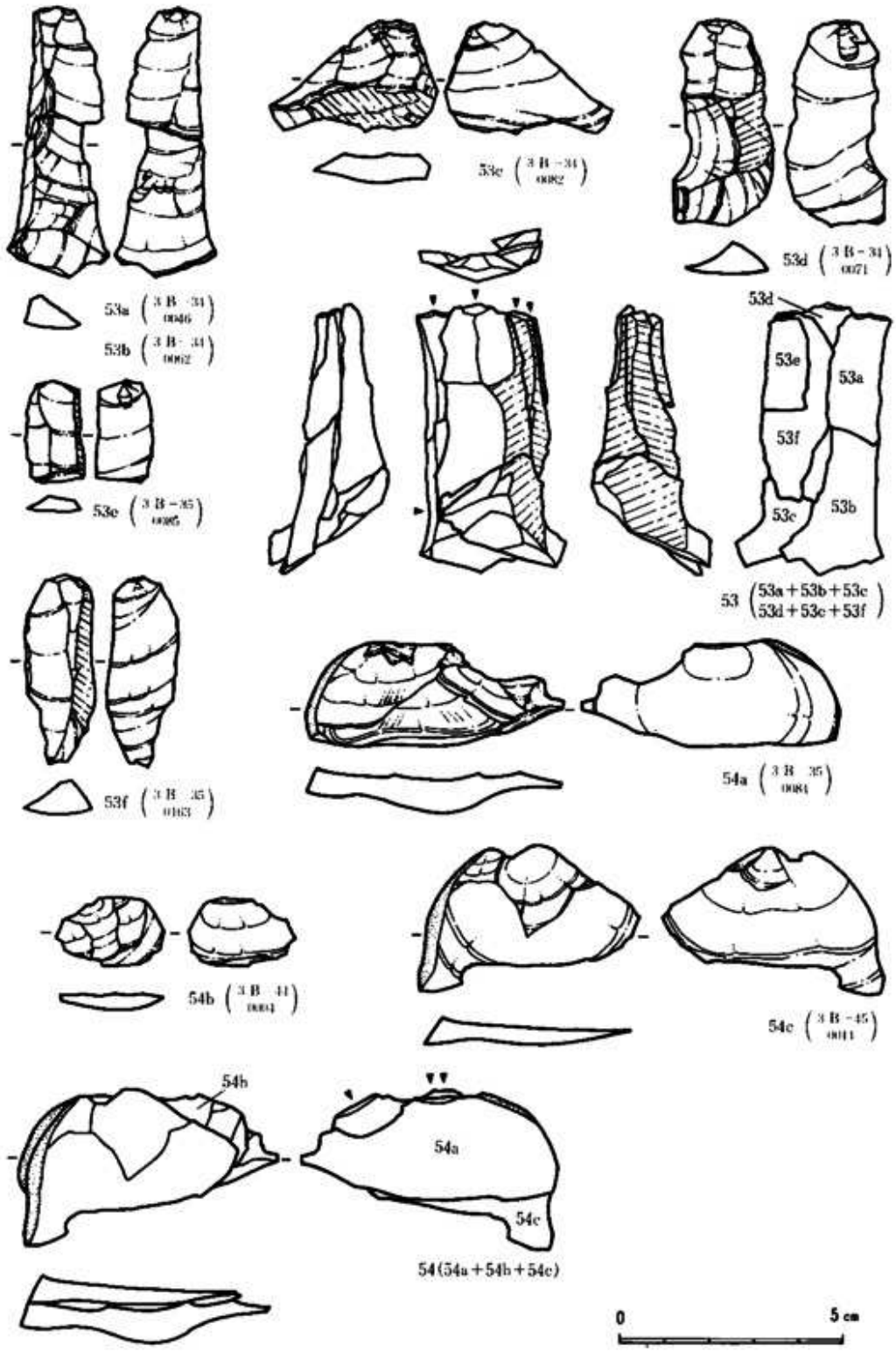
第11図 第1ユニット出土遺物実測図(3) (2/3)



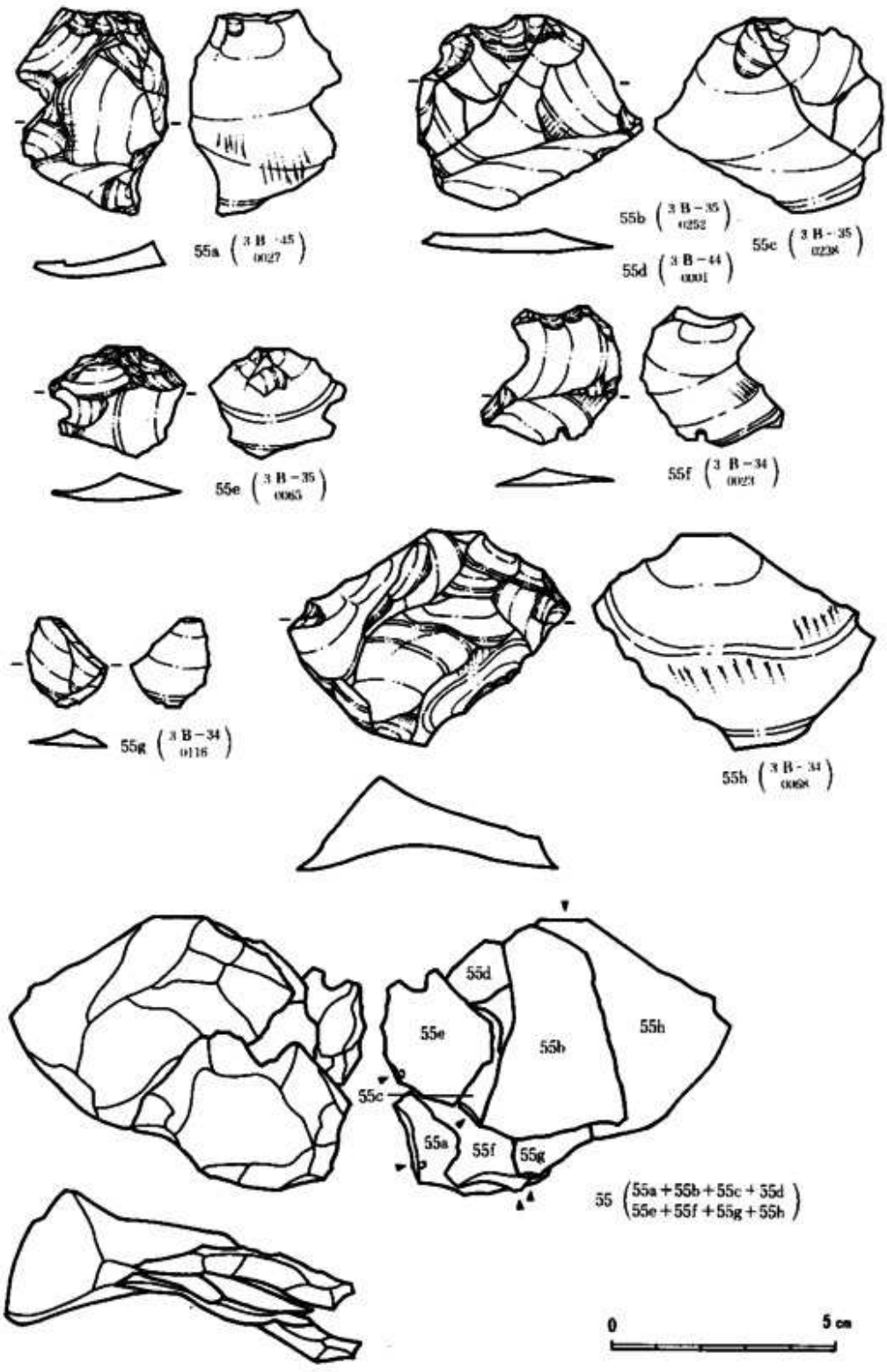
第12図 第1ユニット出土遺物実測図(4) (2/3)



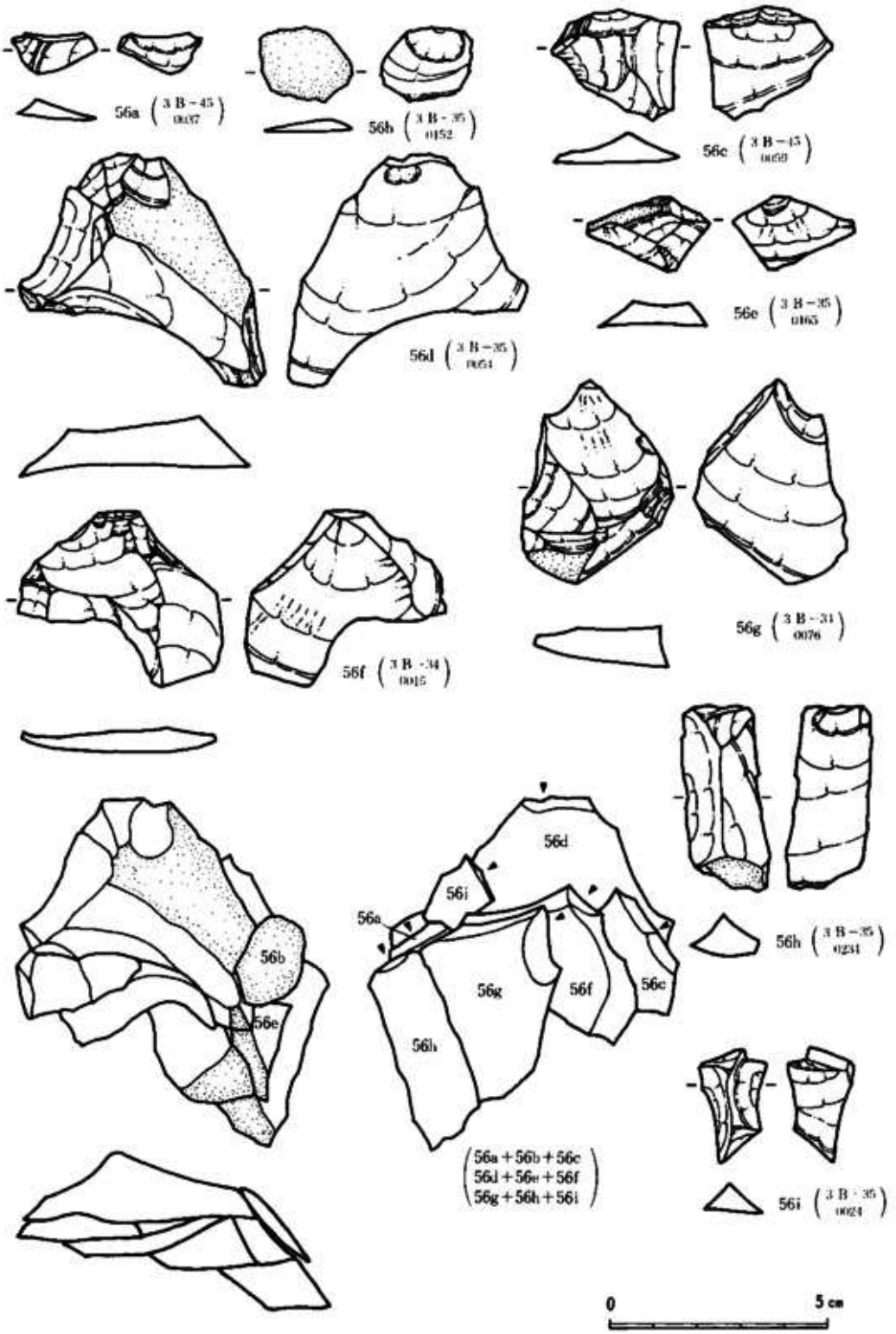
第13図 第1ユニット出土遺物実測図(5) (2/3)



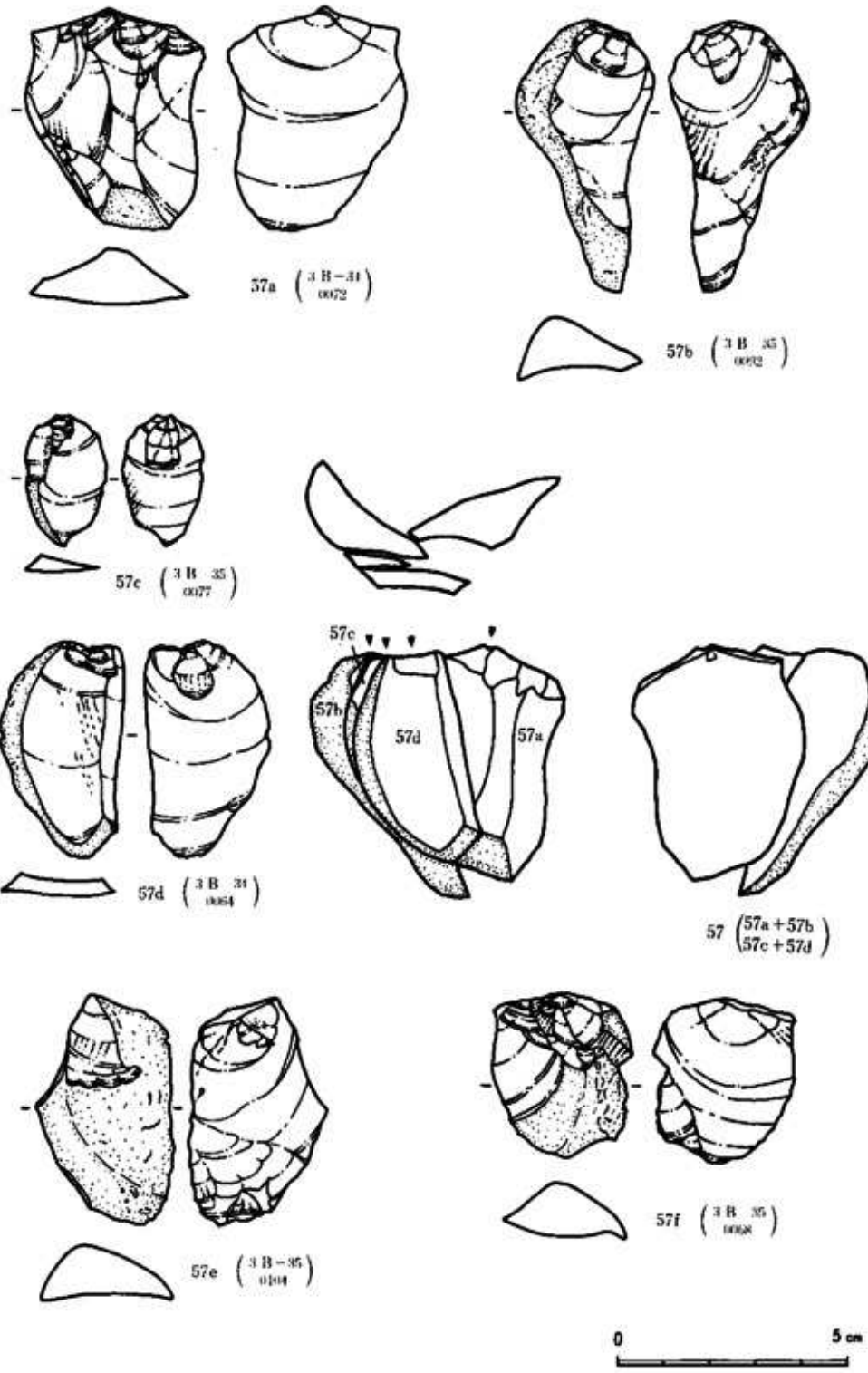
第14図 第1ユニット出土遺物実測図(6) (2/3)



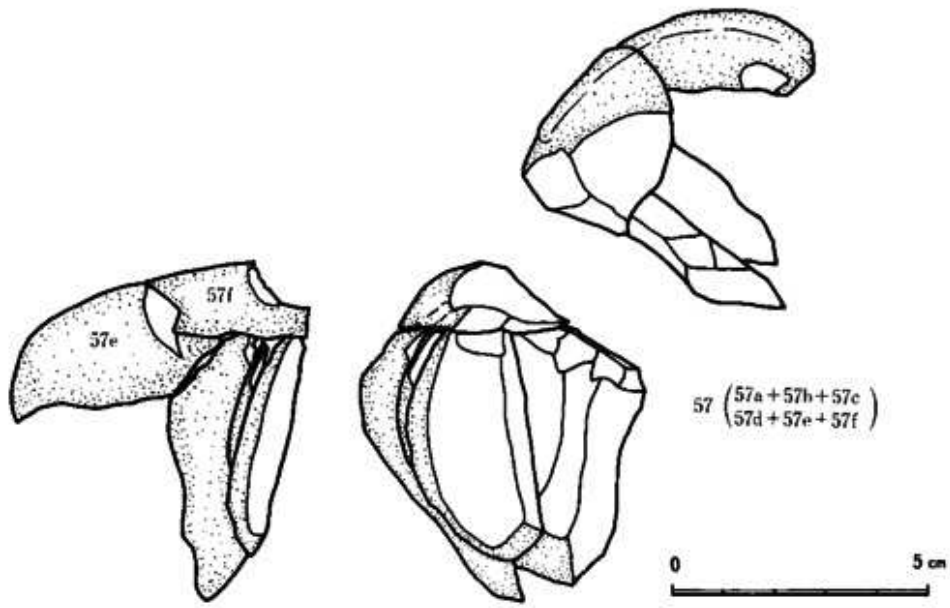
第15図 第1ユニット出土遺物実測図(7) (2/3)



第16図 第1ユニット出土遺物実測図(8) (2/3)



第17図 第1ユニット出土遺物実測図(9) (2/3)



第18図 第1ユニット出土遺物実測図(10)（2/3）

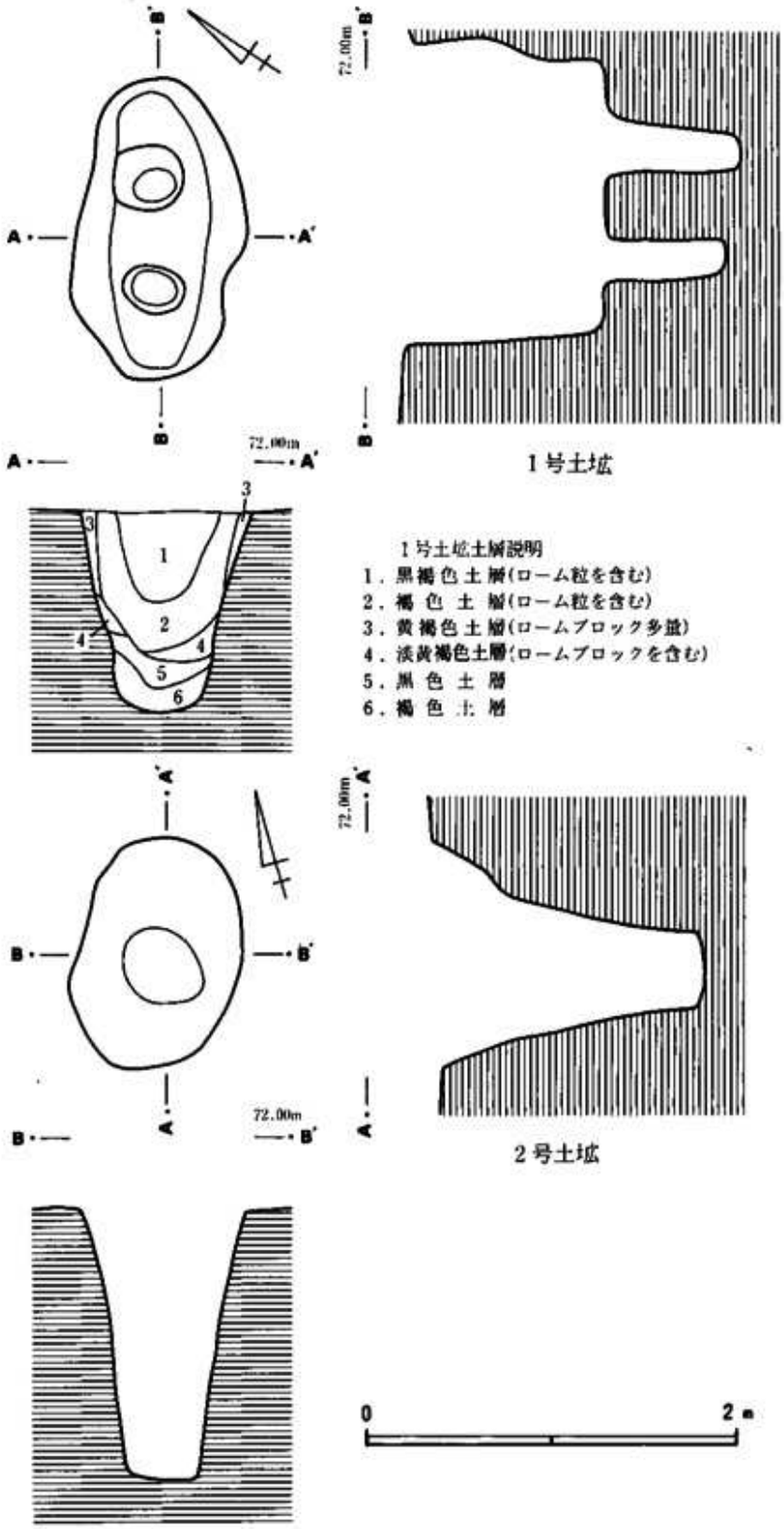
的剥片である。剥離の順序は57f→57d→57c→57b→57a→57eである。ここで注目すべき点は、剥離技法がある程度わかることである。まず、打面調整のために57fを剥離する。その剥離した面を打面にして57d→57c→57b→57aと連続的に剥離する。そして、打面がなくなったところで、新たに打面調整剥片を剥離する。それが、57eである。その剥離面を打面として、また同様に連続的に縦長の目的的剥片を剥離するのである。このように打面がなくなると、また打面をつくって縦長の目的的剥片を剥離するという技法で行っている。石材は頁岩(A)である。

2．その他の時代

i 遺構（第4図）

1号土坑（001）（第19図，図版11）

本土坑は落し穴である。台地の縁辺部4B－30グリッド内に位置し、標高約72mのところにある。長軸方向はN－52°－Eを指し、斜面のほうに向っている。開口部が長径1.62m，短径0.92m、底部が長径1.47m，短径0.52mを測る長楕円形の土坑である。ソフトローム層の上面で確認され、その面からの深さは1.05mを測る。断面形は底部でやや狭まり、「U」字形を呈する。長軸先端部の東壁においては少しオーバーハングする。底面は、若干中央で窪みをもつが、大体平坦である。また、そこには長軸方向に2個の小ピットが並んでいる。それぞれの規模は長径35cm，短径17cm，深さ70cmと長径32cm，短径24cm，深さ63cmである。ほぼ垂直に、かなり深く掘り込まれている。覆土は6層にわかれ、流れ込みによる堆積である。上部においては色調が黒みがかっている。小ピット内の覆土はローム粒を多量に含む土層である。な



1号土坑

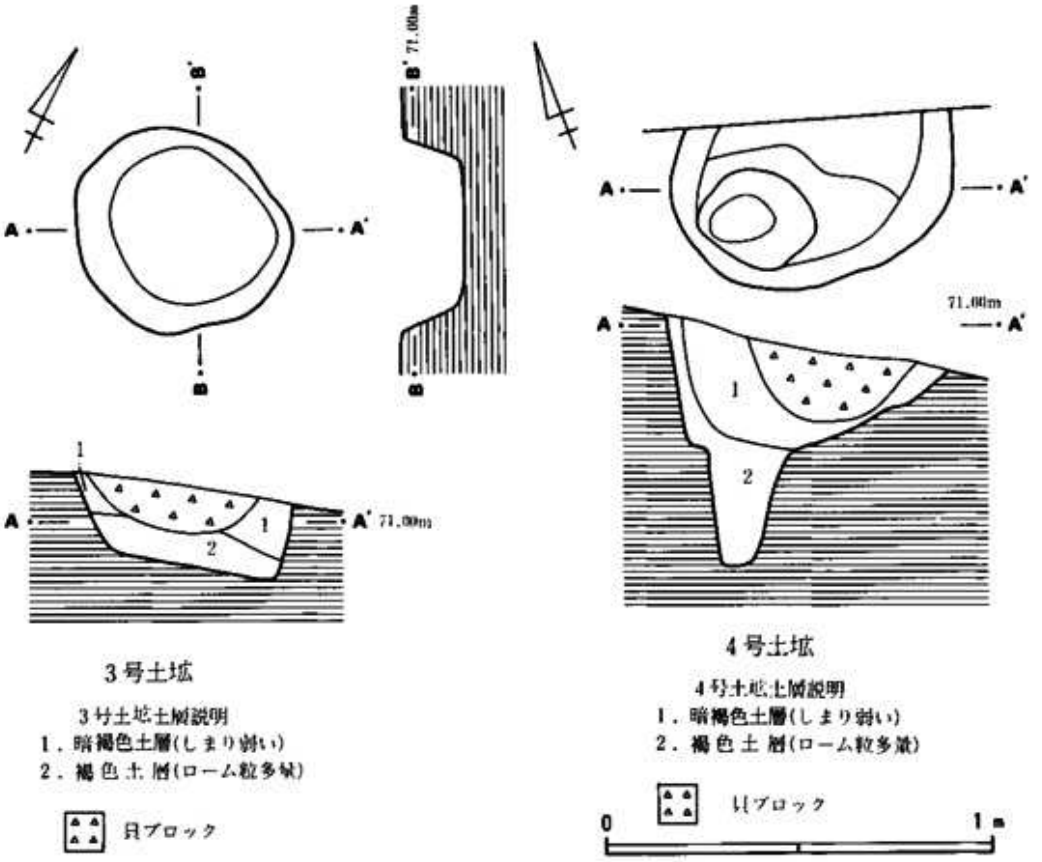
1号土坑土層説明

1．黒褐色土層(ローム粒を含む)
2．褐色土層(ローム粒を含む)
3．黄褐色土層(ロームブロック多量)
4．淡黄褐色土層(ロームブロックを含む)
5．黒色土層
6．褐色土層

2号土坑

0　2m

第19図　1・2号土坑実測図（1/40）



第20図　3・4号土坑実測図（1/20）

お、遺物は出土しなかった。

2号土坑（002）（第19図，図版11）

本土坑は台地の括れ部2A－92，2B－02の各グリッドにまたがって位置し、標高約72mのところにある。長軸方向はN－37°－Eを指し、谷のほうに向いている。開口部が長径1.25m，短径0.87m、底部が長径0.48m，短径0.37mを測る楕円形の土坑である。底部の長軸は、やや開口部の短軸方向を指している。1号土坑と同様、ソフトローム層の上面で確認され、その面からの深さは1.45mを測り、開口部の広さと比較すると、かなり深い。断面形は逆台形で、底面は平坦である。覆土は全体に黒味を帯びている。遺物は出土しなかった。

3号土坑（003）（第20図，図版11）

本土坑は貝ブロックを含む土坑である。台地の東側斜面部3B－00グリッド内に位置し、標高約71mのところにある。開口部が径 54 cm、底部が径 39 cmを測る円形の土坑である。第II層の新期テフラ上面で確認され、その面からの深さは 20 cm を測る。比較的浅く、ソフトローム層の上部までしか達していない。壁はやや外反しながら立ちあがり、断面形が「なべ底」状を呈する。底面は平坦で、軟質である。覆土は、3層に区分できる。上部全面に厚さ 12 cm の

貝ブロックがレンズ状に堆積している。本土坑から径2m程の範囲内にも貝が散布していた。

なお、貝の種類はイボキサゴを主体とし、アラムシロ，ウミニナ，ハマグリ，シオフキ等が少量である。(図版12)

4号土坑（004）（第20図，図版11）

本土坑は貝ブロックを含む土坑である。台地の東側斜面部3A－90，3B－00の各グリッドにまたがり、3号土坑から1m程北東へ下がったところにある。開口部が径74cm、底部が径57cmを測る円形の土坑である。第II層の新期テフラ上面で確認され、その面からの深さは21cmを測る。確認面は東へ傾斜する。西壁は急傾斜に、東壁は緩やかに掘り込まれている。底面には西壁寄りに1個の小ピットがある。規模は長径31cm，短径24cm、深さ30cmを測る。底面は西寄りに傾斜している。覆土は3層に区分できる。東壁寄りの上部に厚さ18cmの貝ブロックがレンズ状に堆積している。貝の種類は3号土坑と同様にイボキサゴが主体である。

なお、路線内に設定された道路中心杭（№528）が本土坑の北側にかかるため、その部分は未調査である。

ii グリッド出土遺物（第21図，図版12　1～6）

調査した遺構内においては第3・4号土坑から出土した貝以外に遺物がみられなかったので、ここでは遺構外出土の遺物を掲載することにする。

1は縄文時代中期（加曽利EI式(注1)）の胴部片である。粗い単節RLの原体を縦位に回転し、その上に半截竹管による4条の平行沈線懸垂文が施されている。外面には、調査時に損傷した傷跡が大きく残っている。胎土は小石を多量に含む。

2は縄文時代中期（加曽利EII式）の胴部片である。地文は、縦回転による単節RLの斜縄文である。文様は、沈線で区画された磨消懸垂文が2条見られ、その磨消部内には1条の沈線が懸垂されている。なお、二次焼成があったと見え内面にススが付着している。

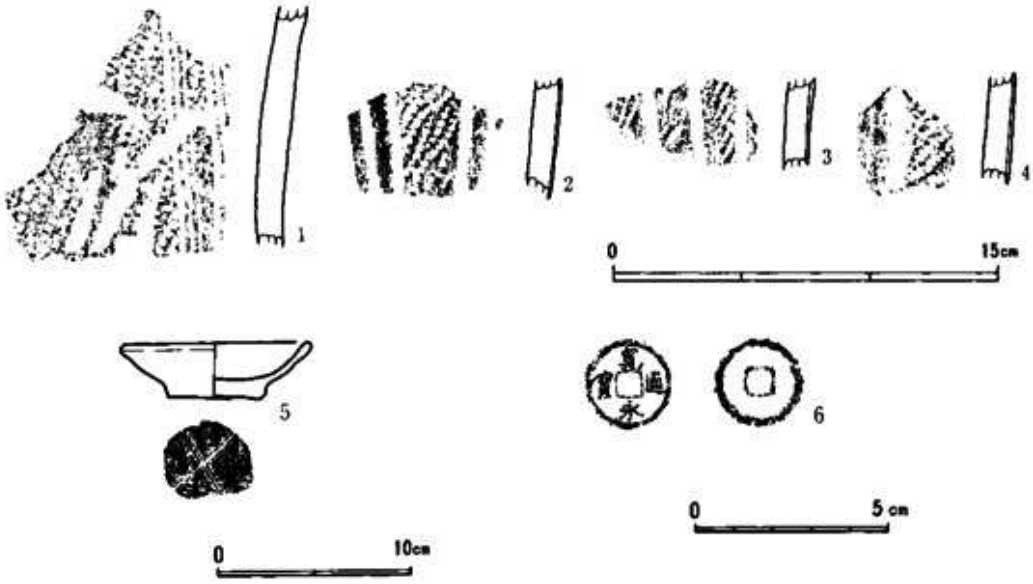
3は縄文時代中期（加曽利EII式）の胴部片である。地文は、縦回転による単節RLの斜縄文である。文様は、沈線で区画された磨消懸垂文が2条見られる。

4は縄文時代中期（加曽利EII式）の胴部片である。地文は、縦回転による単節RLの斜縄文である。文様は、沈線で区画された磨消懸垂文が1条見られる。

5は、かわらけである。器高2.8cm，口径9.6cm，底径4.7cmを計る。器形は底部から外反しながら立ち上り口唇部で丸味をもつ。調整は内外面ともヘラミガキであるが、外面のほうがやや粗い感じがする。口唇部はヨコナデが施されている。底部は回転糸切りの後、丁寧なヘラナデが施され、大きく「X」字形のヘラ描きがある。

6は古銭である。径2.3cmを計り、中央に一辺0.6cmの方形孔を有する寛永通宝である。

（注1）加曽利E式の区分は3期区分にした。以下、大木戸・板倉町の2遺跡においても同様である。



第21図 グリッド出土遺物拓影・実測図 (1/3・1/4・1/2)

第4節 ま と め

調査の結果、本遺跡において検出された遺構は先土器時代の遺物集中地点1ケ所、縄文時代の土坑2基、古墳時代以降の土坑2基である。

本遺跡における発掘調査区域が台地の縁辺部で、しかも対象面積が少ないこともあって検出された遺構および遺物は少なかった。

なお、詳細については以下のとおりである。

先土器時代

台地の東側、標高72mの縁辺部に南北5.7m，東西4.6mの範囲内で495点の遺物を出土した。その中に石器も含まれ、ナイフ形石器4点，グレイバー1点，スクレイパー1点を出土した。また、多くの接合資料が得られ、ある程度剥離技法を解明することができた。石材は、全体の約80%が頁岩である。出土層位は第III層である。では、ここで特筆すべき点をかかげておこう。

まずナイフ形石器についてである。4点とも（第9図1～4）すべて縦長剥片を素材とした良好な資料である。器長が3.5cm前後と統一されている。おそらく、第10図27のような長さ4cm前後の石刃状の縦長剥片を素材として調整したものであろう。

本資料において、両縁調整のもの（1・3・4）と部分調整のもの（2）がある。また、右側に素材の縁辺を残すもの（1～3）と左側に素材の縁辺を残すもの（4）とがある。何故に異なるのであろうか。

次に剥片である。剥片は長さが2cm前後の縦長剥片と4cm前後の縦長剥片とに分れる。最初、4cm前後の縦長剥片を剥離し、石核が小さくなった段階で、2cm前後の縦長剥片を剥

離している。

また、第1ユニットにおいて数多くの接合資料を得た。第18図57の接合資料において、ほぼ剝離技法が解明できる。

第22図は剝離技法の模式図である。以下、この図に基づいて説明を加えたい。

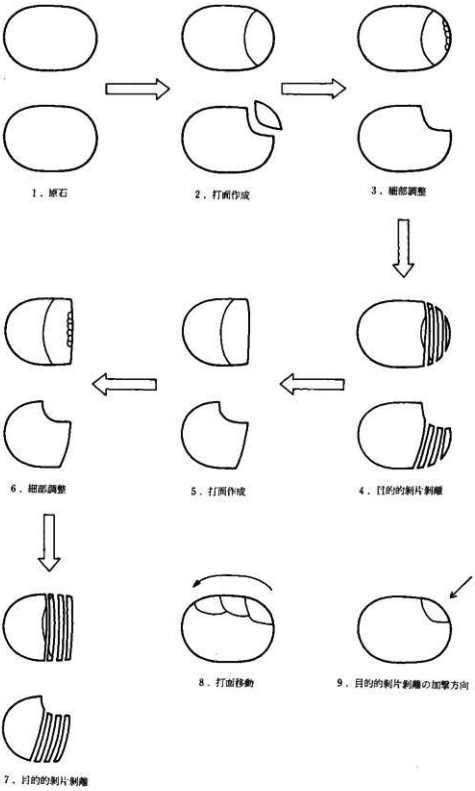
まず2で打面をつくる。3．目的的剝片を剝離するために打面の縁辺に細部調整を行う。4．縦長の目的的剝片を剝離する。5．打面がなくなったところで、剝離した角を利用し、打面をつくる。6．3と同様打面の縁辺に細部調整を行う。7．4と同様に縦長の目的的剝片を剝離する。以下、5→6→7の作業を繰り返す。なお、打面の移動は8のとおり回転する。9は目的的剝片を剝離するための加撃方向を表す。なるべく、大きな縦長の剝片を剝離しようと、石核の中央方向に打撃している。以上のように、打面を回転しながら目的的剝片を剝離している。

先土器時代に関しては良好な資料を得た。ところで、本遺跡が所在する瀬又周辺において、先土器時代の資料の報告は未だなされていない。したがって、今回報告した本遺跡と次章で報告する瀬又南遺跡で良好な資料を得たことは画期的なことである。おそらく、遺跡周辺においても、先土器時代の遺構および遺物が検出されるであろう。今後の資料の増加を待ちたい。

その他の時代

土坑4基の遺構を検出した。1・2号土坑については、立地場所および、形態から判断して、縄文時代の落し穴であろう。縄文時代のある時期、この付近では狩猟の場として使われていたのであろう。3・4号土坑については、新期テフラから掘りこんでいるので、古墳時代以降の土坑であろう。なお、3・4号土坑にはイボキサゴを主体とした貝ブロックが混入していた。貝以外には時代を決定し得る遺物はなく、漠然とした時代範囲を示さざるを得ないが、いずれにしてもこのような貝類を廃棄することは、居住地域より遠く離れた所とは考えられず、この付近に居住地が存在するものと思われる。

遺物は、遺構に伴うものはなく、遺構外から出土したものを少量得た。縄文時代中期の土器片とかわらけ、古銭等である。



第22図 剥片剥離過程模式図

瀬（せ）又（また）南（みなみ）遺跡

（219－018）

第3章　瀬又南遺跡

第1節　立　　地（第3図，図版13）

瀬又南遺跡は、市原市瀬又字小咲台1017他に位置する。

本遺跡は、前章で記載した瀬又北遺跡の谷を挟んでその南側の台地上にある。

遺跡が立地する台地は、北側と南側に小支谷が侵入し、南西へ延びる尾根状の台地である。台地の中央は平坦で、標高74mを測る。北側斜面は急激に、南側斜面は緩やかに谷に向って傾斜している。北側の谷の低湿地との比高差は、約27mである。遺跡の南約500mのところに村田川が西流している。

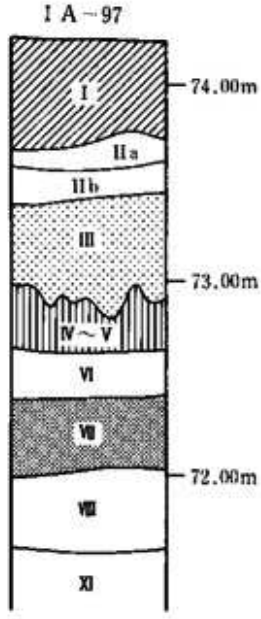
調査区域は、台地のやや西側の平坦部74m前後の高さのところで、南北に台地を横切る路線内3,150㎡である。

調査前の状況は、台地縁辺部に松の植林、平坦部に雑木と篠類でおおわれていた。

この台地の基部には、縄文時代の西古坂遺跡（第1図5）がある。

第2節　層　　序

瀬又南遺跡の層序は第25図のとおりである。1A－97グリッドの南壁断面を標準層序とした。



第25図 標準層序（1/40）

第I層　表土層。黒褐色を呈し、雑木，篠類の根が侵入している。

第II層　台地の平坦部で2層に区分できる。IIa層は褐色を呈し、新期テフラと呼称されている土層である。IIb層は暗褐色土層で縄文時代の遺物を包含している。

第III層　黄褐色軟質ローム層。いわゆるソフトローム層である。

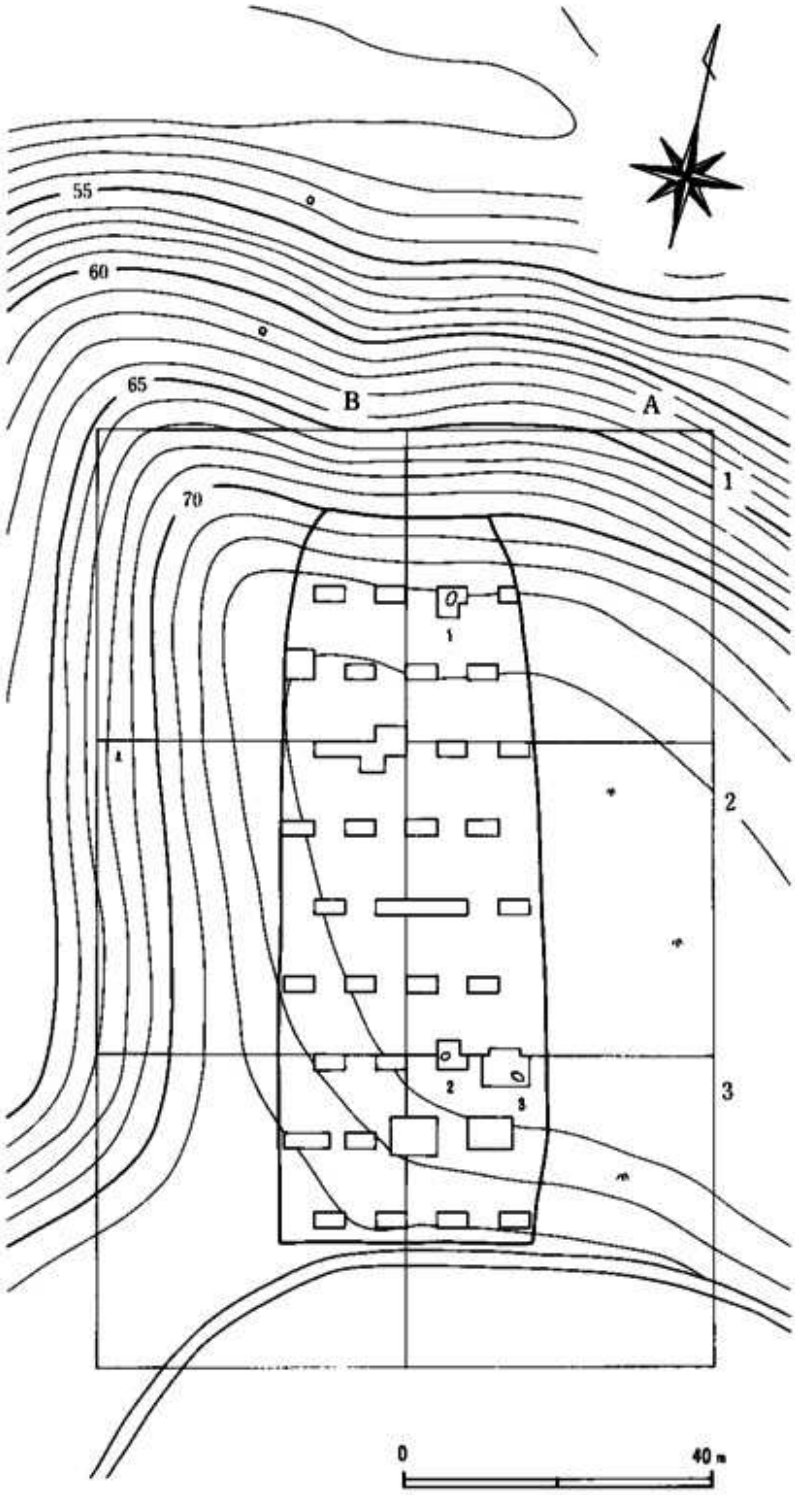
第IV～V層　黄褐色硬質ローム層。IV層とV層の区分は不明確である。

第VI層　黄褐色硬質ローム層。IV～V層よりも明るい。姶良，丹沢パミスは明確に認められない。

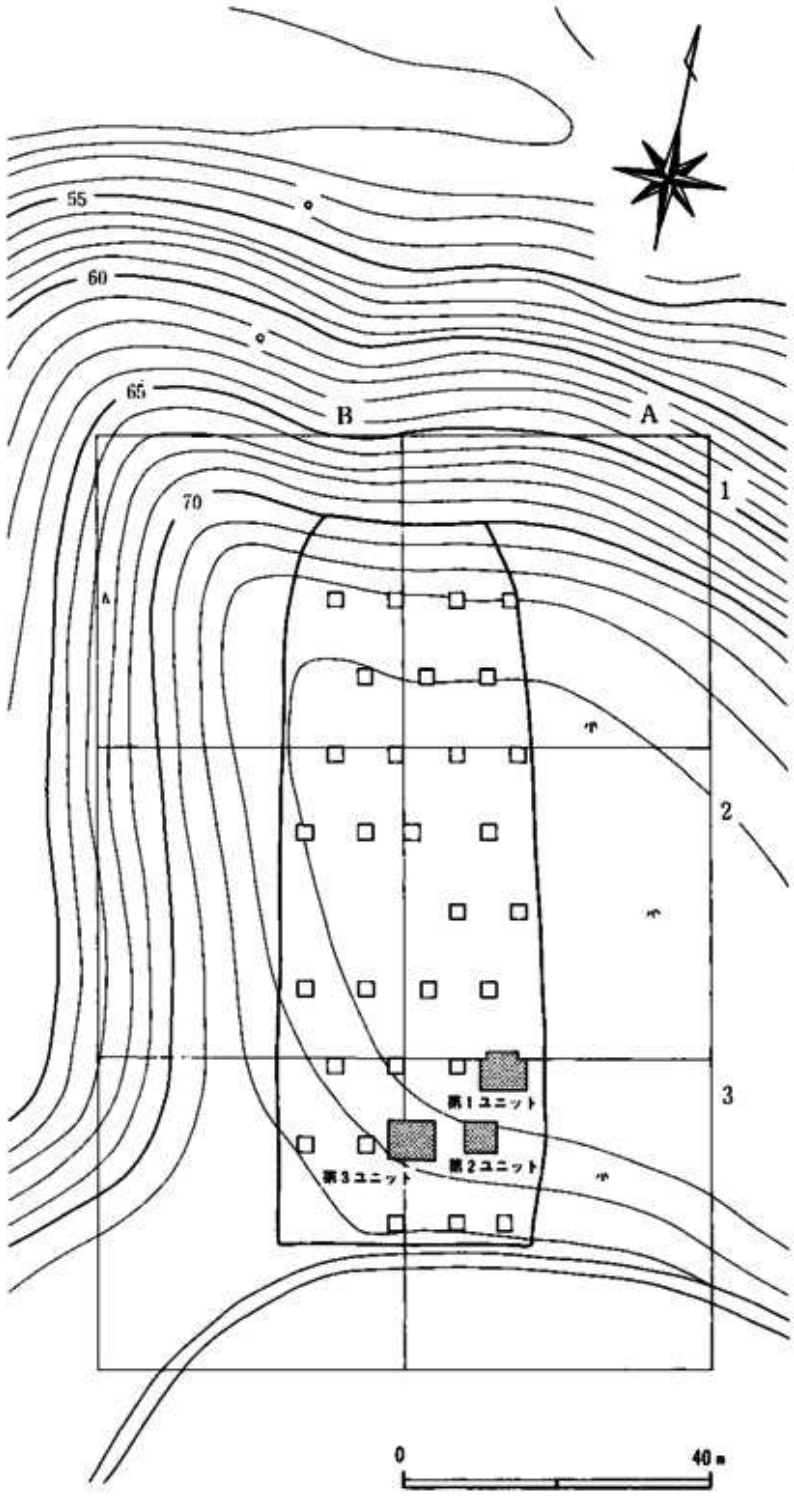
第VII層　褐色ローム層。スコリアを多量に含む。

第VIII層　褐色ローム層、VII層よりもやや薄い。

第IX層　淡褐色ローム層。軟質で少し青みを帯びる。この層以下武蔵野ローム層となる。



第23図 グリッド配置図及び遺構分布図（1/1000）



第24図 グリッド配置図及び先土器時代調査区図 (1/1000)

第3節　遺構と遺物

1．先土器時代（第24図）

本遺跡において先土器時代の遺物を出土した地域は、東から西へ延びる尾根状台地の南側縁辺部である。その出土グリッドを示すと、3A－60・70・72・92・93，3B－02・03である。そこは、南へ緩やかに傾斜し、標高73～74mを側る。

調査の結果　3つのユニットを検出した。それぞれの層位は、第1ユニットが第Ⅲ層、第2ユニットが第Ⅶ層、第3ユニットが第Ⅵ～Ⅶ（上部）層である。

検出された各ユニットの出土状況および出土遺物は以下のとおりである。

第1ユニット

出土状況（第26図，図版13）

本ユニットは、尾根状台地南側の縁辺部、3A－60・70の各グリッドにまたがって分布する。規模は南北3.3m，東西3.7mで、主に3A－60グリッドの西側に集中している。遺物の出土層位は第Ⅲ層である。

出土遺物（第27図，図版15）

総数は26点である。石核が3点で他は剝片および砕片である。石材別に分類すると、安山岩13点，流紋岩質凝灰岩11点，頁岩2点である。本ユニットにおいては、安山岩と流紋岩質凝灰岩が主体である。

剝片類（1～3）

1と2は打面調整剝片である。しかし、下端部に細部調整がみとめられることから、スクレイパーの可能性もある。両方とも器形を同じくし、表面は大部分に自然面を残す。石材はともに安山岩である。

3は頁岩の不整形剝片である。

石核（4・5）

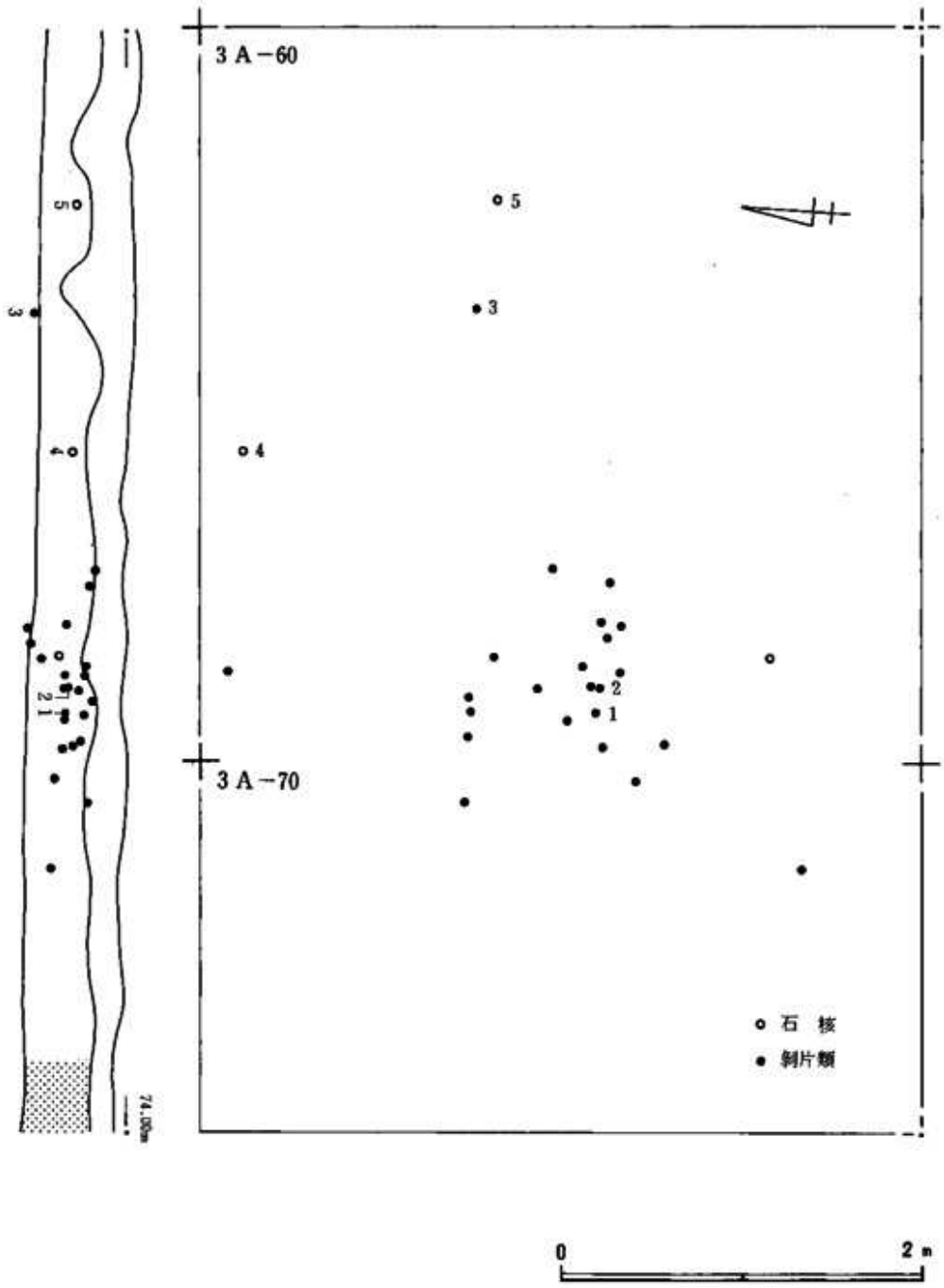
4・5ともに円盤状を呈する石核である。打面転移によって多方向から剝離されている。石材はともに安山岩である。

第2ユニット

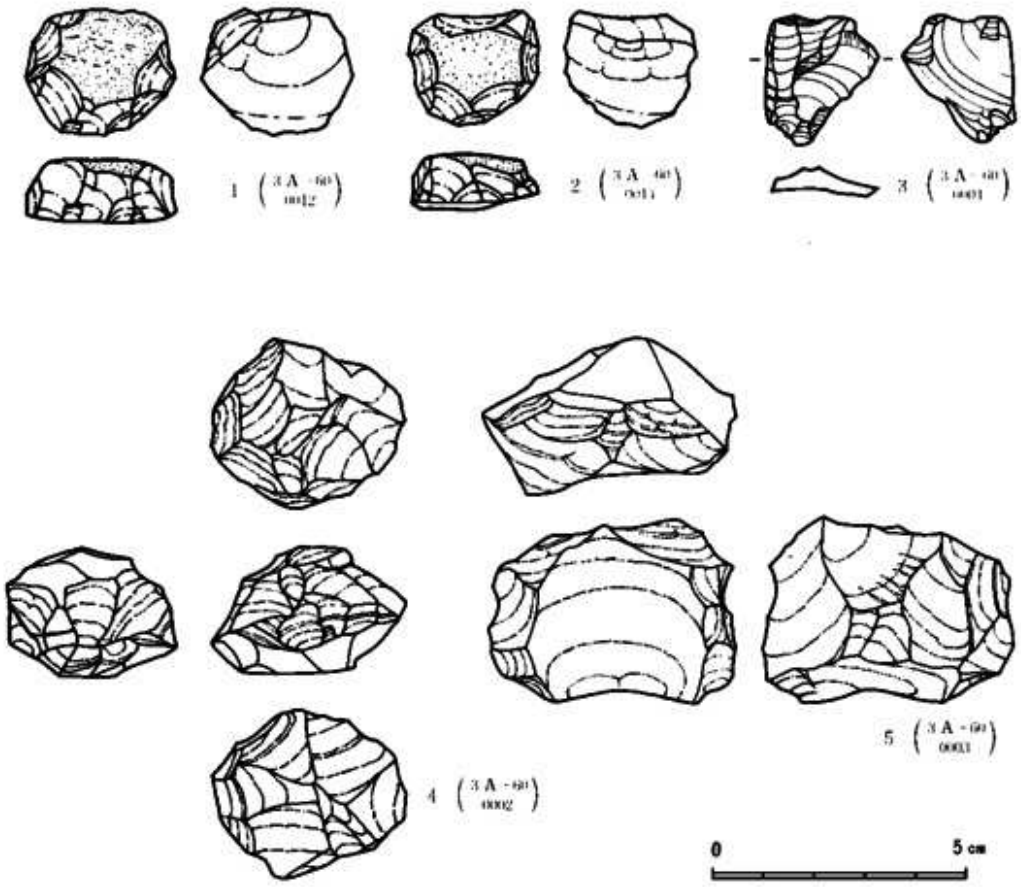
出土状況（第28図，図版14）

本ユニットは第1ユニットの南約8m、3A－72グリッド内に分布する。規模は南北2.9m，東西2.3mである。遺物の出土層位は第Ⅶ層である。なお本ユニットの層序においては、第Ⅵ層が明確に区分できなかったので、第Ⅳ～Ⅴ層からすぐ下を第Ⅶ層にした。

出土遺物（第29・30図，図版15～17）



第26図 第1ユニット遺物出土状況図 (1/40)



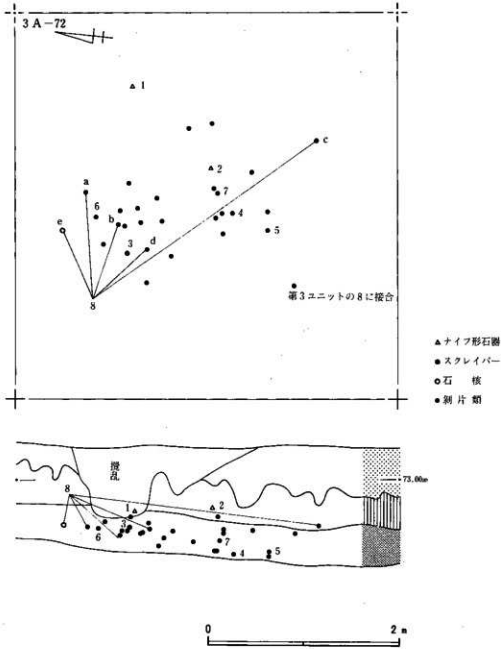
第27図 第1ユニット出土遺物実測図 (2/3)

総数は31点である。そのうちわけは、ナイフ形石器2点，スクレイパー1点，石核1点，剥片および砕片27点である。接合資料は2個得られた。そのうち1つは第3ユニットから出土した遺物に接合するものである。(第32図8) 石材別に分類すると、安山岩17点，頁岩7点，メノウ4点，流紋岩1点，珪質頁岩1点，不明1点である。ここでも安山岩が主体である。

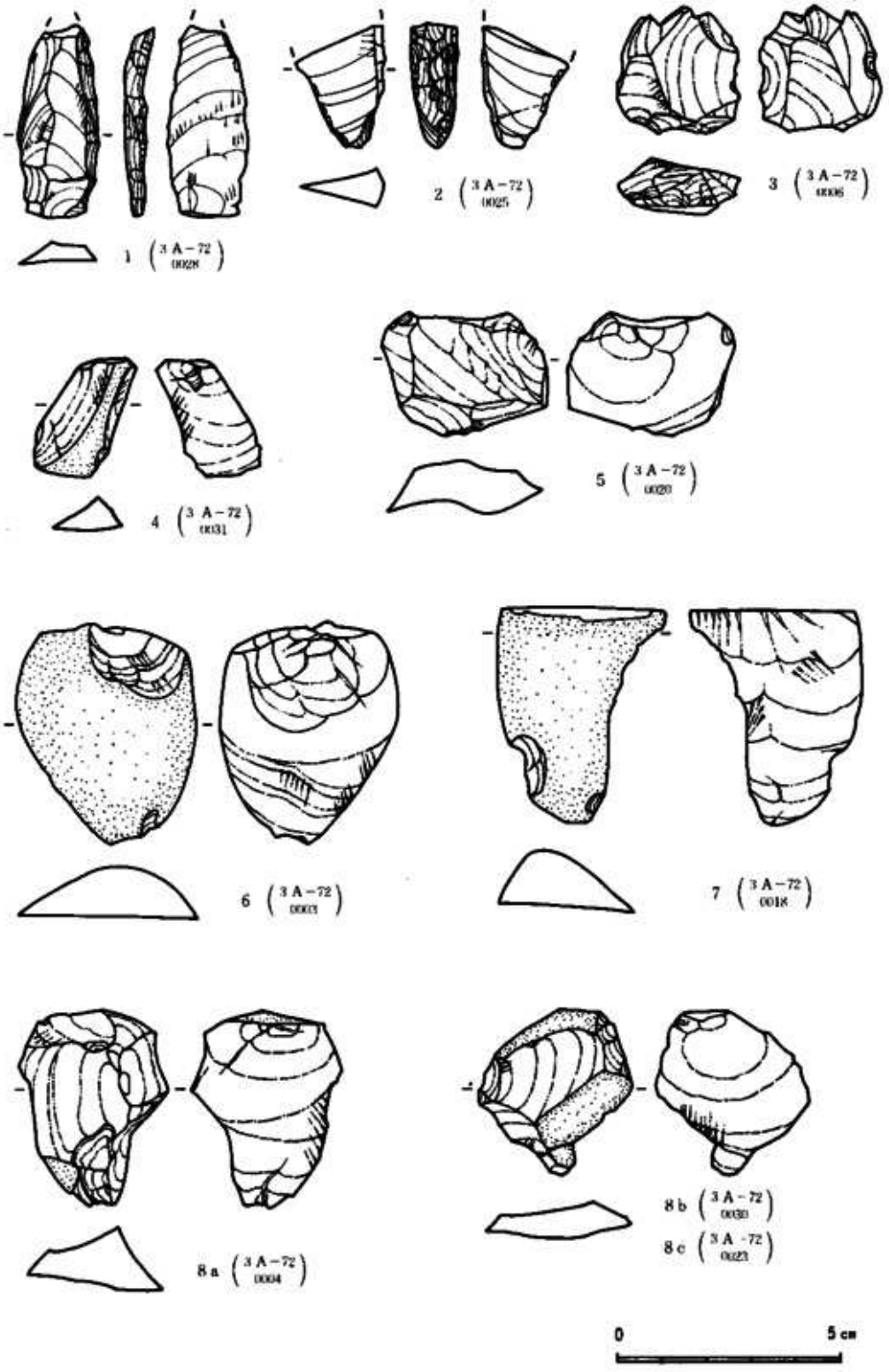
ナイフ形石器（1・2）

1は縦長剥片を片縁調整したナイフ形石器である。先端が欠損している。右側縁に急斜度のブランティングを施し、左側に素材の縁辺を残している。その左側縁には一部使用痕が認められる。基部に打面を有する。石材は頁岩である。現長4.3m，器幅1.8m，器厚 0.6 cm。

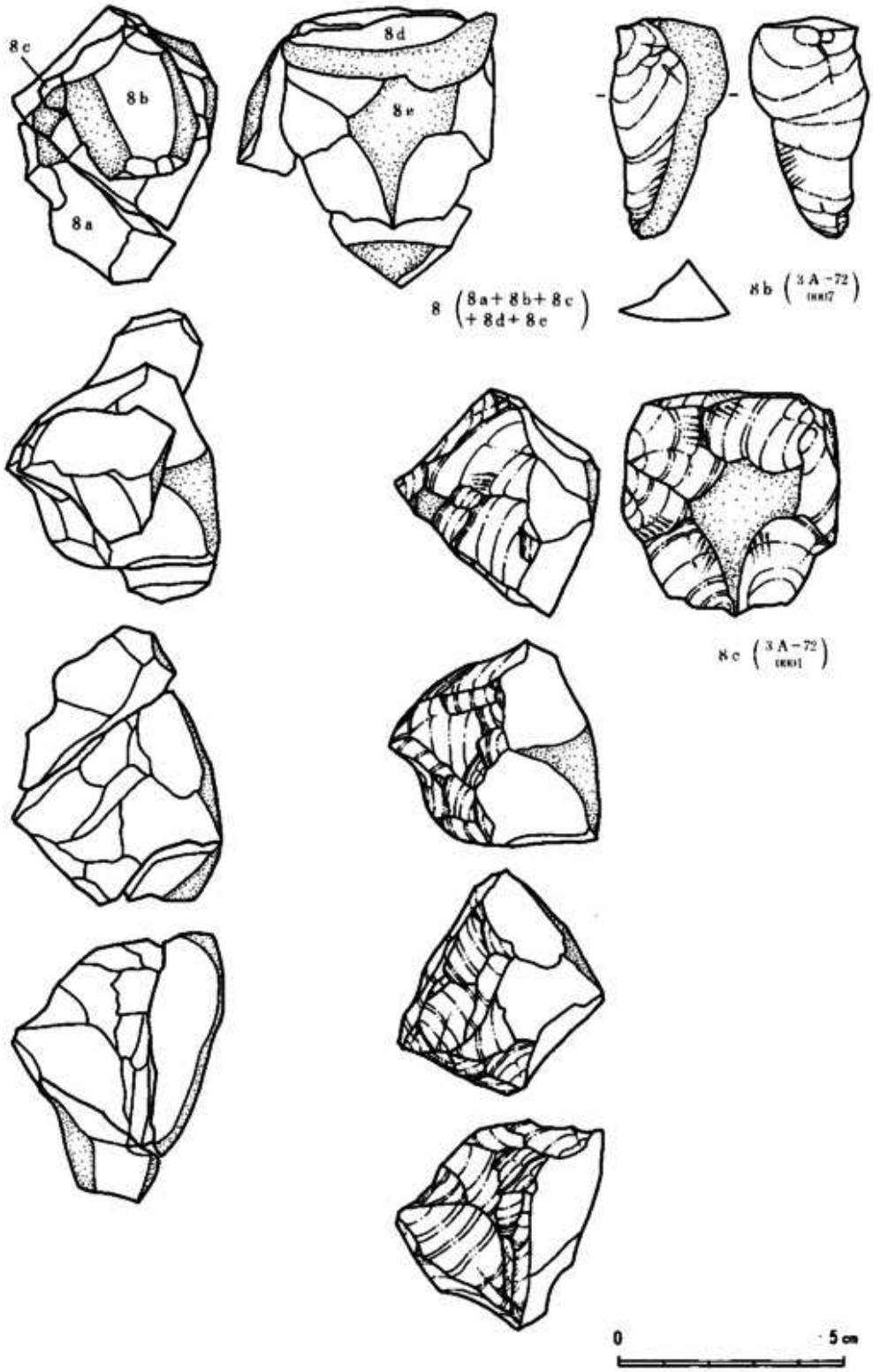
2は縦長剥片を調整したナイフ形石器である。基部のみの残存である。右側縁には表裏からのブランティングが見られる。左側は素材の縁辺を残している。そこには一部使用痕が認められる。上半分を欠損しているが、先端を打面としている。石材は頁岩である。現長 2.7 cm，現幅 1.9 cm，現幅 0.9 cm。



第28図 第2ユニット遺物出土状況図 (1/40)



第29図 第2ユニット出土遺物実測図(1) (2/3)



第30図 第2ユニット出土遺物実測図(2) (2/3)

スクレイパー（3）

3は円盤形のスクレイパーである。下端部に急斜度の細部調整を施している。石材は頁岩である。器長 2.8 cm，器幅 2.6 cm，器厚 1.0 cm。

剥片類（4～7）

4は頁岩の縦長剥片である。表面の中央に自然面を残している。

5はメノウの不整形剥片である。やや横長の器形をしている。

6・7は同一個体から剥離したと思われる縦長剥片である。両方とも表面の大部分に自然面を有する。石材は安山岩である。

接合資料（8）

8は1点の石核に3点のやや縦長の不整形剥片と1点の砕片が接合した資料である。剥離した順序は不明であるが、打面を回転しながら剥離していることがわかる。8aと8bは同一方向から剥離しているのに対し、8dは90°転位して剥離している。石材は安山岩である。この個体から石器を製作したと思われるが、本ユニットから出土していない。おそらく、石器のみを所持して移動したのであろう。

第3ユニット

出土状況（第31図，図版14）

本ユニットは第2ユニットの西約9m、3A—92・93，3B—02・03の各グリッドにまたがって分布する。この付近の地形は南側に緩やかに傾斜している。規模は南北4.3m，東西5.1mである。遺物の出土層位断面図を見ると、第III層から第VII層にわたって投影されているが、遺物の密集度および接合資料から判断すると、第VI層から第VII層（上部）である。

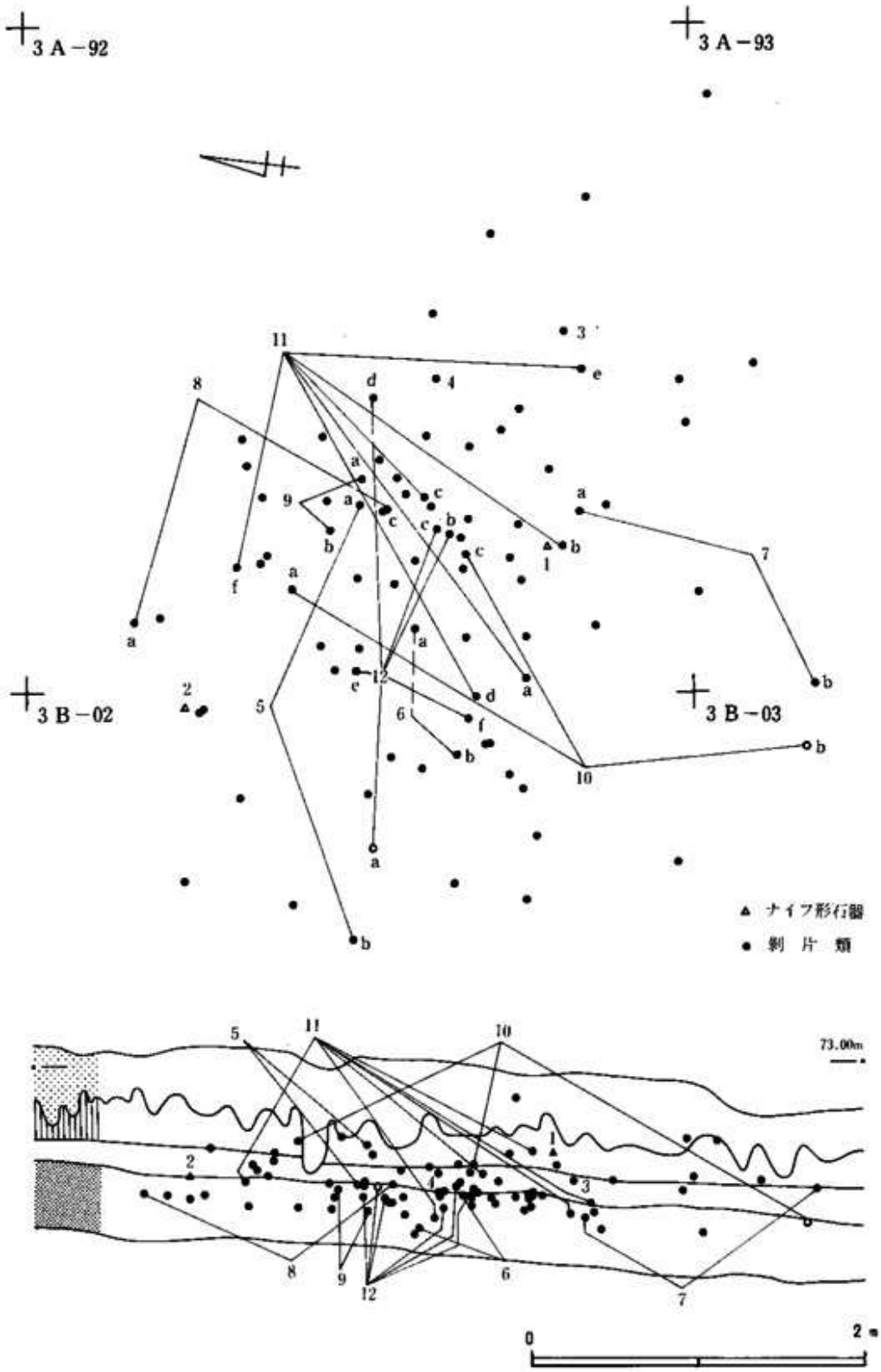
出土遺物（第32～34図，図版18・19）

総数は86点である。そのうちわけは、ナイフ形石器2点，石核2点，他はすべて剥片および砕片である。しかし、接合資料が8点と比較的多い。第2ユニットの説明の時にも示したように接合資料の第32図8は両ユニットから出土した遺物同士の接合資料である。石材別に分類すると、頁岩71点，流紋岩質凝灰岩7点，玄武岩3点，メノウ1点，安山岩1点，凝灰岩1点，不明2点である。第1，第2ユニットとは違い、頁岩を主体としている。

ナイフ形石器（1・2）

1は縦長剥片を部分調整した小形のナイフ形石器である。完形品である。右側縁の先端部に裏面からの細部調整が見られる。右側縁の他の部分は自然面を残している。左側は素材の縁辺を残し、一部使用痕がある。基部に打面を有する。石材は安山岩である。器長 3.2 cm，器幅 1.2 cm，器厚 0.5 cm。

2は縦長剥片を片縁調整したナイフ形石器である。完形品である。左側縁にブランティング



第31図　第3ユニット遺物出土状況図(1/40)

を施し、右側は素材の縁辺を残している。断面形は三角形を呈する。基部に打面を有する。石材は頁岩である。器長 4.2 cm，器幅 1.3 cm，器厚 0.6 cm。

剝片類（3・4）

3・4ともにやや縦長の不整形剝片である。石材はともに頁岩である。

接合資料（5～12）

5は2点からなる接合資料である。下端部に細部調整を施し、先端をやや尖らせていることから石錐の可能性もある。石材は頁岩である。

6・7ともに2点の剝片が接合したものである。6は剝離によるものであるが、7は折損による。ともに石材は頁岩である。

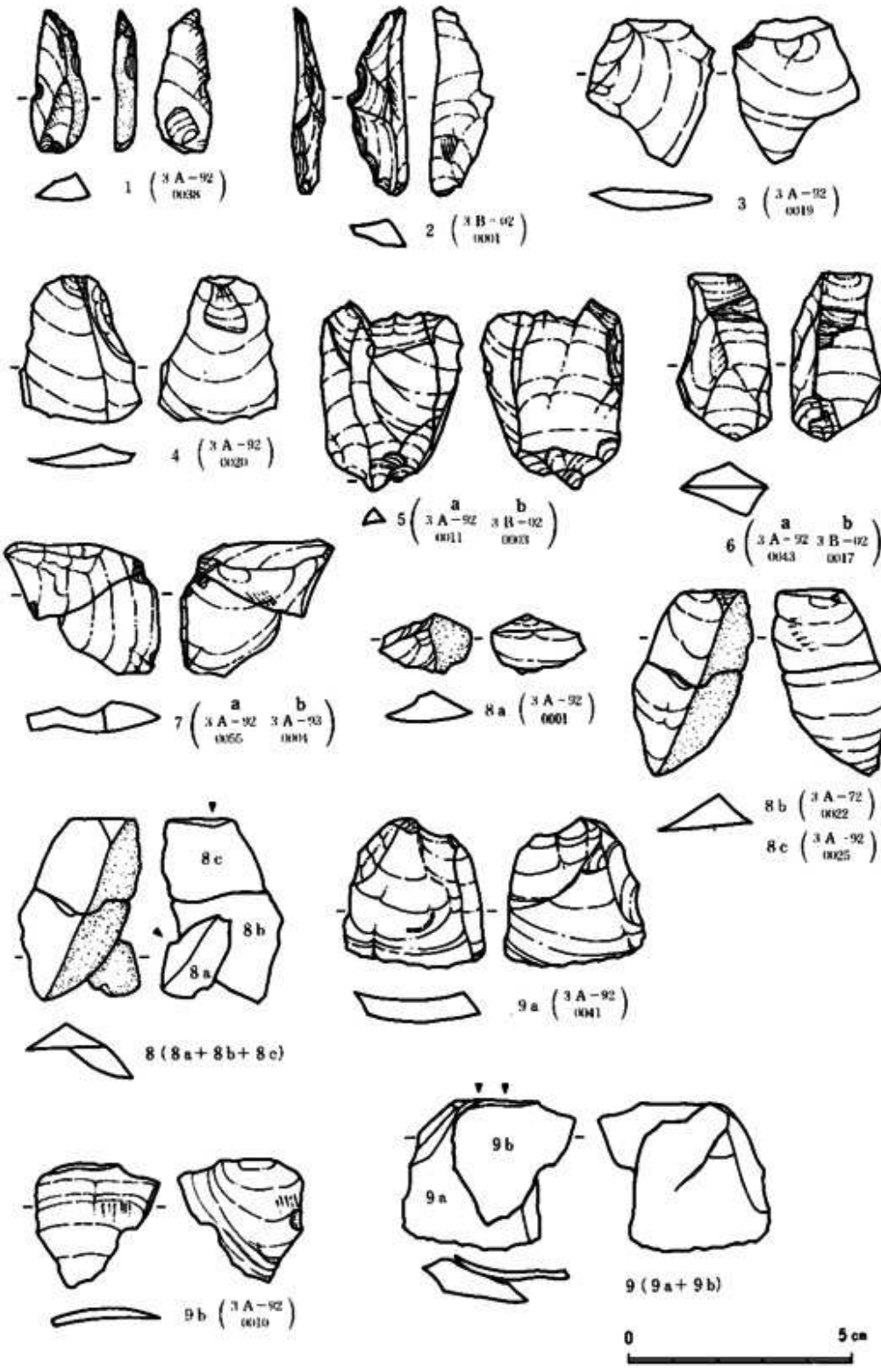
8は3点の剝片が接合したものである。8bと8cは折れて分離したものである。剝離順序は8b＋8c→8aである。表面の右側に自然面を有する。なお、8bは第2ユニットから出土した遺物である。よって、第2ユニットと第3ユニットとは同一ユニットとしてとらえられるかもしれない。しかし、第2ユニットから8bと同じ個体資料は遺存していないことから、何らかの理由で、8bのみが第2ユニットへ移動したのであろう。石材は頁岩である。

9は2点の剝片が接合したものである。ともに上部に打面を有する。石材は頁岩である。

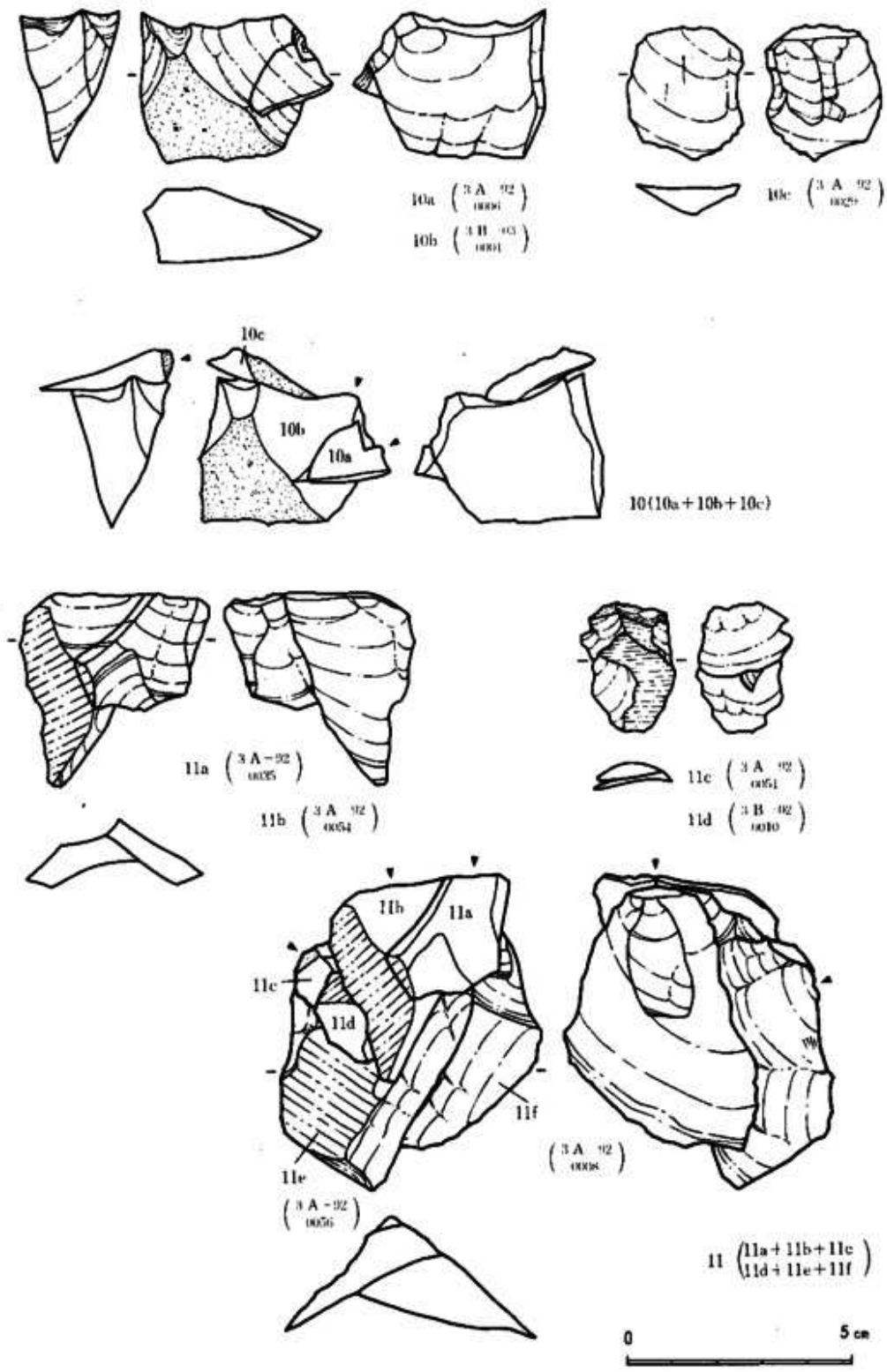
10は1点の石核に、2点の剝片が接合したものである。打面転位による剝離を施している。石材は頁岩である。

11は6点の剝片が接合した資料である。打面転位による剝離である。節理が多く、不規則に剝離している。剝離の順序は11a→11b→11d→11c→11e→11fである。石核は遺存しない。石材は頁岩である。

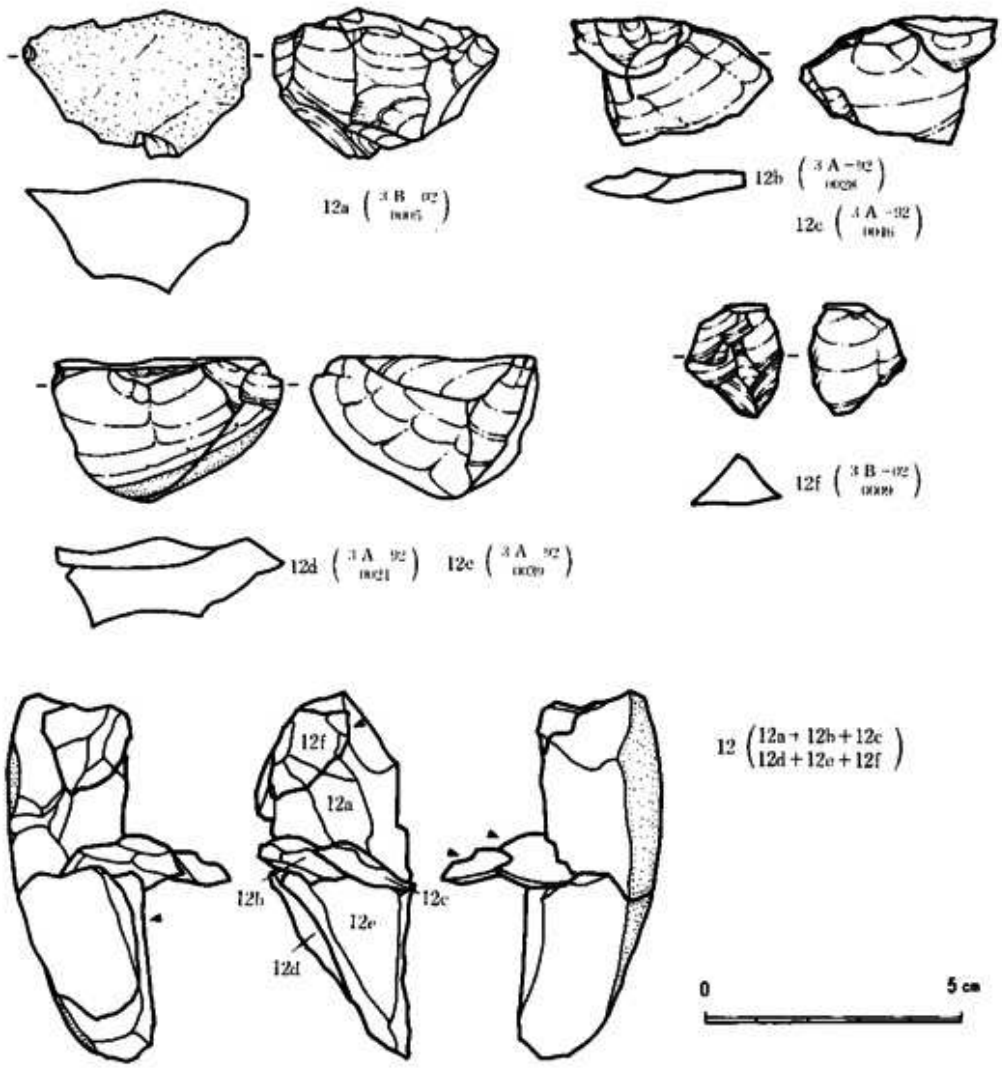
12は6点からなる接合資料である。石質が悪いため良好な剝片は剝離できなかったようである。石材は頁岩である。



第32図 第3ユニット出土遺物実測図(1) (2/3)



第33図 第3ユニット出土遺物実測図(2) (2/3)



第34図 第3ユニット出土遺物実測図(3) (2/3)

2．縄文時代

i 遺構 (第23図)

1号土坑 (001) (第35図，図版20)

本土坑は落し穴である。台地の北側の縁辺部1A—85グリッド内に位置し、標高約73mのところにある。長軸方向はN—20°—Eを指し、谷のほうに向いている。開口部が長径1.33m，短径0.88m、底部が長径0.75m，短径0.30mを測る楕円形の土坑である。確認面はソフトローム層の上面であるが、あまり、ソフトローム層との区別がはっきりしなかったために、本土坑の上部半分を先土器時代の調査時に削除してしまった。その面からの深さは1.23mを測る。断面

形は上部において幾分ふくらみをもっているが、下部では狭まっている。底面は北側のほうへやや傾斜している。覆土は6層に区分できる。底面には厚さ 5cm ぐらい黒色土がレンズ状に堆積している。壁際はロームブロックを多量に含んだ土層である。遺物は出土しなかった。

2号土坑（002）（第35図，図版20）

本土坑は台地の平坦部2A－89，3A－80の各グリッドにまたがって位置し、標高約74mのところにある。長軸方向はN－51°－Eを指し、台地が延びている方向とほぼ同じに向いている。開口部が長径1.38m，短径0.86m、底部が長辺0.70m，短辺0.36mを測り、上部は楕円形で、底部においては長方形になっている。ソフトローム層の上面で確認され、その面からの深さは0.88mを測る。断面形は上部ではややふくらみをもつが、下部においてはほぼ垂直である。長軸先端部の西壁は途中で一旦段をなして底部に落ちている。底面は平坦である。覆土は3層にわかれ、レンズ状に堆積している。全体に黒色味を帯びている。遺物は出土しなかった。

3号土坑（003）（第35図，図版20）

本土坑は台地の平坦部3A－60グリッド内に位置し、2号土坑から東へ10m程行ったところにある。長軸方向はN－65°－Wを指し、台地が延びている方向とほぼ同じに向っている。開口部が長径1.90m，短径0.86mを測る長楕円形で、底部が長辺1.41m，短辺0.41mを測る方形の土坑である。ソフトローム層の上面で確認され、その面からの深さは0.89mを測る。断面形は「U」字形を呈する。底面には長軸方向に2個の小ピットが並んでいる。それぞれの規模は長径 32cm，短径 21cm，深さ 16cm と長径 47cm，短径 26cm，深さ 19cm である。比較的浅い小ピットである。覆土は3層にわかれ、自然堆積である。全体が黒色味をおびている。小ピットの覆土は暗褐色土で、ローム粒を多量に含む土層である。遺物は出土しなかった。

ii グリッド出土遺物

土器（第36図，図版21）

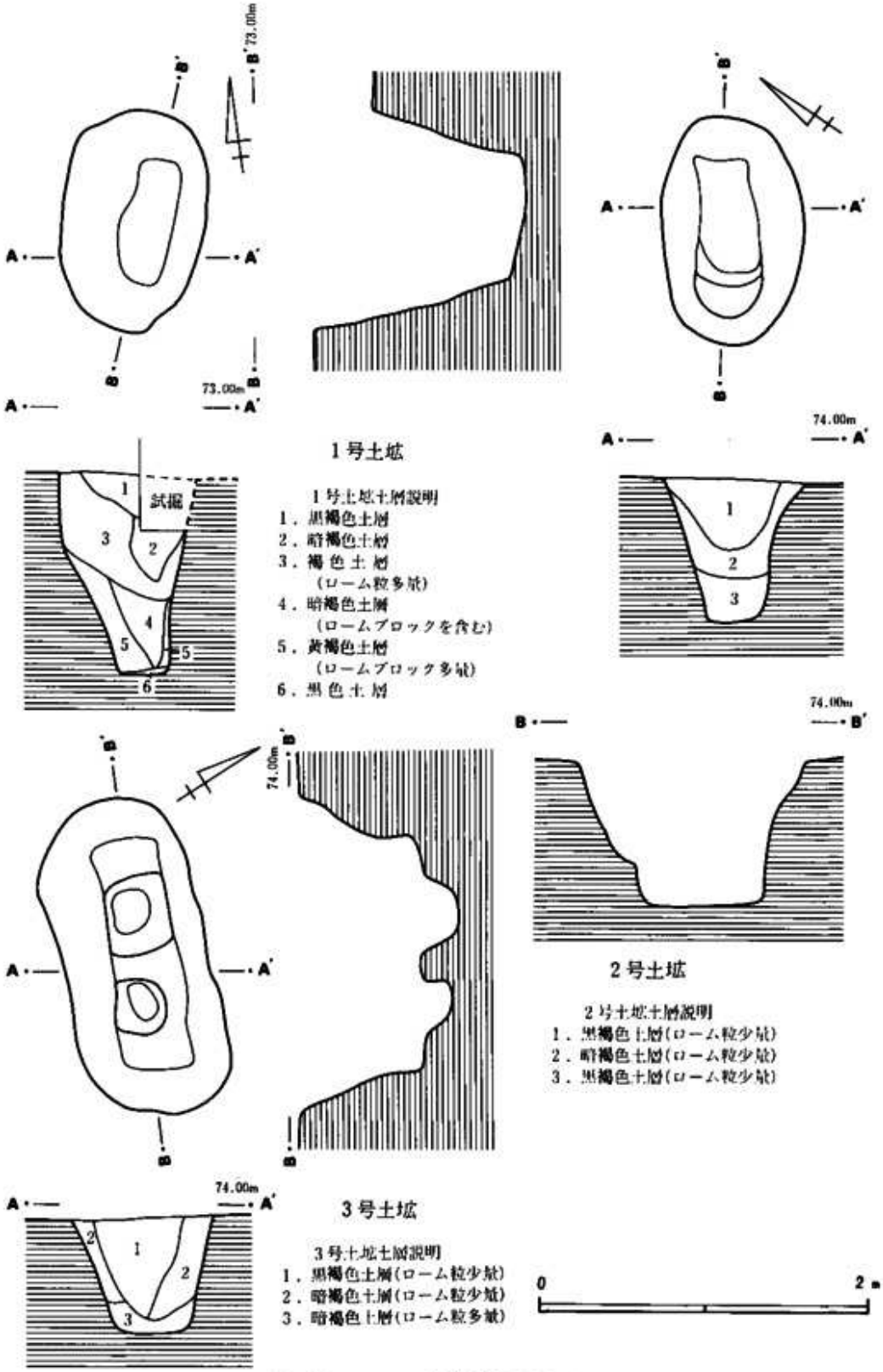
今回調査した遺跡から遺構に伴う遺物は出土せず、全て遺構外の遺物である。出土した土器は縄文土器のみで、大半が縄文時代後期のものである。出土場所はほとんどが台地の南側縁辺部である。ここでは、以下のように分類して記述する。

第1群土器（第36図，図版21　1～3）

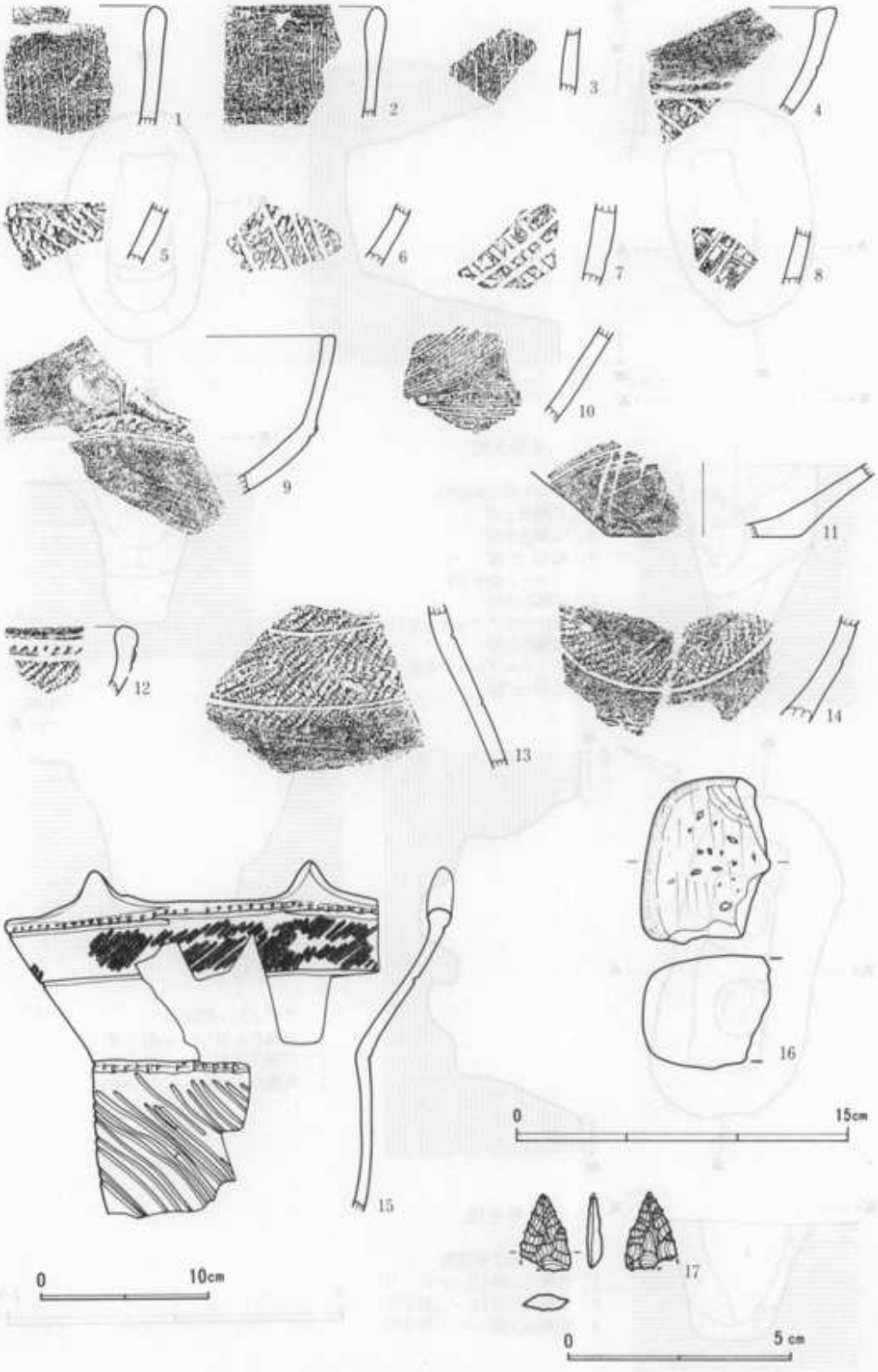
本群は、早期の撚糸文系土器を一括する。

1，2は、撚糸文Lが縦位に施文された口縁部片である。撚糸の間隔は比較的広く、部分的に原体を引きずっているところがある。口唇部は、丸味をもつ。傾きは、ほぼ直立する。胎土はもろく、雲母を少量含んでいる。撚糸文系末葉に比定される。

3は、撚糸文Lが縦位に施文された胴部破片である。胎土はもろい。撚糸文系末葉に比定される。



第35図　1・2・3号土坑実測図(1/40)



第36図 グリッド出土遺物拓影・実測図（1/3・1/4・2/3）

第2群土器（第36図，図版21　4～15）

本群は後期の土器を一括する。すべて加曽利B式土器に比定される。

4～6は粗雑な縄文地に右下りの平行条線文が施されているものである。4は口縁部片で、5・6は頸部片である。なお、4は波状口縁を呈し、口縁部文様は2条の平行沈線で区画された無文帯である。頸部に、粗雑な縄文地に右下りの平行条線が施文されている。傾きは外反する。外面にはススが付着している。

7・8は粗雑な縄文地に格子目の条線文が施されている。2片とも右下りの平行条線を先に施してから左下りの平行条線を施文している。

9は波状口縁を呈する。頸部において逆「く」の字状に屈曲して、その部分にだけ刻目と1条の沈線がめぐっている。その他の部分は無文である。

10・11はヘラ様工具による条線文が斜位に施されている。この2片は同一個体で、10は胴部片、11は底部片である。

12は横回転による単節LRの斜縄文が施された口縁部片である。口縁部には2条の平行沈線間に連続刺突文が施されている。

13は頸部片である。文様は2条の平行沈線間に横回転による単節LRの斜縄文が充填されている。施文方法は、斜縄文を施してから沈線で区画している。

14は沈線で区画した横回転による単節LRの斜縄文が施された底部付近の破片である。

15は推定口径 27 cm、突起からの現高 20.9 cm を計る口頸部の破片である。器形は深鉢である。口縁部が外反し、山形突起が3個現存する。頸部では「く」の字状に屈曲し、胴部でややふくらみをもつ。口縁部文様は口縁に三角形の連続刺突文がめぐり、その下部に平行沈線で区画した横回転による無節Lの斜縄文が充填されている。頸部文様は屈曲部のところに1条の沈線と三角形の連続刺突文がめぐっている。なお、内面において口縁に稜がみられる。

石器（第36図，図版21　16・17）

16は磨石の破片である。現長 7.4 cm，現幅 5.8 cm，厚さ 5.0 cm，重さは310 g である。表面はザラザラしているが、部分的に磨られているところがある。石材は砂岩である。

17は三角形を呈する石鏃である。全長 1.6 cm，幅 1.1 cm，厚さ 0.3 cm を計る。基部において一部欠損している。石材は黒曜石である。

第4節　ま　と　め

調査の結果、本遺跡において検出された遺構は先土器時代の遺物集中地点3ケ所、縄文時代の土坑3基である。また、遺物は遺構外から縄文時代後期を中心とする土器片が出土した。以下時代別にまとめてみたい。

先土器時代

本遺跡は東から西へ延びている標高74mの尾根状台地に立地するが、３ケ所のユニットが検出されたのは、南側の縁辺部である。出土層位は第１ユニットが第Ⅲ層、第２ユニットが第Ⅶ層、第３ユニットが第Ⅵ～Ⅶ（上部）層である。

第１ユニットは、石器を伴わずに、石核および剥片類が分布するユニットである。おそらく、石器類は他へ持ち出されたのであろう。石核の剥離面から剥離技法を判断すると、石核を回転しながら、剥片を剥離している。

第２ユニットは、ナイフ形石器２点，スクレイパー１点を伴うユニットである。ナイフ形石器は２点とも欠損している。ともに右側縁にブランティングが施されている。

石核に４点の剥片類が接合した資料を得た。これによると、石核を回転させながら、目的的剥片を剥離している。この石核と同一個体である石器は出土していない。

第３ユニットはナイフ形石器２点を伴うユニットである。多くの接合資料が得られた。剥片剥離技法は打面転移によるものと思われる。石材は頁岩が主体的である。しかし、石質が不良で節理が多いことから、あまり、石器の素材となる剥片は得られなかったようである。第32図８の接合資料は８ｂが第２ユニットから出土したものであるが、第２ユニットにおいて、これと同一個体の剥片は８ｂ１点だけであるので、第２ユニットと第３ユニットとを同一ユニットと考えるよりは8bだけが何らかの理由で第２ユニットに移動したのであろう。

縄文時代

土坑３基検出した。１号土坑は尾根状台地の北側で、２・３号土坑は南側で検出した。それぞれ遺物は伴わなかったが、立地、形態から判断すると縄文時代所産の落し穴であろう。

遺物は、遺構外から撚糸文系末葉の土器片が２点出土したが、大半は加曽利Ｂ式の土器片である。その他に磨石と石鏃が１点ずつ出土した。石鏃は、おそらく縄文時代後期のものであろう。

大木戸遺跡（おおきど）

（201－036）

第4章　大木戸遺跡

第1節　立　　地（第37図，図版22）

大木戸遺跡は千葉市大木戸町1215−13他に位置し、国鉄外房線の誉田駅から直線距離にして南東約3.5kmのところにある。

遺跡が立地する台地は北側と西側に小支谷が入り込み、舌状に西へ延びている。東側は南北からの谷の侵入により、括れ部を形成している。その括れ部が一番高く、標高78mを測る。南側の谷の低湿地との比高差は約35mを測り、かなり深い谷底である。

低地には村田川が流れており、遺跡から北西約2.3kmのところでは上流に向かって二股に分れる。一方は市原市金剛地方面を、もう一方は市原市東国吉方面を源とし、遺跡が所在する台地をはさむようにして北側と西側に流れている。

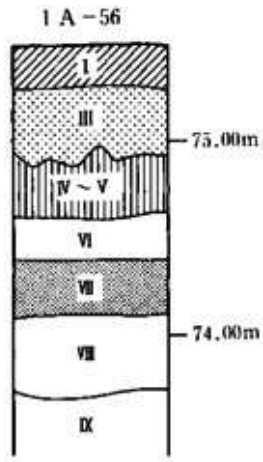
調査区は台地の尾根上約74mの高さのところで、台地の尾根を北西から南東にかけて横切る路線内600㎡である。この台地における路線のほぼ半分が斜面を通るため、調査対象区はやせた尾根上と縁辺部に限られる。

調査前の状況は松の植林と篠類でおおわれていた。

なお、この台地基部の平坦なところには、千眼下遺跡（第1図11）が所在し、本遺跡とは隣接している。

第2節　層　　序

本遺跡の層序は第39図のとおりである。標準層序は台地の平坦部に近い1A−56グリッドを用いた。なお、斜面に行くに従って立川ローム層が薄くなっている。



第39図 標準層序（1/40）

第Ⅰ層　表土層。黒褐色土層である。

第Ⅲ層　黄褐色軟質ローム層。ソフトローム層である。

第Ⅳ〜Ⅴ層　黄褐色硬質ローム層。クラックの発達が著しく、長時間放置すると剝落する。

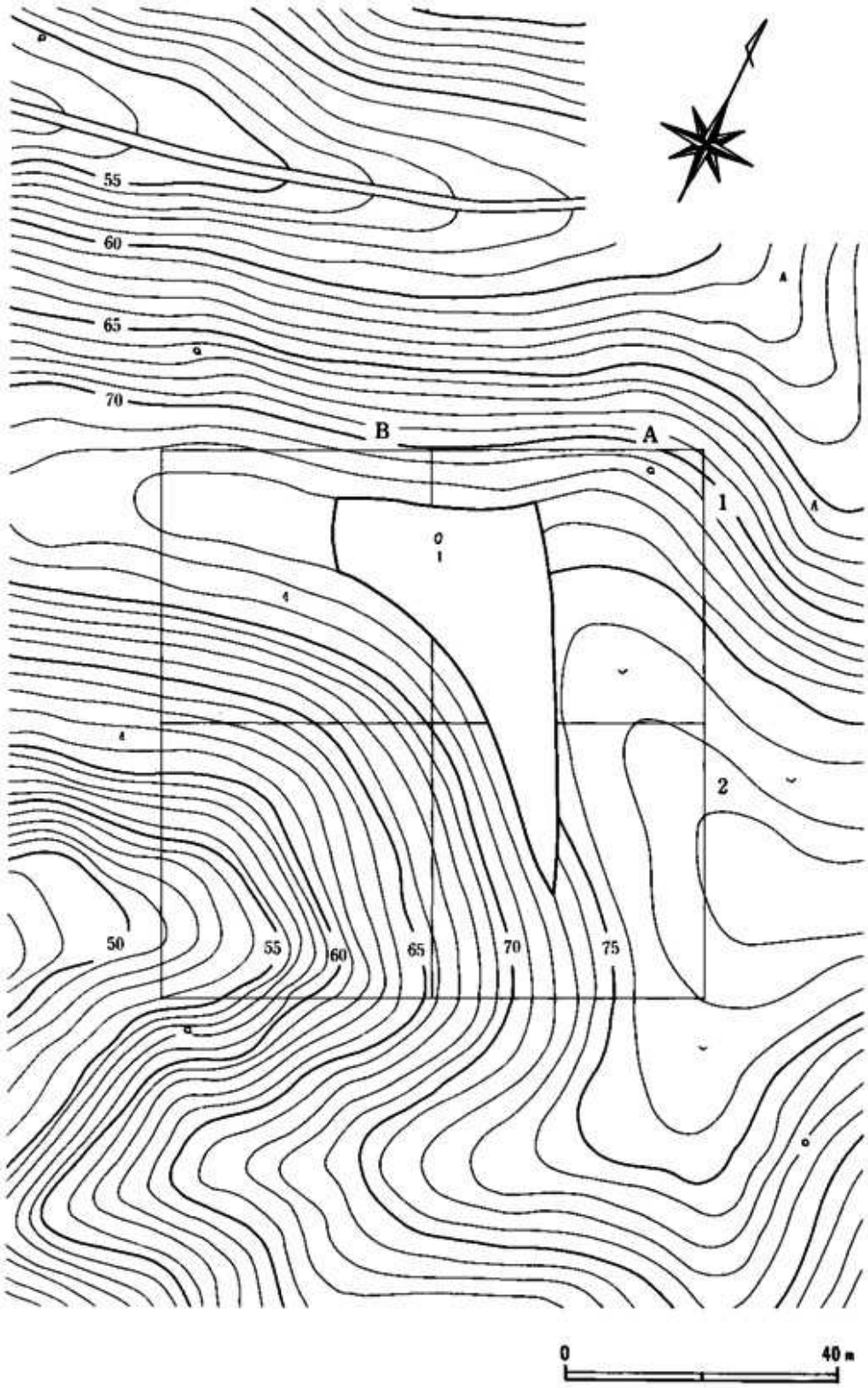
第Ⅵ層　黄褐色硬質ローム層。姶良，丹沢パミスは認められない。クラックが著しい。

第Ⅶ層　暗褐色ローム層。スコリアを多量に含む。

第Ⅷ層　褐色ローム層。

第Ⅸ層　淡褐色ローム層。やや軟質で、青みを帯びる。この層以下武蔵野ローム層となる。

第37図 大木戸遺跡周辺地形図 (1/5000)



第38図 グリッド配置図及び遺構分布図 (1/1000)

第3節　遺構と遺物

i 遺構（第38図）

1号土坑（001）（第40図，図版23）

本土坑は落し穴である。台地の尾根上1A－97グリッド内に位置し、標高約74 mのところにある。長軸方向は真北を指し、北側の谷のほうに向っている。開口部が長径1.80 m，短径0.78 m、底部が長径1.80 m，短径0.32 mを測る長楕円形の土坑である。ソフトローム層の上面で確認され、その面からの深さは0.77 mを測る。断面形は底部でやや狭まり「U」字形を呈する。南壁の底部においてはオーバーハングしている。底面は南側半分が一段さがっている。覆土は4層に区分でき、自然堆積である。全体的に黒色味を帯びている。遺物は出土しなかった。

ii グリッド出土遺物

土器（第41図，図版23　1～8）

本遺跡から出土した土器はすべて縄文時代中期のものである。型式は加曽利E式に比定される。

1は加曽利EI式に比定される胴部片である。縦回転による単節LRの斜縄文地に2条の平行沈線が懸垂されている。

2は加曽利EII式に比定される胴部片である。右下から左上に原体を回転した単節RLの縄文部と無文部とは1条の沈線によって区画されている。胎土に雲母が含まれる。

3は加曽利EII式に比定される頸部片である。口縁部には2条の太い平行沈線文が見られる。胴部には縦回転による単節LRの斜縄文地に沈線で区画された磨消懸垂文が1条みられる。

4は加曽利EII式に比定される胴部片である。縦回転による複節LRLの斜縄文を地文とし、沈線区画による磨消懸垂文が施されている。

5は加曽利EIII式に比定される口縁部片である。竹管による円形の交互刺突文と1条の沈線がめぐっている。

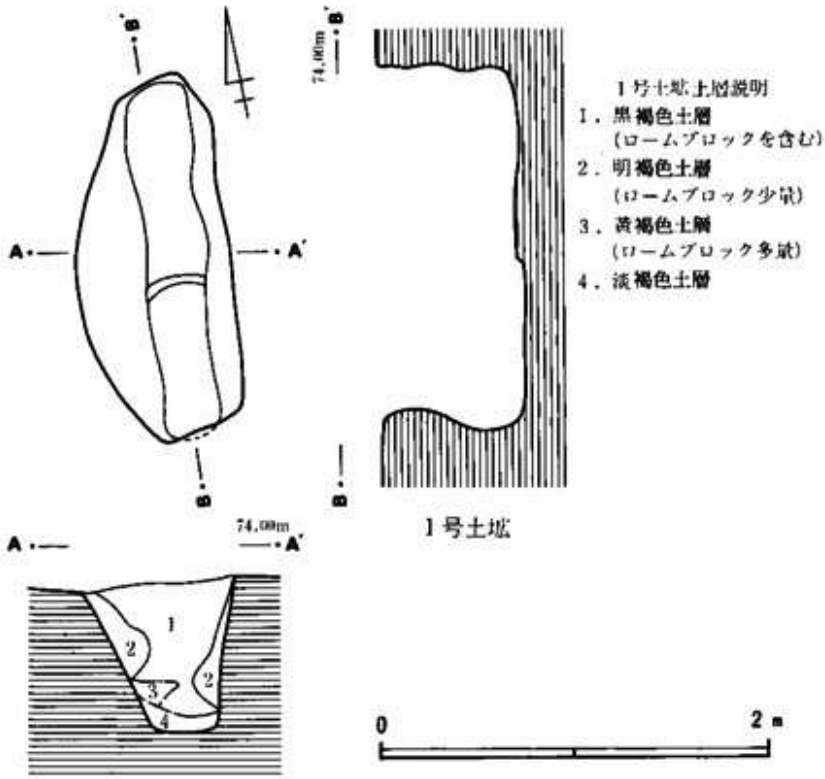
6は加曽利EIII式に比定される口縁部片である。縦回転による単節LRの斜縄文地に1条の沈線がめぐっている。

7は加曽利EIII式に比定される口縁部片である。傾きは内側に湾曲し、浅鉢と思われる。横回転による単節RLの斜縄文を地文とし、2条の平行沈線がめぐっている。

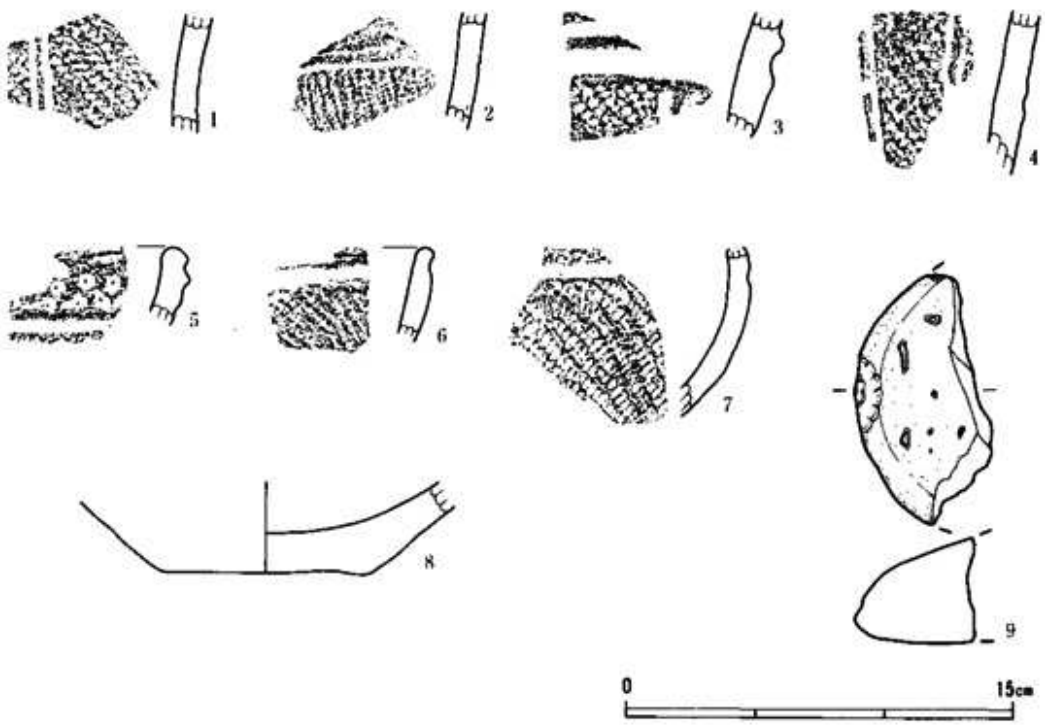
8は底部である。おそらく加曽利E式に比定されるものと思われる。外面は横位のヘラケズリがおこなわれ、底部はやや上げ底を呈している。

石器（第41図，図版23　9）

9は敲石の欠損品である。縁に敲打痕がある。石材は安山岩である。重量240 g。



第40図　1号土坑実測図（1/40）



第41図　グリッド出土遺物拓影・実測図（1/3）

第4節　ま　と　め

大木戸遺跡が所在する台地は、標高78mと千葉市においてかなり高い台地に入る。そして、この地域一帯は複雑な地形を形成し、山間部の雰囲気を醸し出している。遺跡は北へ延びる丘陵の西側にあたる舌状に突出した台地に所在する。

遺構は落し穴の土坑を1基検出しただけである。ちょうど、やせた尾根上の平坦なところで、長軸を北へ向けて位置していた。なお、遺物が出土しなかったので時期は不明である。

遺物はグリッドから縄文時代中期（加曽利E式）の土器片が少量出土した。

この舌状台地の基部には千眼下遺跡（第1図11）がある。この遺跡には縄文時代中期の土器片が散布していることから、おそらく本遺跡は千眼下遺跡の範囲に含まれるかもしれない。

板倉町遺跡
（201－037）

第5章　板倉町遺跡

第1節　立　　地（第42図，図版24・25）

板倉町遺跡は千葉市板倉町513－1他に位置し、国鉄外房線の土気駅から直線距離にして南西約3.1kmのところにある。

遺跡の所在する台地は千葉市大木戸町大野から板倉町方面へ東に延びている台地であり、その台地の先端部に本遺跡がある。

遺跡が立地する台地は北側では小支谷が入り込み、東側は低地で水田を臨む。また、西側は谷が南へ侵入しており、やや括れ部を形成する。台地は、北西から南東にかけて緩やかに傾斜しているため、北側の平坦な部分が一番高く、標高68mを測る。北側および東側の縁辺部は急斜面である。東側の低地の水田面との比高差は約22mである。

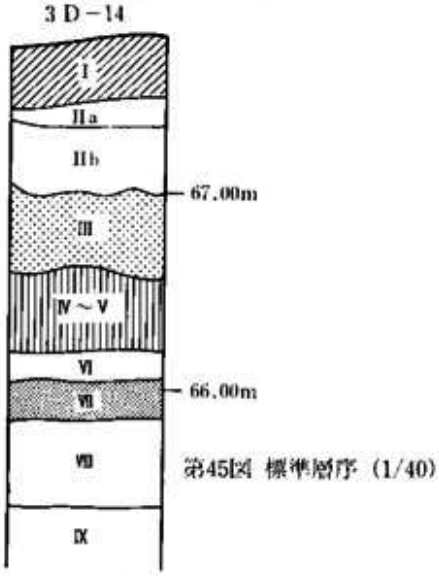
東側の台地に沿って村田川が流れている。現在、水量は少ないがこの地域では主要な河川である。

調査区は台地の中央部65～68mの高さのところで、北西から南東にかけて台地を横切る路線内5,620㎡である。

調査前の状況は畑地であった。なお、台地の表面には縄文土器および土師器等の破片が散布し、台地の周辺には土塁，溝等の遺構が一部残存している。

村田川流域における遺跡周辺の台地上には数多くの遺跡がある。なかでも、東の対岸には、板倉砦（第1図44），向砦（同図43）、北には大稚城（同図42），立山城（同図33）等の砦および城郭の跡がある。

第2節　層　　序



第45図 標準層序（1/40）

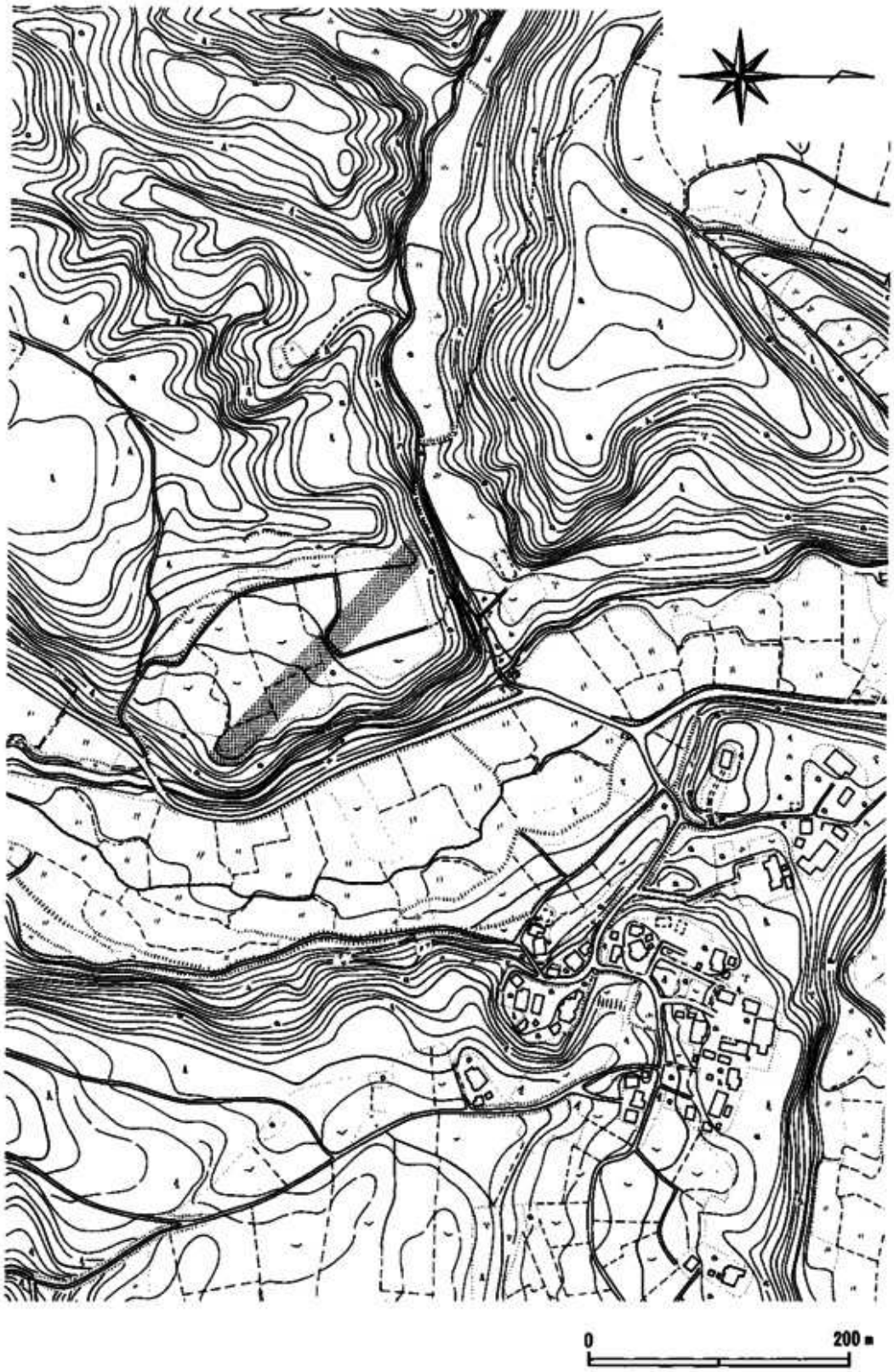
板倉町遺跡の層序は第45図のとおりである。3D－14グリッドの北東壁断面を標準層序とした。

第Ⅰ層　表土層。黒褐色を呈し、耕作土層である。

第Ⅱ層　部分的に2層に区分できる所がある。Ⅱa層は褐色を呈し、新期テフラと呼称されている土層である。Ⅱb層は暗褐色土層である。

第Ⅲ層　黄褐色軟質ローム層。いわゆるソフトローム層である。

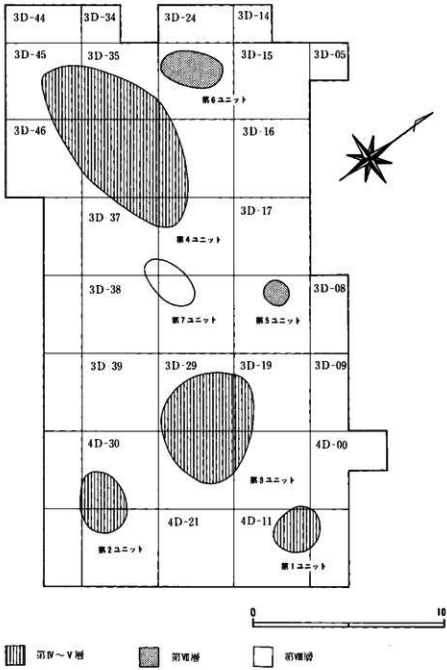
第Ⅳ～Ⅴ層　黄褐色硬質ローム層。



第42図 板倉町遺跡周辺地形図 (1/5000)

第43図 グリッド配置図及び遺構分布図 (1/1000)

第44図 グリッド配置図及び先土器時代調査図 (1/1000)



第46図 先土器時代遺物分布図 (1/200)

第VI層　黄褐色硬質ローム層。やや明るく、場所によっては姶良，丹沢パミスが認められる。

第VII層　褐色ローム層。スコリアの含有がきわめて多い。

第VIII層　明褐色ローム層。やや軟質である。

第IX層　淡褐色ローム層。軟質で少し青味を帯びる。粘性に富む。この層以下武蔵野ローム層となる。

第3節　遺構と遺物

1．先土器時代（第44・46図）

本遺跡において先土器時代の遺物が出土した地点は、西から東へ延びる舌状台地先端部の北側である。出土したグリッドは、3D－18・19・25～29・35～38・45・46，4D－11・20・30・31である。この地点は、平坦であり標高68mを測る。

調査の結果、7つのユニットを検出した。このうち、第3・4ユニットは比較的広範囲に遺物の集中が認められたが、その他のユニットは小規模であった。これらのユニットの層位は、第IV～V層が4ケ所、第VII層が2ケ所、第VIII層が1ケ所である。

検出された各ユニットの出土状況および出土遺物は、以下のとおりである。なお、遺物出土状況の断面図は、3D－08・09・15～17，4D－00・01の各グリッド北壁の土層断面を実測し、それぞれのユニット出土遺物を投影したものである。

第1ユニット

出土状況（第47図，図版26）

本ユニットは、舌状台地先端北側の平坦部4D－11グリッド内に所在する。規模は南北1.4m，東西1.1mの範囲で、極めて小規模である。遺物はその中に散発的に出土した。遺物の出土層位は第IV～V層である。

出土遺物（第48図，図版29）

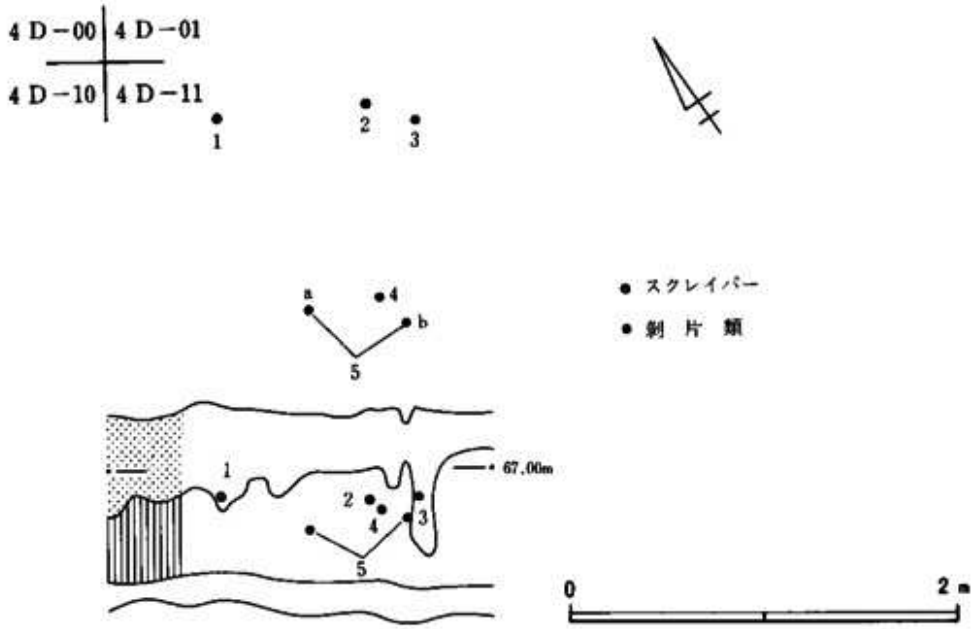
総数は6点と少なく、このうち、石器としてはスクレイパー1点がある。また、剝片同士の接合資料が1個得られた。石材はすべてメノウである。

スクレイパー（1）

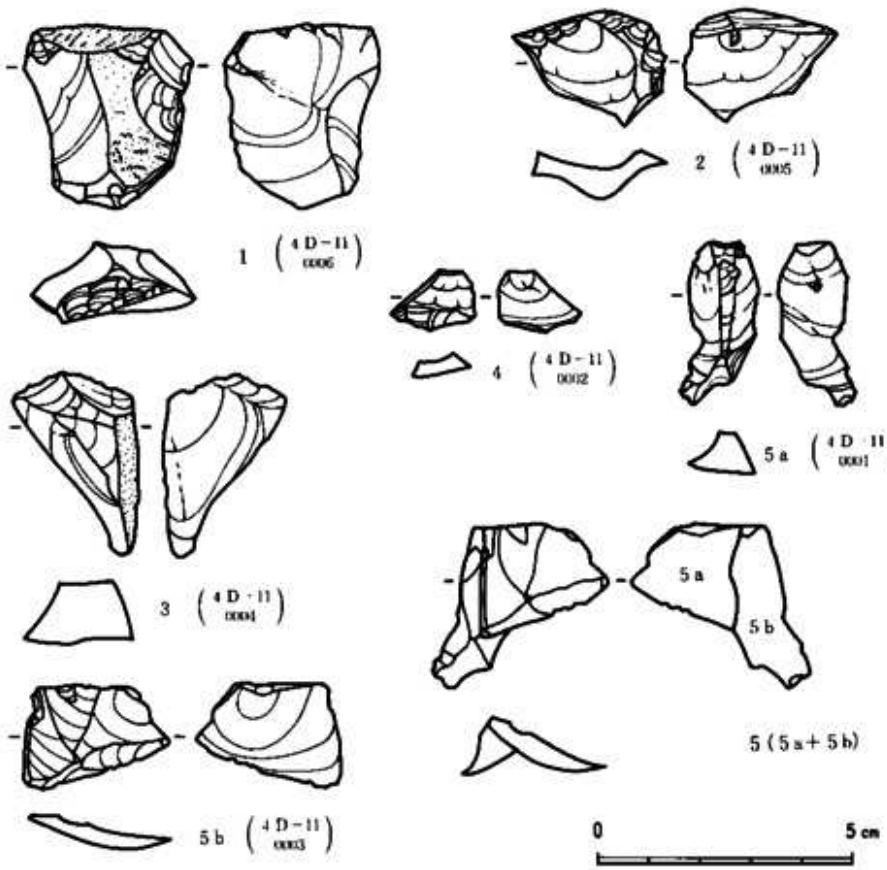
表面の下端部に急斜度の細部調整がある。また、表面の上端部には自然面を残す。中央部は節理面である。表面の右側上部を敲打して剝離している。器長3.5cm，器幅3.3cm，器厚1.4cm。

剝片類（2～4）

3点とも不整形の剝片である。2は表面の上端部に細部調整がある。3は表面の右側に自然面を残す。



第47図 第1ユニット遺物出土状況図 (1/40)



第48図 第1ユニット出土遺物実測図 (2/3)

接合資料（5）

5aと5bの剥片同士が接合した。5aはやや縦長の剥片であるが、5bは不整形の剥片である。2点とも上端部に打面を有している。接合状態の表面を観察すると多方向からの剥離面を有しているので、おそらく打面を転移しながら剥離していったものと思われる。

第2ユニット

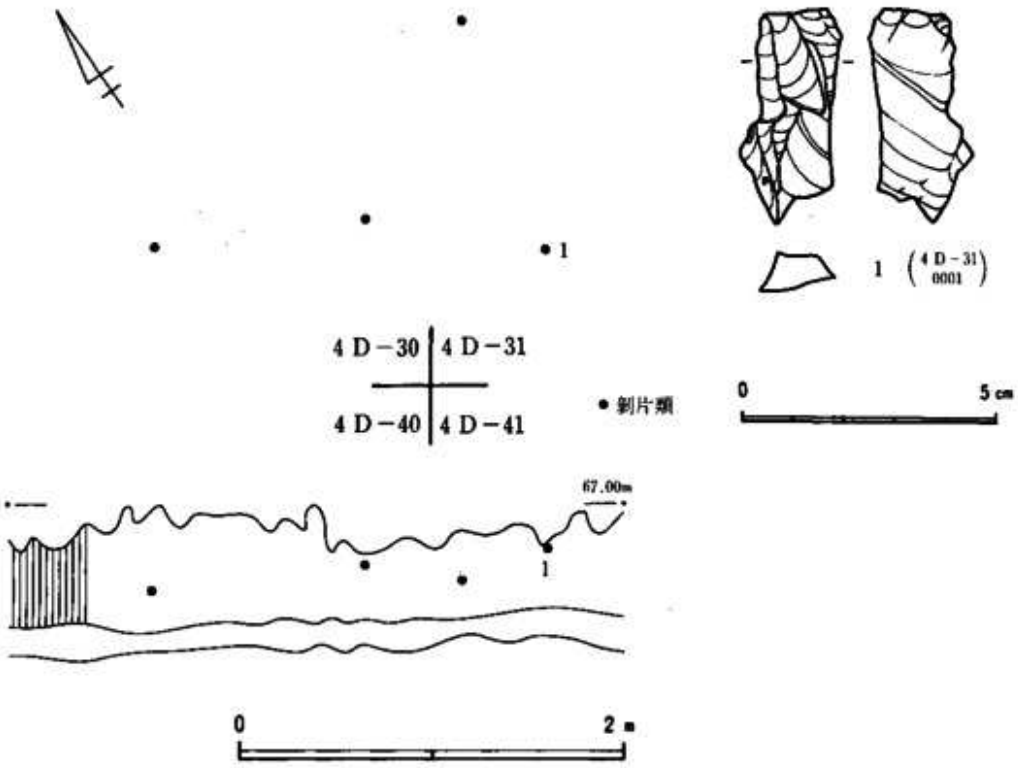
出土状況（第49図）

本ユニットは第1ユニットの南西約10m、4D—30・31の各グリッドにまたがって所在する。規模は南北1.3m，東西2mで、その範囲内に遺物が散発的に出土した。第1ユニット同様に小規模である。遺物の出土層位は第IV～V層である。

出土遺物（第49図，図版29）

総数は4点で、剥片および砕片のみである。石材別に分類すると黒曜石3点，メノウ1点である。このうち、1点を図示した。

1は縦長の剥片である。石材はメノウである。



第49図 第2ユニット遺物出土状況・出土遺物実測図（1/40・2/3）

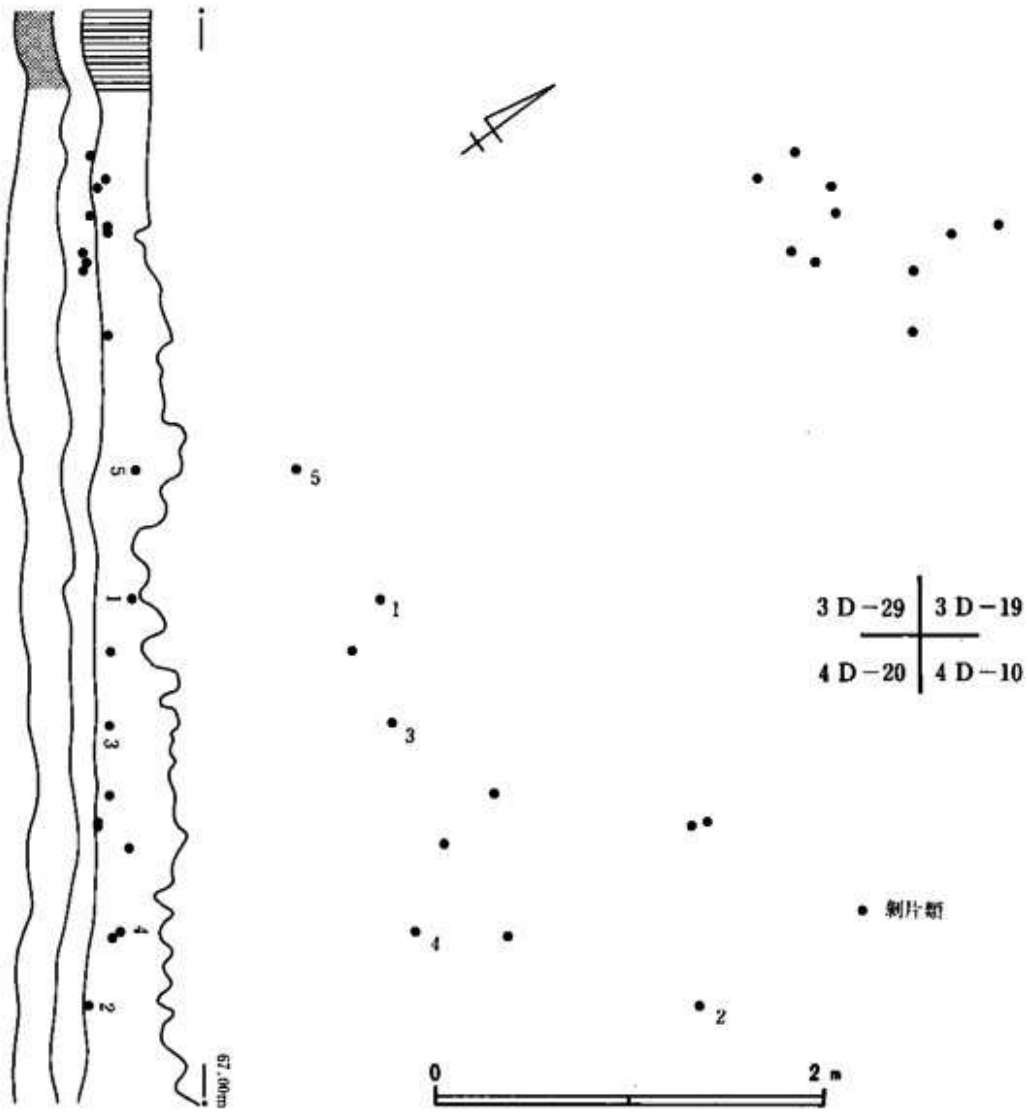
第3ユニット

出土状況（第50図，図版26）

本ユニットは第1ユニットの西約7mのところに所在し、出土グリッドは3D−19・29，4D−20である。規模は南北4.8m，東西3.4mである。平面分布を見ると南北に2つに分れるかと思われるが、垂直分布がほぼ同じレベルであり、また石材がすべて黒曜石であったので1つのユニットと考えた。遺物の出土層位は第IV〜V層である。

出土遺物（第51図，図版29）

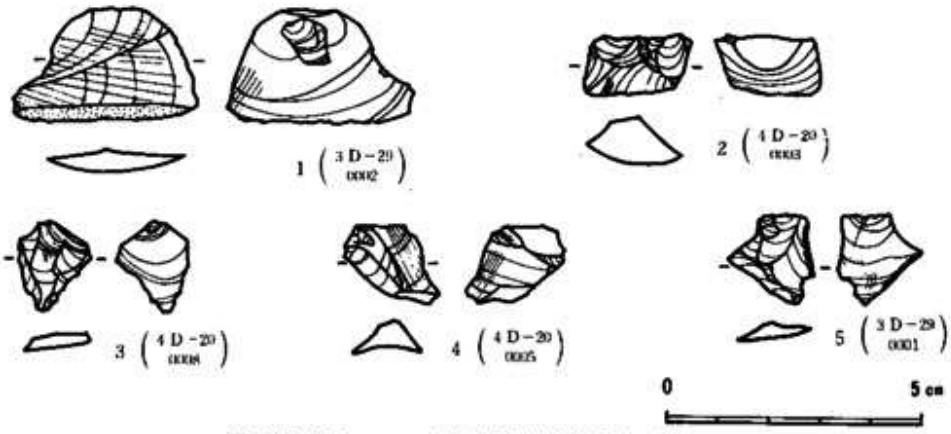
総数は21点で、剥片および砕片のみである。石材はすべて黒曜石である。



第50図 第3ユニット遺物出土状況図（1/40）

剥片類（1～5）

1だけがやや大形の剥片で、他は小形である。1は横長剥片で、表面の下端部に自然面を有する。5は表面の右側縁と裏面の右側縁とにリタッチが施されている不整形の剥片である。



第51図 第3ユニット出土遺物実測図（2/3）

第4ユニット

出土状況（第52図，図版27）

本ユニットは第3ユニットの西約15m、3D－26・35・36・45・46の各グリッドにまたがって所在する。主に3D－36グリッド内に集中している。規模が南北4.9m，東西7.4mと東西に広がっており、本遺跡において一番大規模なユニットである。遺物の出土層位は第Ⅳ～Ⅴ層である。遺物は3D－36グリッド内に集中しているが、石器はその集中地点から離れて散在している。また、砕礫が集中地点で多数出土し、接合できるものが多い。

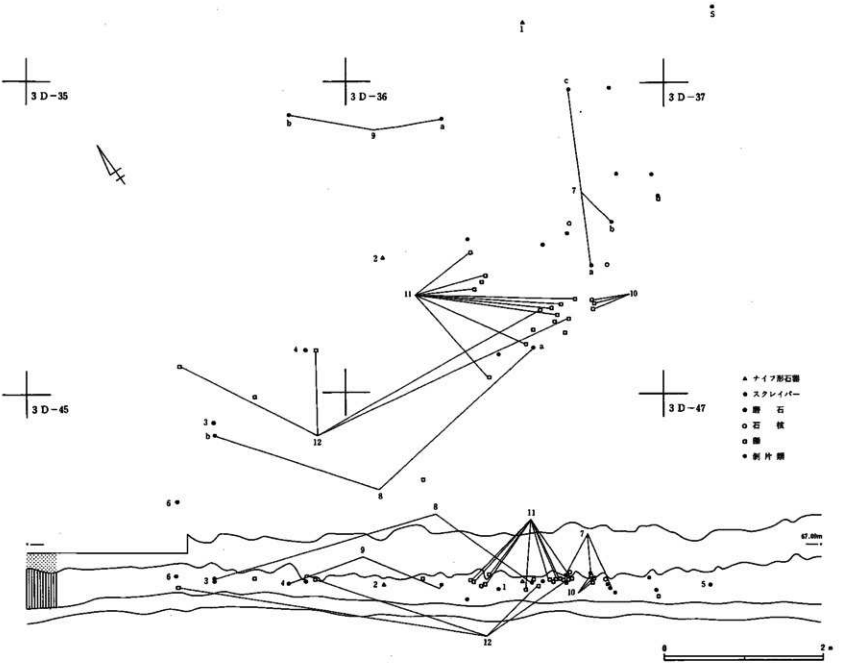
出土遺物（第53～55図，図版30～32）

総数は47点である。そのうちわけは、ナイフ形石器2点，スクレイパー1点，磨石1点，剥片類16点，砕礫26点，石核2点である。本ユニットにおいては、砕礫が過半数を占めている。石材別に分類すると、砂岩18点，安山岩13点，泥質片岩4点，頁岩4点，安山岩質凝灰岩3点，玄武岩2点，珪質頁岩1点，流紋岩1点，火砕岩1点である。また、6個の接合資料が得られた。

ナイフ形石器（1・2）

1は縦長剥片を両縁調整したナイフ形石器である。基部は欠損している。右側縁および左側下端部にブランティングを施している。左側は素材の縁辺を残している。その部分には使用痕がみられる。石材は玄武岩である。現長 3.2 cm，器幅 1.6 cm，器厚 0.9 cm。

2は縦長剥片を両縁調整したナイフ形石器である。左側縁にブランティングを施している。右側縁は下半部に細部調整が施され、上半部には素材の縁辺を残している。基部に打面を有す



第52図 第4ユニット遺物出土状況図 (1/40)

る。石材は安山岩である。器長 3.2 cm，器幅 1.9 cm，器厚 0.8 cm。

スクレイパー（3）

3 は楕円形の剝片を調整したスクレイパーである。下端部に細部調整を施している。石材は安山岩である。器長 3.2 cm，器幅 3.3 cm，器厚 0.8 cm。

磨　石（4）

4 は表裏とも磨られている磨石である。石材は砂岩である。器長 9.9 cm，器幅 5.8 cm，器厚 2.7 cm。

剝片類（5・6）

5 は縦長剝片である。裏面の左側上部にリタッチが施されている。表面の下端部に自然面を有する。石材は珪質頁岩である。

6 は下端部に大きな調整を施している。中央部に自然面を有する。器厚が厚く、表裏とも多方向からの剝離が施されているので剝片とは言えないかもしれない。また、下端部の調整剝離により、何らかの石器かもしれない。石材は安山岩である。

接合資料（7～12）

7 は 3 点の剝片が接合したものである。上部に自然面を有する。すべて上部から敲打された剝片である。石材は頁岩である。

8 は 2 点の剝片が接合したものである。2 点間の距離は4.2mとかなり離れていた。最初は円礫の敲石と思われ、上下に敲打痕がある。石材は泥質片岩である。

9 は 2 点の接合資料である。これは剝離して分離したのではなく、折って分離したものである。2 点間が 2 m離れていた。石材は安山岩である。

10～12は火熱によって剝離した礫の接合資料である。10・11の砕礫は集中したところにあったが、12の 1 点だけは4.6mと離れていた。石材は10が泥質片岩、11・12が砂岩である。

第 5 ユニット

出土状況（第56図，図版27）

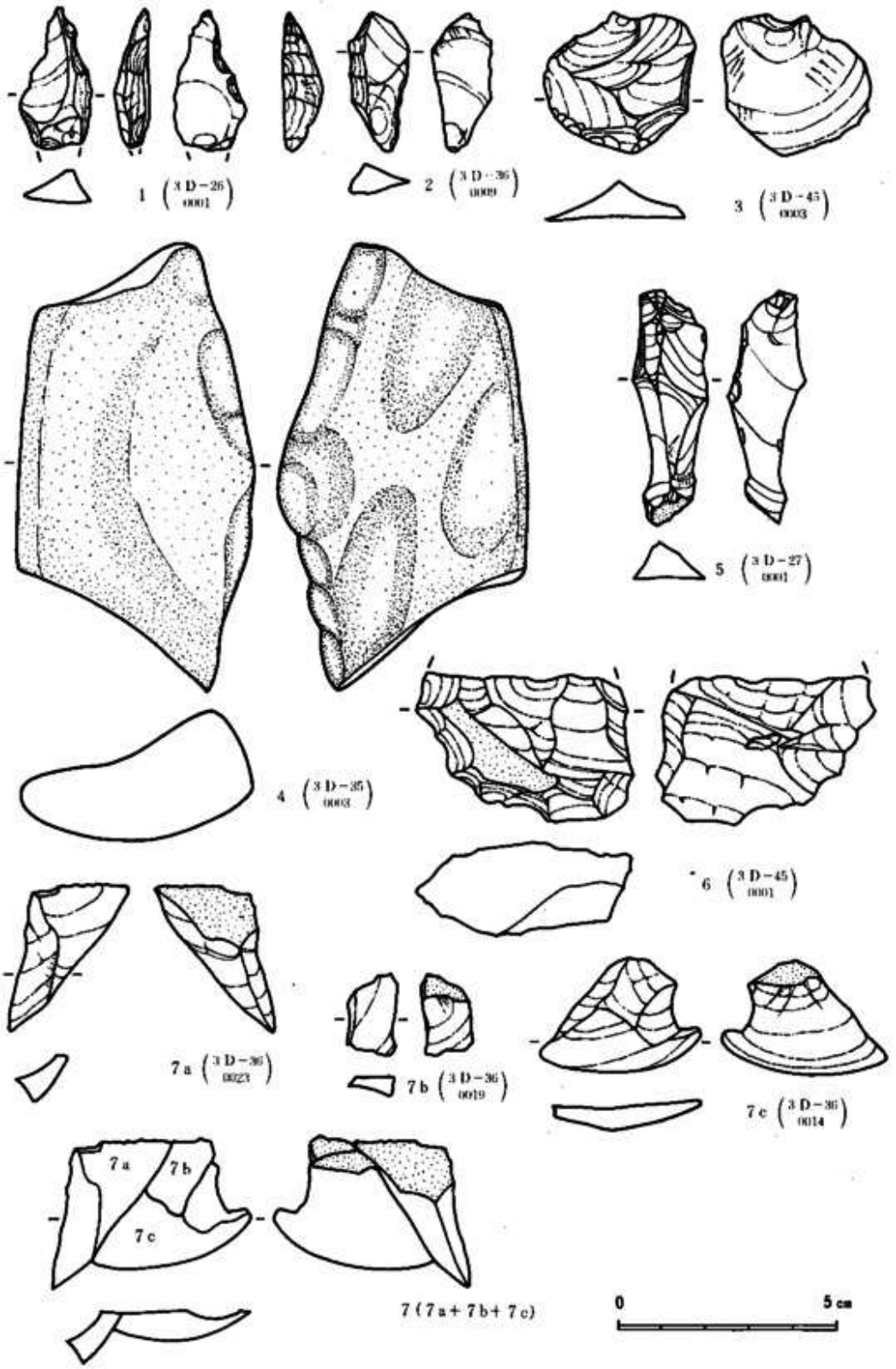
本ユニットは第 3 ユニットの北西約 7 m、3 D—18グリッド内に分布する。規模は南北0.57 m，東西0.43mと小さい。遺物の出土層位は第Ⅶ層（下部）である。

出土遺物（第57図，図版29）

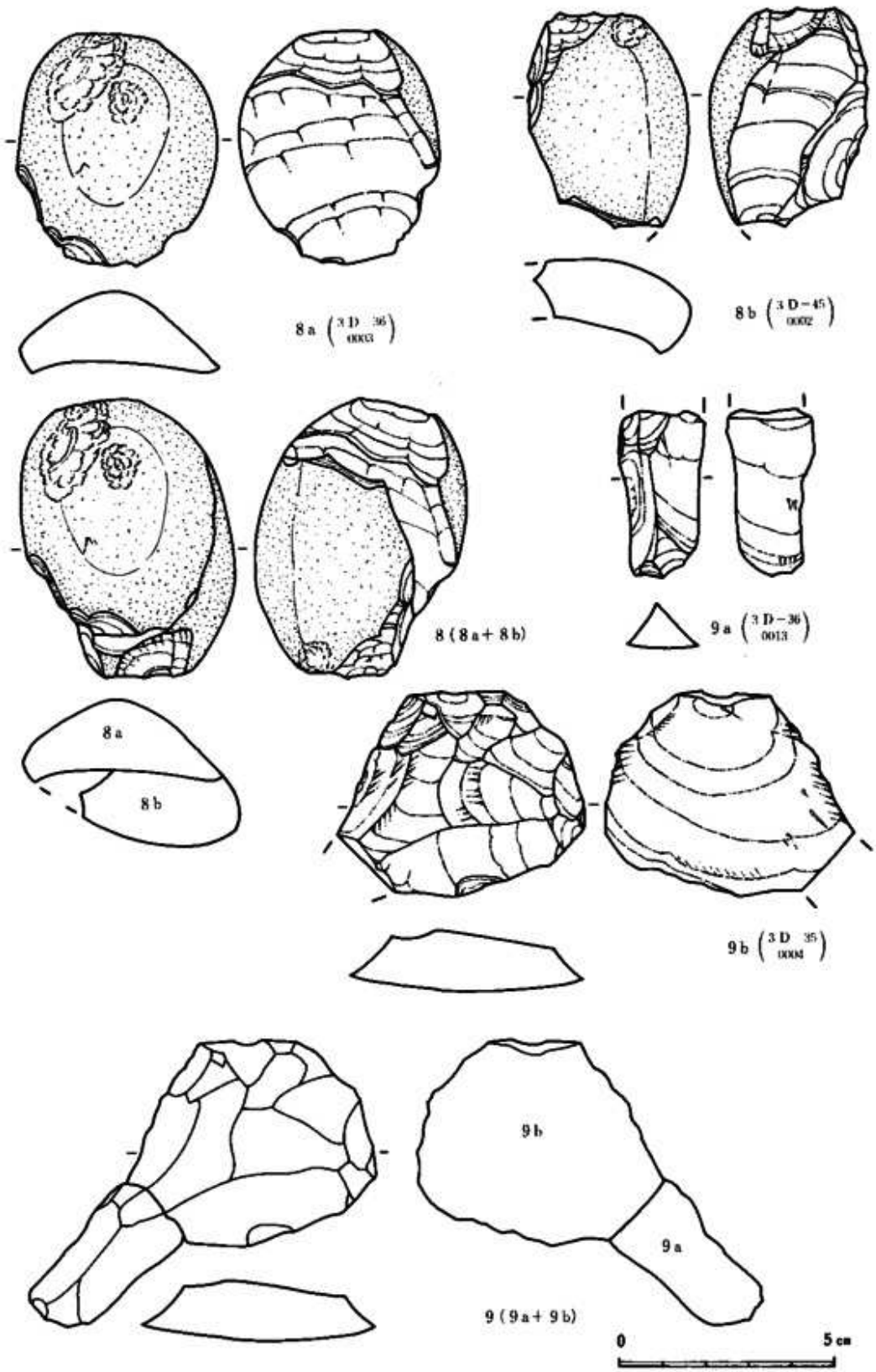
総数は 8 点と少なく、1 点だけが石核で、他は剝片類である。石材別に分類すると、玄武岩 5 点，安山岩 2 点，珪質頁岩 1 点である。

石　核（1）

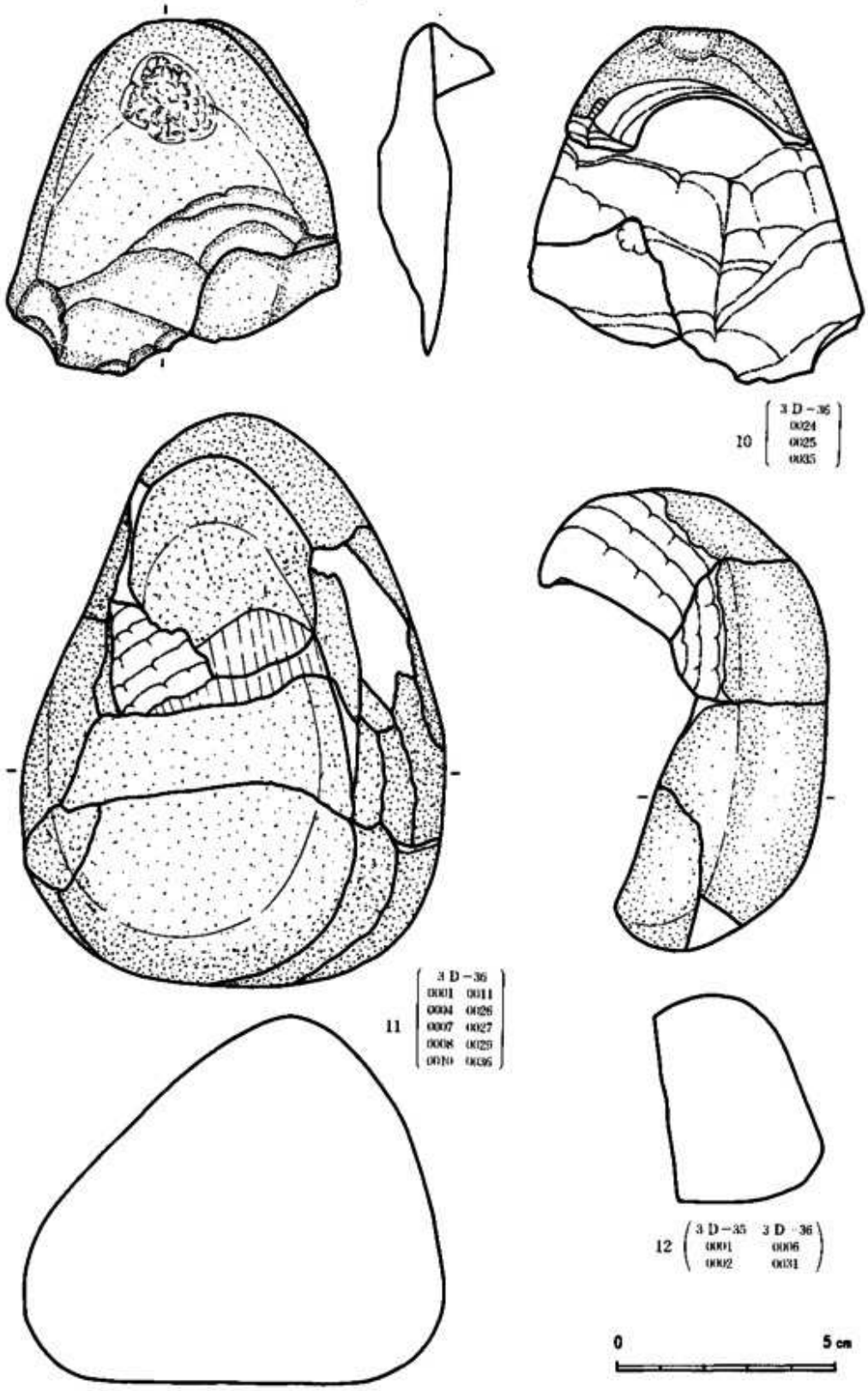
1 は多方向に打面を転位して剝離された石核である。表皮付近の石核と思われ、自然面を残している。石材は安山岩である。



第53図 第4ユニット出土遺物実測図(1) (2/3)



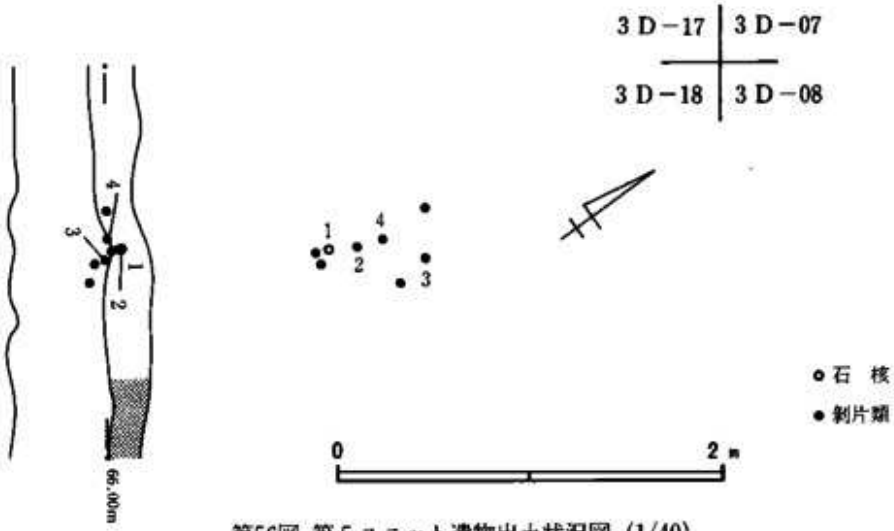
第54図 第4ユニット出土遺物実測図(2) (2/3)



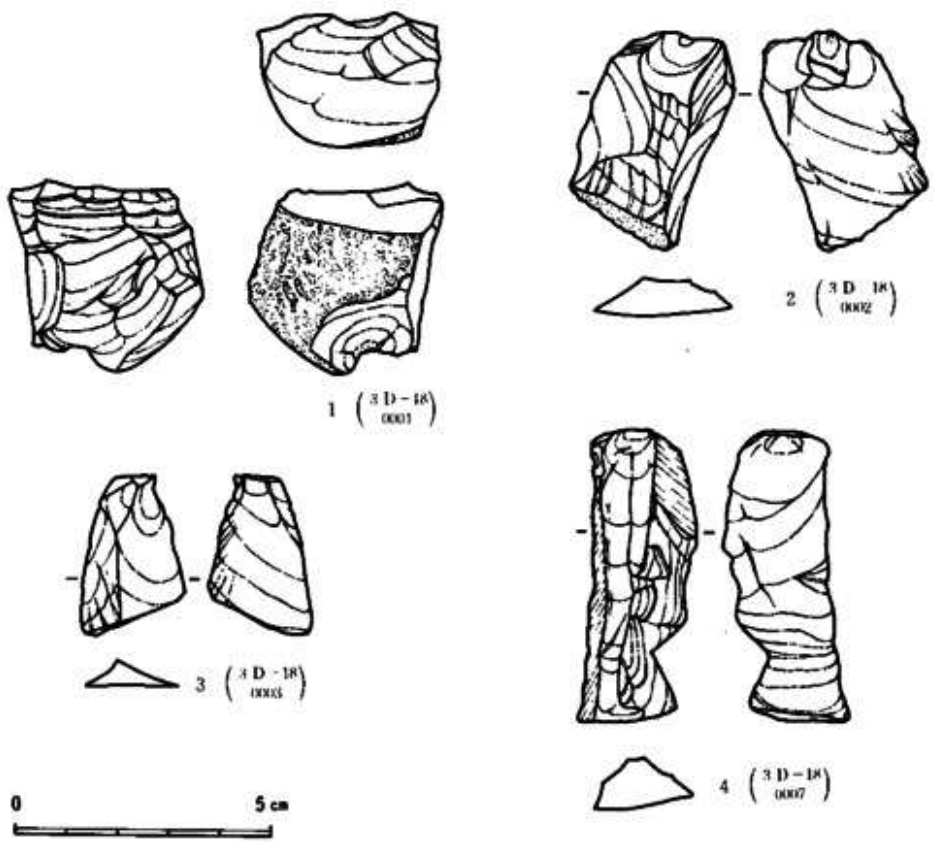
第55図 第4ユニット出土遺物実測図(3) (2/3)

剥片類（2～4）

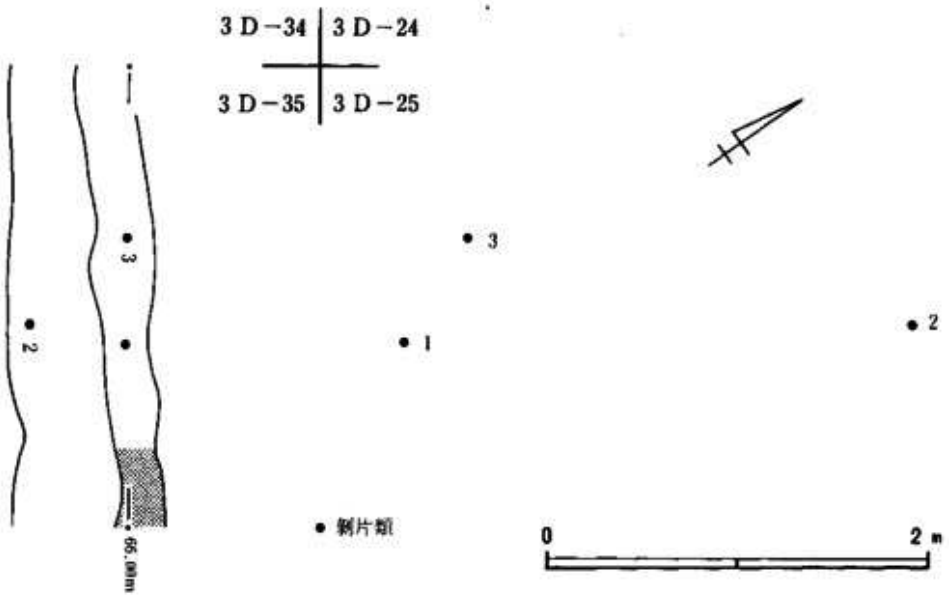
すべて縦長の剥片である。2は表面下端部に自然面を残す。4は表面の左側縁および右側縁上部に節理面がある。石材は2・3が玄武岩、4は珪質頁岩である。



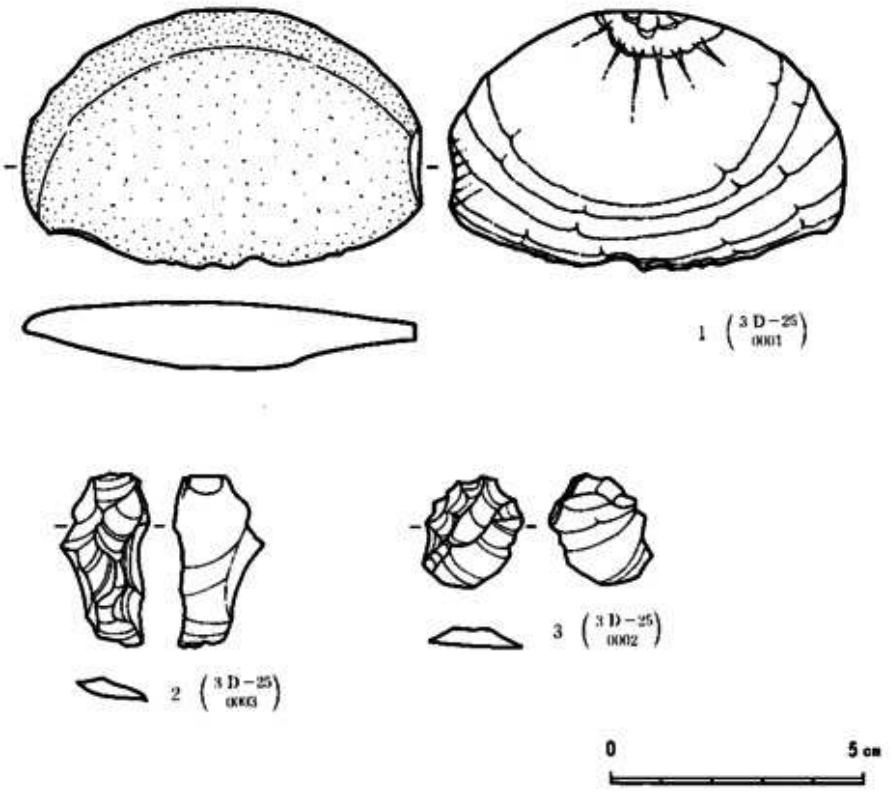
第56図 第5ユニット遺物出土状況図（1/40）



第57図 第5ユニット出土遺物実測図（2/3）



第58図第 6 ユニット遺物出土状況図 (1/40)



第59図 第 6 ユニット出土遺物実測図 (2/3)

第6ユニット

出土状況（第58図，図版28）

本ユニットは第5ユニットの西約12m、3D—25グリッド内に分布する。規模は南北1m，東西2.9mである。出土遺物は3点と散発的である。遺物の出土層位は第Ⅶ層である。しかし、第59図2だけ平面分布を見ると他の2点とはやや離れた所に位置し、層位断面の投影もやや深い第Ⅷ層のところから出土しているので、単独資料かもしれない。

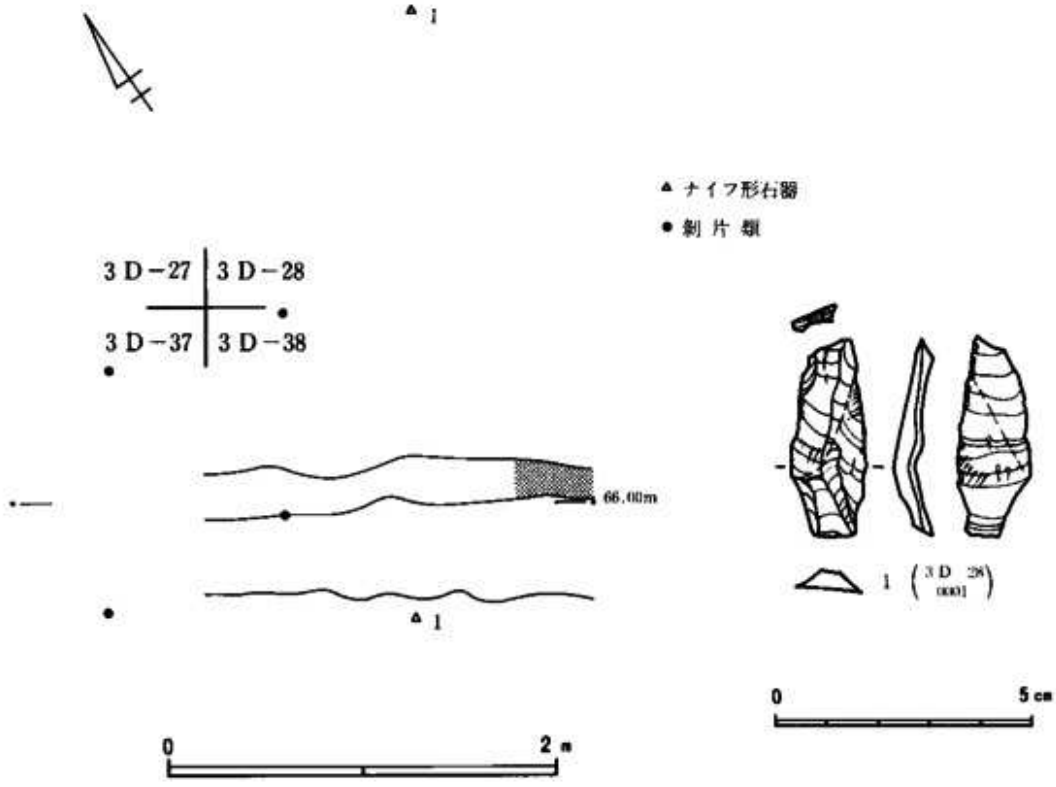
出土遺物（第59図，図版32）

総数は3点で、すべて剝片である。石材別に分類すると、1が砂岩で、2・3がメノウである。1は片面が自然面を残し、その部分が磨られている。最初は磨石だったかもしれない。2は縦長の剝片である。3は不整形剝片である。

第7ユニット

出土状況（第60図，図版28）

本ユニットは第5ユニットの南西約5m、3D—28・37・38の各グリッドにまたがって分布する。規模は南北1m，東西2.6mである。遺物は散発的で、層位は第Ⅷ層である。層位断面の投影図を見ると第Ⅷ層内には投影されていないが、出土した地点では、それぞれ第Ⅷ層内であ



第60図 第7ユニット遺物出土状況・出土遺物実測図（1/40・2/3）

る。

出土遺物（第60図，図版32）

総数3点である。1がナイフ形石器で、その他は砕片である。石材はすべて黒曜石である。

1は縦長剝片を調整したナイフ形石器である。先端部に細部調整が施されている。表面の右側縁に使用痕が認められる。打面は存しない。器長 3.8 cm，器幅 1.5 cm，器厚 0.4 cm。

2．縄文時代

i 遺構（第43図）

炉穴

1号炉穴（002）（第61図、図版33）

本炉穴は台地の平坦部4D－32グリッド内に位置し、標高約65mのところにある。開口部が径 80～90 cm、底部が長径 56 cm，短径 46 cm を測る楕円形の炉穴である。ソフトローム層の上面で確認され、その面からの深さは 28 cm を測る。断面形は、底部で丸く窪み「碗」形を呈する。底面はやや凹凸がある。なお、壁から底面にかけては何回も火を受けたと見え、非常に硬い。覆土は4層に区分でき、底部にはほぼ全面に厚さ 8 cm の焼土がレンズ状に堆積していた。遺物は出土しなかった。

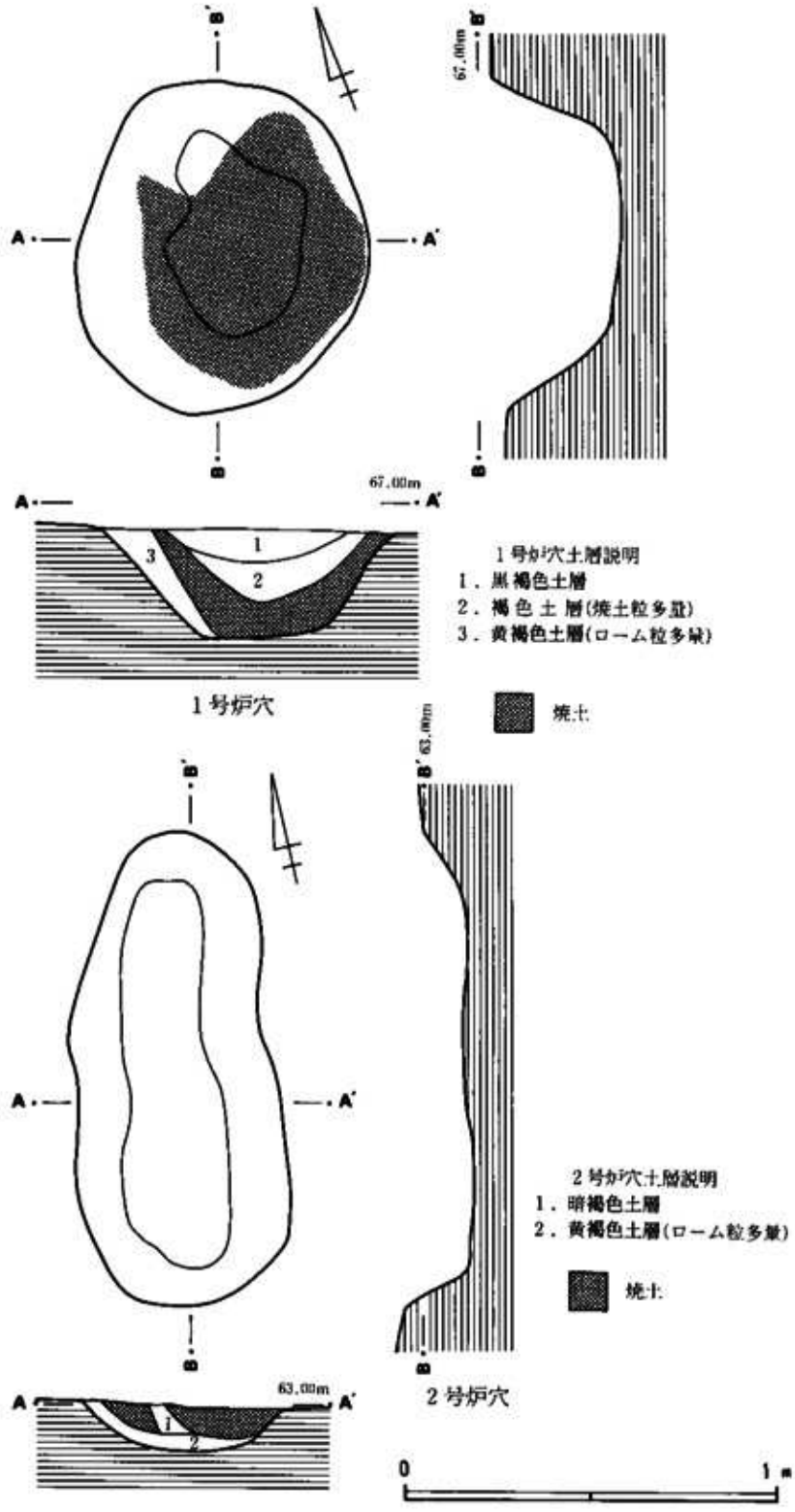
2号炉穴（012）（第61図，図版33）

本炉穴は台地の先端部7D－73グリッド内に位置し、標高約63mのところにある。長軸方向はN－15°－Eを指し、台地の縁辺に沿うように位置している。開口部が長径1.28m，短径0.54m、底部が長径1.04m，短径0.26mを測る長楕円形の炉穴である。ソフトローム層の上面で確認され、その面からの深さが 12～15 cm とかなり浅く、ソフトローム層中に掘り込まれている。断面形はレンズ状を呈する。壁は緩く傾斜しながら底部に至る。底面は、火をあまり受けなかったと思われ、軟質である。覆土は5層にわかれ、上部には厚さ 8 cm の焼土が2ケ所、ブロック状に堆積していた。この焼土も軟質である。遺物は出土しなかった。

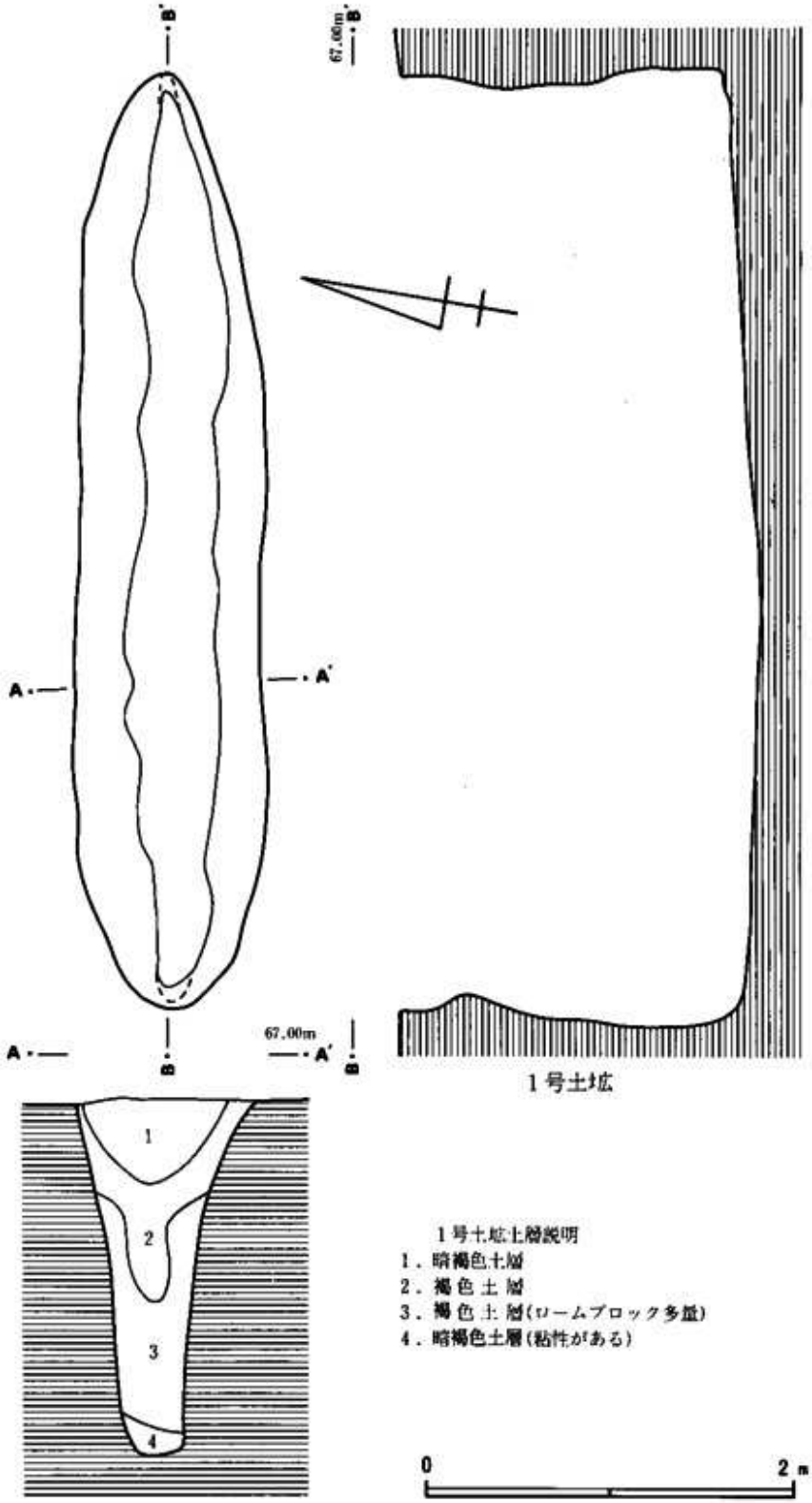
土坑

1号土坑（008）（第62図，図版33）

本土坑は大形の落し穴である。台地の平坦部3D－36・45・46の各グリッドにまたがって位置し、標高約67mのところにある。長軸方向はN－82°－Eを指し、低地の水田の方に向いている。開口部が長径5.06m，短径1.01m、底部が長径4.84m，短径0.4mを測る長楕円形の土坑である。ソフトローム層の上面で確認され、その面からの深さは1.92mとかなり深く、武蔵野ローム層の上面にまで達している。断面形は細長い逆台形を呈する。壁は開口部付近ではやや緩い傾斜であるが、底部になると急傾斜し、狭まっている。長軸先端部においてややオーバーハングしている。底面は平坦である。覆土は4層にわかれ、上部において黒色味を帯びる。なお、



第61図　1・2号炉穴実測図（1/20）



第62図　1号土坑実測図(1/40)

本土坑の周辺は先土器時代の遺物の集中地点であるため、壁際にあったと思われる何点かの遺物は、本土坑内に落ちた状態で検出された。

2号土坑（003）（第63図，図版33）

本土坑は落し穴である。1号土坑から北東へ4mへだてたところで、3D－27グリッド内に位置する。標高は約67mを測る。長軸方向は真北を指し、1号土坑と交差する方向に向いている。開口部が長径2.17m，短径0.95m、底部が長径2.02m，短径0.2mを測る長楕円形の土坑である。ソフトローム層の上面で確認され、その面からの深さは1.3mを測る。断面形は細長い逆台形を呈する。壁は開口部付近では広がっているが、底部に下がるに従って狭まっている。底面は平坦である。覆土は7層に区分でき、上部において黒色味を帯びる。また、底部の壁際も黒色味を帯びる。なお、南側の上端の一部を先土器時代の調査時に削除してしまった。

3号土坑（004）（第63図，図版33）

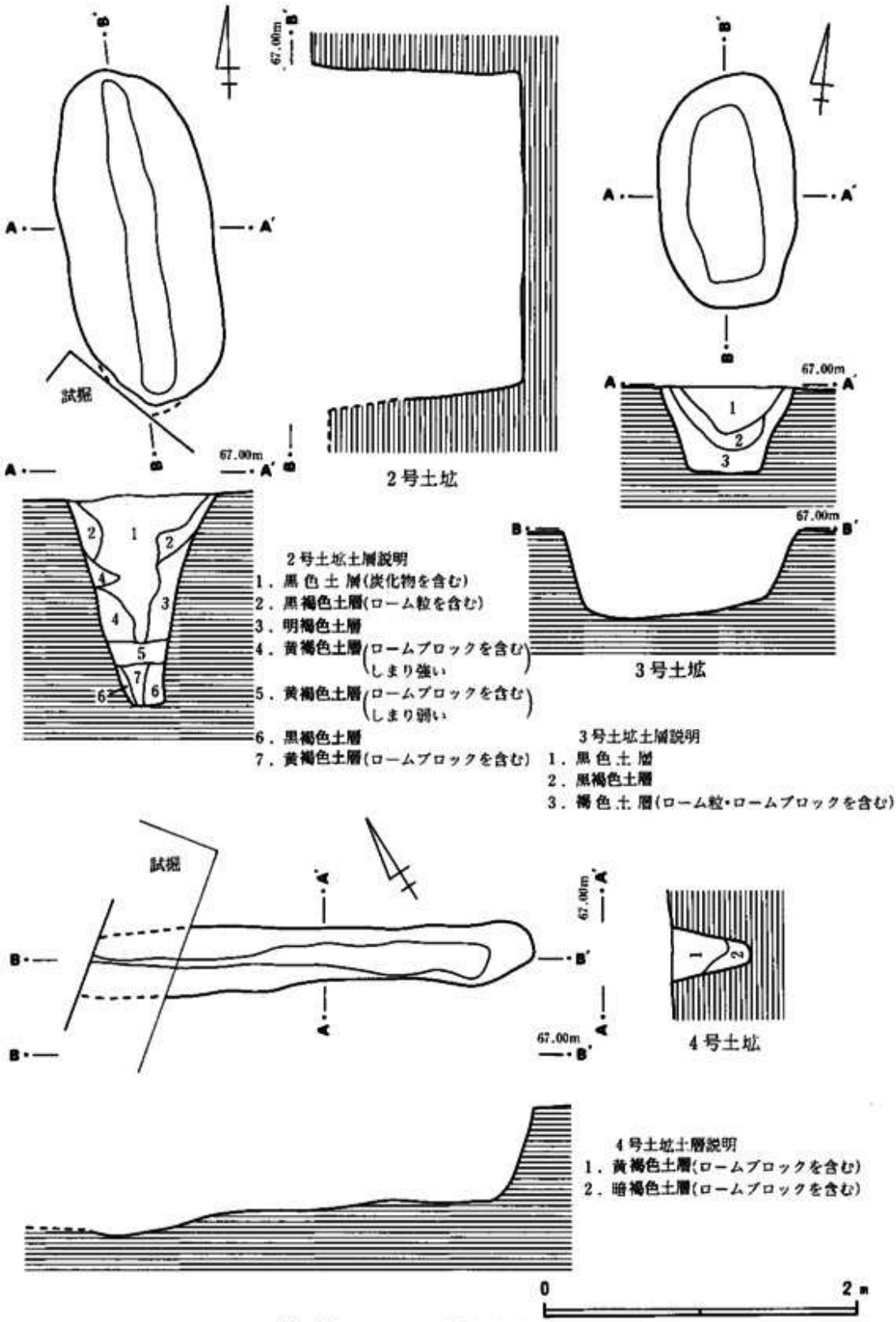
本土坑は、1号土坑から北へ6mへだてたところで、3D－34グリッド内に位置する。標高は約67mを測る。長軸方向は真北を指し、2号土坑と同じ方向を向いている。開口部が長径1.5m，短径0.87m、底部が長径1.12m，短径0.48mを測る長楕円形の土坑である。ソフトローム層の上面で確認され、その面からの深さは0.53mを測る。断面形は逆台形を呈する。壁は上部で段をなし、底部へ急激に落ちている。底面は平坦である。覆土は3層に区分でき、全体的に黒色味を帯びる。流れ込みによる堆積である。

4号土坑（005）（第63図，図版34）

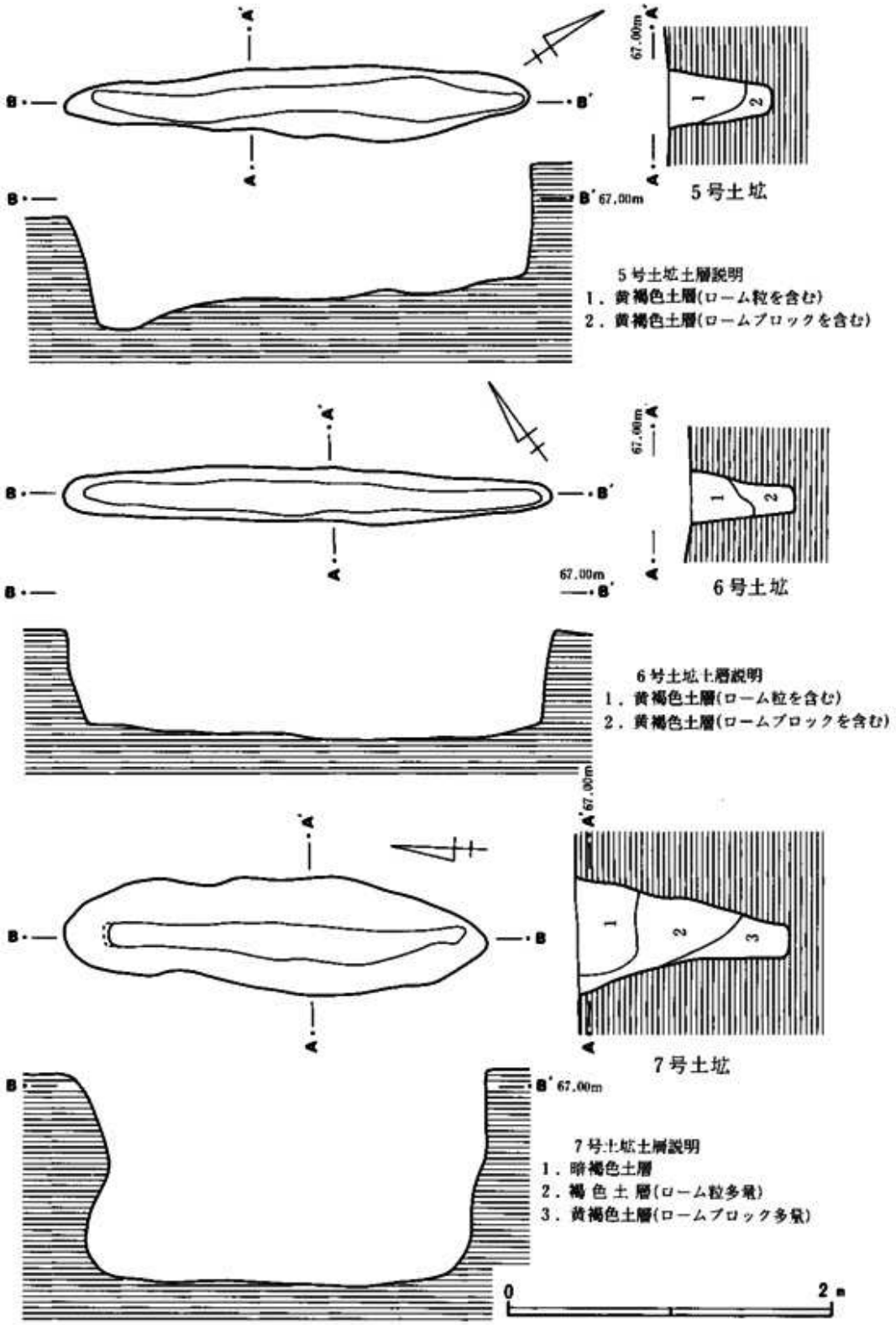
本土坑は落し穴である。2号土坑の南東約11mのところで、4D－20・21の各グリッドにまたがって位置し、標高約67mを測る。長軸方向はN－60°－Wを指し、1号土坑とほぼ同じ方向を向いている。開口部が推定長径3.12m，短径0.33m、底部が推定長径2.6m，短径0.14mを測る細長い楕円形の土坑である。確認面はハードローム層の上面である。しかし、上部の覆土の色調が黄褐色でソフトローム層と同じ色調を示し、また確認面から底面までの深さが浅いので、おそらくソフトローム層から掘り込んでいると思われる。確認面からの深さは0.5mを測る。断面形は「U」字形を呈する。壁は底部においてかなり狭まっている。底面は細く、溝状になっている。覆土は2層に区分でき、全体的に黄褐色を呈する。なお、本土坑の北西側先端部は先土器時代の調査時に削除してしまった。

5号土坑（006）（第64図，図版34）

本土坑は4号土坑と形態を同じくする落し穴である。4号土坑の北東約7mのところで4D－01・02の各グリッドにまたがって位置する。標高は約67mを測る。長軸方向はN－33°－Eを指し、4号土坑と交差する方向を向いている。開口部が長径2.91m，短径0.36m、底部が長径2.68m，短径0.18mを測る細長い楕円形の土坑である。確認面はソフトローム層の上面である。しかし、覆土の色調がソフトローム層と同様に黄褐色であるため、北西側半分をハードローム



第63図　2・3・4号土坑実測図（1/40）



第64図 5・6・7号土坑実測図 (1/40)

層上面まで削除してしまった。確認面からの深さは0.64mを測る。断面形は細長い「U」字形を呈する。壁の上部はそれほど広がりがなく、むしろ狭くなっており、底部においてはかなり細くなっている。底面は細い溝状になっている。覆土は2層に区分でき、色調が全体的に黄褐色を帯びている。そのため、ソフトローム層の上面で確認するのは困難であった。遺物は、出土しなかった。

6号土坑（007）（第64図，図版34）

本土坑は4号土坑と同じ形態の落し穴である。4号土坑の南約8mのところで、4D－30・31・40・41の各グリッドにまたがって位置している。標高は約67mを測る。長軸方向はN－53°－Wを指し、4号土坑とほぼ同じ方向を向いている。開口部が長径3.06m，短径0.33m、底部が長径2.86m，短径0.18mを測る細長い楕円形の土坑である。確認面はハードローム層の上面であるが、4号土坑と同様にソフトローム層上面から掘り込んでいるものと思われる。確認面からの深さは0.66mを測る。断面形は細長い「U」字形を呈し、壁は確認面から底部にかけてかなり狭まっている。底面は細い溝のようになっている。覆土は2層に区分でき、全体的に色調が黄褐色を帯びている。流れこみによる堆積である。遺物は出土していない。

7号土坑（009）（第64図，図版34）

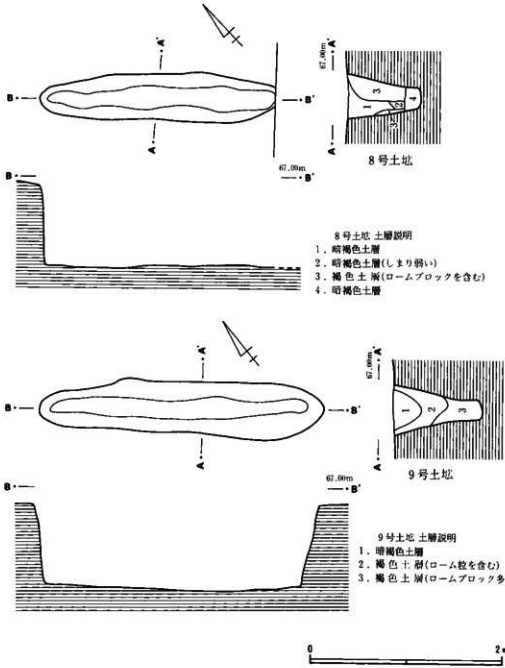
本土坑は落し穴である。1号土坑の北西約8mのところで、3D－53グリッド内に位置し、標高約67mを測る。長軸方向は真北を指し、3号土坑と同じ方向を向いている。開口部が長径2.62m，短径0.71m、底部が長径2.2m，短径0.2mを測る長楕円形の土坑である。確認面はソフトローム層の上面で、その面からの深さは1.3mを測る。断面形は細長い逆台形を呈する。壁は開口部でやや開いているが底部においてはかなり狭まっている。南側の壁はややオーバーハングしている。底面は平坦で、幾分広がる。覆土は3層に区分でき、上部においてやや黒色味を帯びる。流れ込みによる堆積である。遺物は出土していない。

8号土坑（010）（第65図，図版35）

本土坑は落し穴である。3号土坑の南約4mのところで、3D－44・45の各グリッドにまたがって位置し、標高約67mを測る。長軸方向はN－45°－Wを指し、6号土坑とほぼ同じ方向を向いている。開口部が推定長径2.55m，短径0.47m、底部が推定長径2.4m，短径0.22mを測る細長い楕円形の土坑である。確認面はソフトローム層の上面で、その面からの深さは0.74mを測る。断面形は細長い「U」字形を呈する。壁は開口部においてやや狭まく、底部にむかってさらに狭まっている。底面は溝状を呈する。覆土は4層に区分でき、底部には黒色味を帯びる土層が堆積している。遺物は出土していない。なお、南東側の先端部は先土器時代の調査時において削除してしまった。

9号土坑（011）（第65図，図版35）

本土坑は落し穴である。3号土坑の南東約5mのところで、3D－35・36の各グリッドにま



第65図 8・9号土坑実測図 (1/40)

たがって位置し、標高約67mを測る。長軸方向はN－50°－Wを指し、6・8号土坑とほぼ同じ方向を向いている。開口部が長径2.99m，短径0.54m、底部が長径2.70m，短径0.22mを測る細長い楕円形の土坑である。確認面はソフトローム上面であり、その面からの深さは0.94mである。断面形は細長い「U」字形を呈し、壁は北西壁においてややオーバーハングぎみである。底面は細く溝状になっている。覆土は3層に区分でき、流れ込みによる堆積である。遺物は出土していない。

ii グリッド出土遺物

土器（第66・67図，図版39）

縄文土器は調査区の平坦部全域から比較的多く出土している。そのうち縄文時代後期の土器が多数を占めている。ここでは、以下のとおり分類した。

第1群土器（第66図，図版39　1・2）

本群は早期の撚糸文系のものを一括する。稲荷台式に比定される。

1は口縁部片である。傾きはほぼ直立ぎみである。口唇下1cmのところから縦位の撚糸文Rが施されている。条間は広い。しかし、器表面がやや磨耗しているため、あまり文様がはっきりしない。

2は胴部片である。縦位の撚糸文Rが施されている。条間が広い。1と同様、器表面が磨耗しているため文様がはっきりしない。

第2群土器（第66図，図版39　3・4）

本群は早期の沈線文系のものを一括する。三戸式に比定される。

3・4は外面を縦方向に研磨した後、格子目の細い沈線が施文されている胴部片である。格子目の施文方法は右下りの平行沈線を施してから左下りの平行沈線を施している。内面もていねいに研磨されている。焼成は良く、胎土は細粒子で硬質である。なお、3は格子目文の上部に4条の平行沈線が施文されている。

第3群土器（第66図，図版39　5～9）

本群は前期のものを一括する。

第1類（5～7）

本類は繊維を含むものを一括する。

5は2つの原体の結束による羽状縄文が施された胴部片である。2つの原体とも単節RLである。内面は非常によく研磨されている。関山式に比定される。

6は斜縄文の施された胴部片である。単節RLの原体を縦位に回転して施文している。外面はやや磨耗しており、文様がはっきりしない。また、斜縄文は粗雑である。

7，8は無文の口縁部片である。2片とも波状口縁を呈し、外反している。また、内外面と

も器表面があれている。

第2類（9）

本類は繊維を含まないものを一括する。

9は半截竹管による格子目文を呈する胴部片である。施文方法は器表をヘラ様工具でていねいに研磨してから格子目を施している。また、上部には斜位の刻目文が施されている。

第4群土器（第66図，図版39　10・11）

本群は中期後半のものを一括する。加曽利ＥⅡ式に比定される。

10・11とも沈線区画による磨消懸垂文が施された胴部片である。地文である斜縄文はすべて単節ＬＲの原体を横回転して施されたものである。

第5群土器（第66図，図版39　12～24）

本群は後期前半のものを一括する。

第1類（12～23）

本類は堀之内Ⅰ式に比定されるものを一括する。

a種（12～16）

斜縄文を呈するもの。

12は頸部片である。沈線を沿えた隆帯上に円形および楕円形の刺突文が施されている。地文は横回転による単節ＲＬの斜縄文である。

13は波状口縁を呈する口縁部片である。波頂部から両端に円形の刺突文と中央に斜位の沈線が施された橋状把手を有する。口縁部文様は沈線による楕円区画文の中に楕円形の連続刺突文が横位に施されている。胴部文様は横回転による単節ＬＲの斜縄文である。傾きは「く」の字状に内曲する。

14～16は胴部片である。14は横回転による複節ＬＲＬの斜縄文地に1条の沈線蛇行懸垂文が施されている。15・16は共に横回転による単節ＬＲの斜縄文地に1条の沈線蛇行懸垂文が施されている。

b種（17～23）

櫛目文を呈するもの。

17・18は櫛目による蛇行懸垂文が施されている。17は口縁部片、18は胴部片である。

19・20は口縁部を1条の沈線で区画し、胴部に櫛目文が懸垂している。共に口縁部片である。

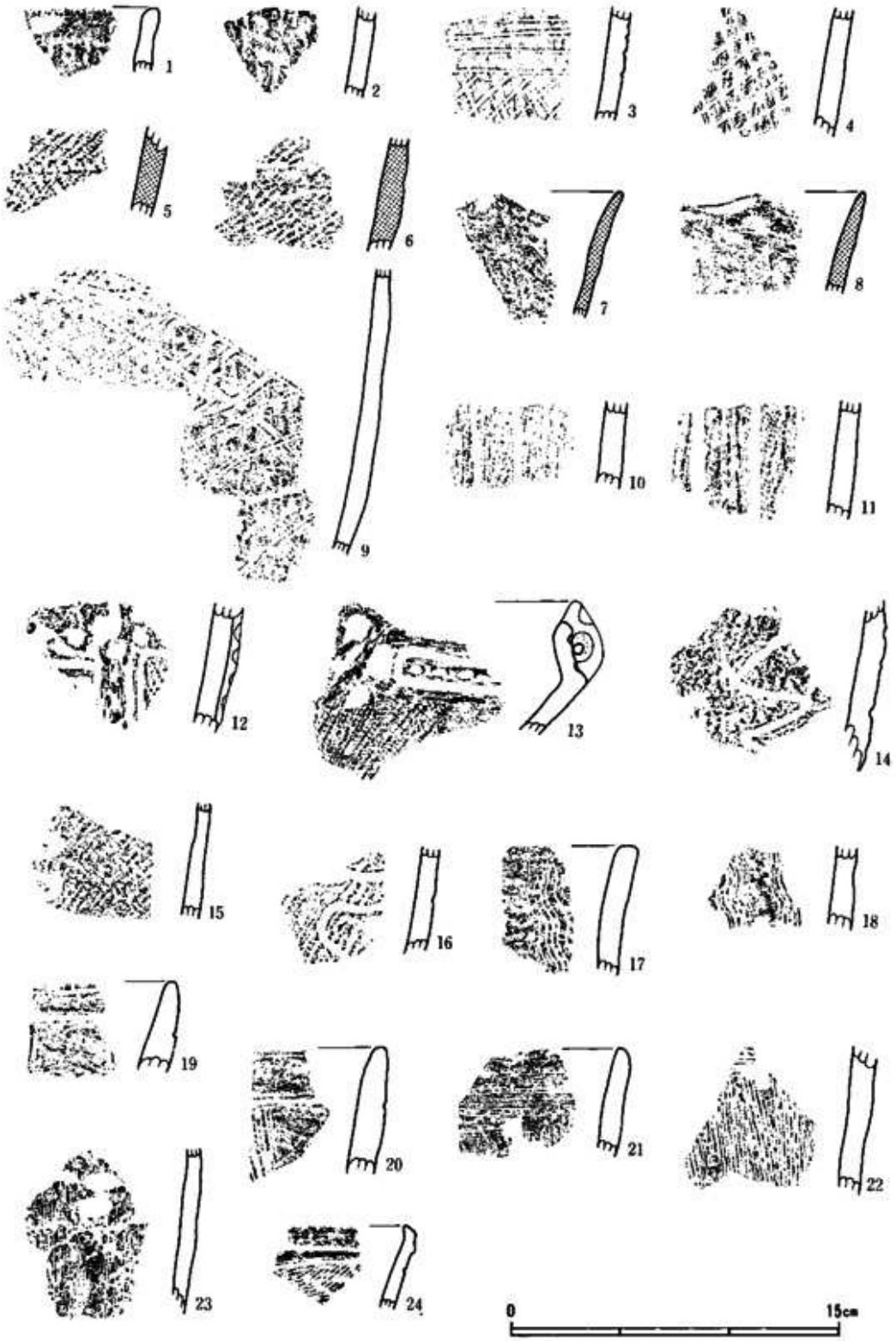
21・22は縦横に櫛目文が施されている。21は口縁部片で、22は胴部片である。

23は縦位の櫛目文が懸垂されている胴部片である。

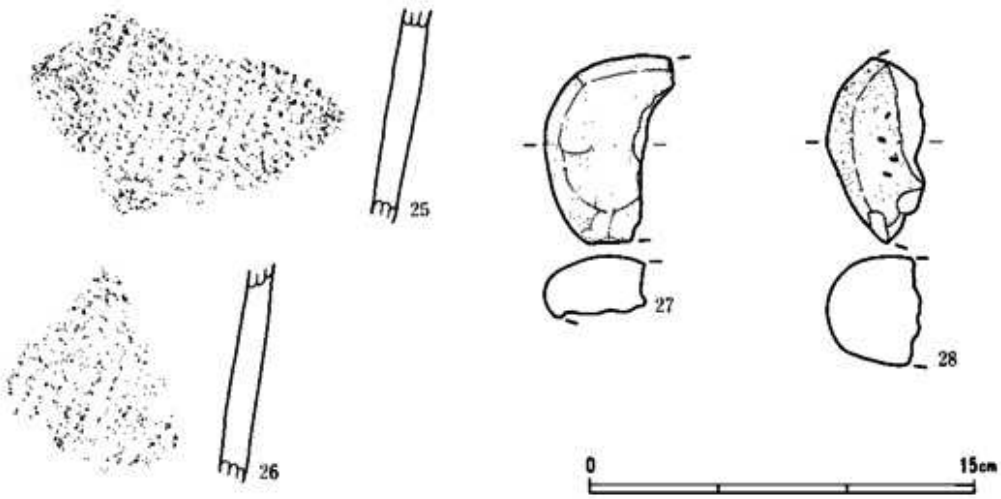
第2類（24）

本類は堀之内Ⅱ式に比定されるものを一括する。

24は口唇がやや内曲している口縁部片である。口縁部文様は刻み目のある微隆起線を1本め



第66図 グリッド出土遺物拓影図(1) (1/3)



第67図 グリッド出土遺物拓影・実測図(2) (1/3)

ぐらしている。胴部文様は沈線区画による幾何学の磨消文である。地文は縦回転による単節RLの斜縄文である。内面はよく研磨されている。薄手である。

第6群土器（第67図，図版39　25・26）

本群は後期半ばのものを一括する。加曽利B式土器である。

25・26ともに横回転による粗い単節LRの斜縄文を呈する胴部片である。粗製深鉢である。

石器（第67図，図版40　27・28）

27、28ともに磨石の欠損品である。27は石材が砂岩で、器表面はすべすべしている。28は石材が安山岩である。

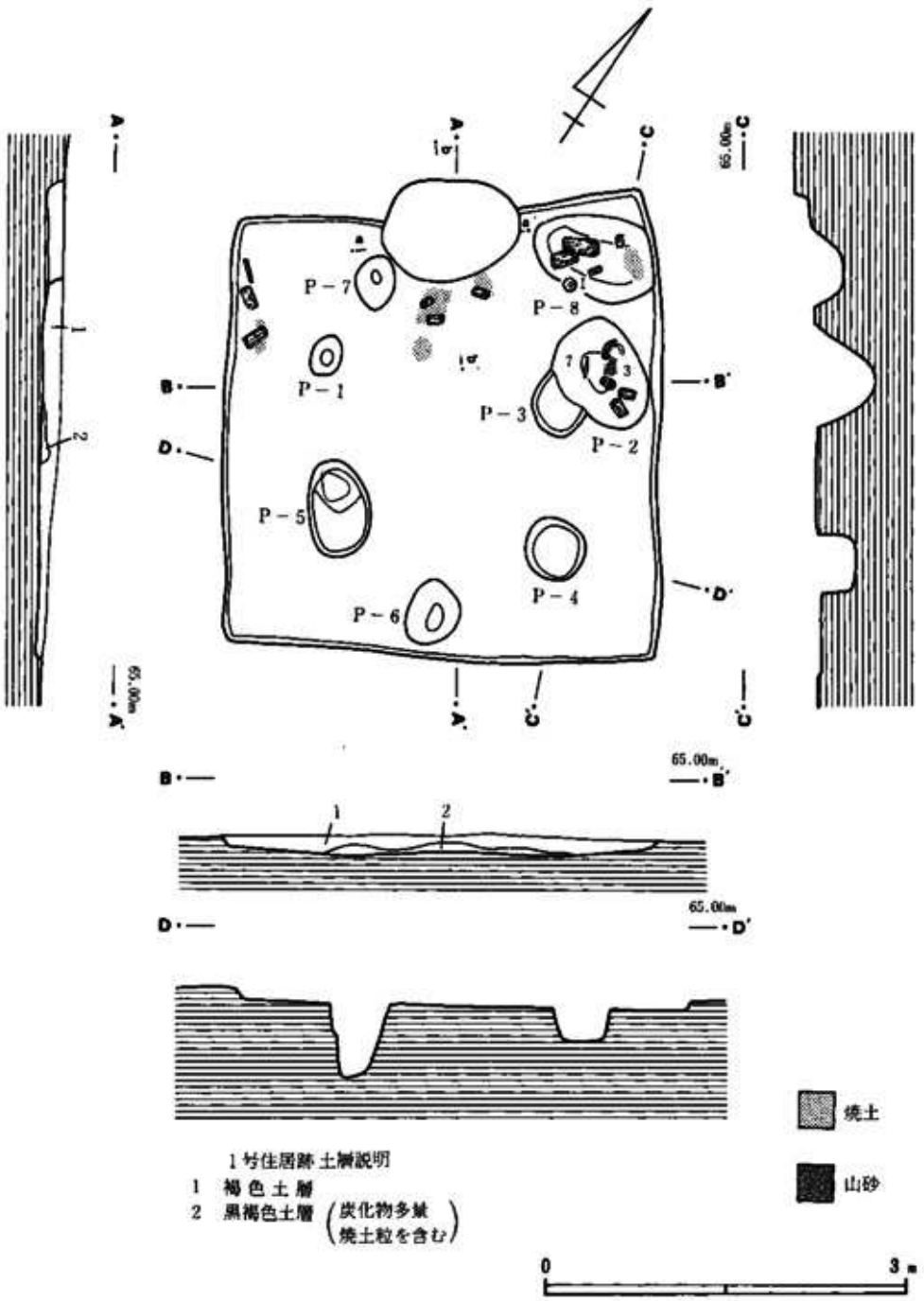
3．歴史時代

i 遺　構（第43図）

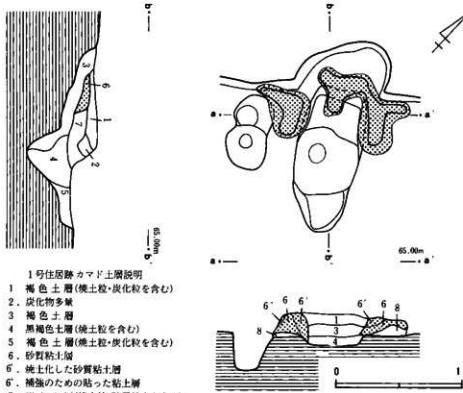
住居跡

1号住居跡（001）（第68・69図，図版36）

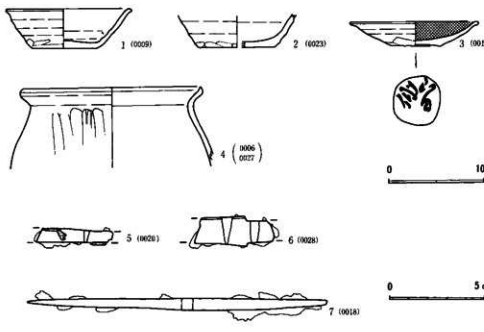
本住居跡は台地のほぼ中央部のところで、4D−38・39・48・49の各グリッドにかかって位置し、標高約65mを測る。規模が3.5×3.6mの方形である。主軸方向はN−35°−Wを指す。確認面は、北西壁周辺ではソフトローム層の上面であるが、その他の部分は黒色土層である。そのため、プランの状態は北西辺を除く他の3辺が、はっきりしなかった。しかし、本住居跡は焼失家屋とみえ、炭化物が確認面で多量に散布していたことによって、その範囲を確認することができた。確認面からの壁高は6〜8cmと非常に低い。床面はローム粒子と黒色土の混入した貼床である。中央およびピット周辺は硬く締まっており、壁際は軟質であった。北側には炭



第68図　1号住居跡実測図（1/60）



第69図 1号住居跡カマド実測図(1/30)



第70図 1号住居跡出土遺物実測図(1/4・1/2)

化材と焼土が集中していた。周溝は存在しない。ピットは8個検出され、それぞれの規模は、P－1が径 28 cm，深さ 30 cm、P－2が長径 91 cm，短径 65 cm，深さ 45 cm、P－3が径 46 cm，深さ 23 cm、P－4が径 52 cm，深さ 29 cm、P－5が長径 78 cm，短径 52 cm，深さ 51 cm、P－6が径 48 cm，深さ 40 cm、P－7が径 37 cm，深さ 68 cm、P－8が長径 104 cm，短径 66 cm，深さ 23 cm である。主柱穴はおそらくP－1，P－2，P－4，P－5の4本である。P－8は貯蔵穴であろう。P－2の覆土中からは、北側の上部よりピットの中央方向へ傾いた状態で「山田側」と墨書された土師の坏（第70図3）が、また、ほぼ中央の上部で先端を北に向けて横になった状態で鉄製錐（第70図7）が出土した。

カマドは北西壁の中央に位置する。袖部が内側にくずれており、天井部の遺存状態はよくない。規模は 86×110 cm を測り、壁から北西方向へ 35 cm 掘りこんでいる。袖部は右袖が長さ 39 cm，幅 32 cm，高さ 16 cm、左袖が長さ 43 cm，幅 25 cm，高さ 13 cm である。焚口部は長径 111 cm，短径 52 cm，深う 9 cm と長楕円形を呈し、中央に径 49 cm，深さ 40 cm の規模で円形に掘り窪められている。

出土遺物

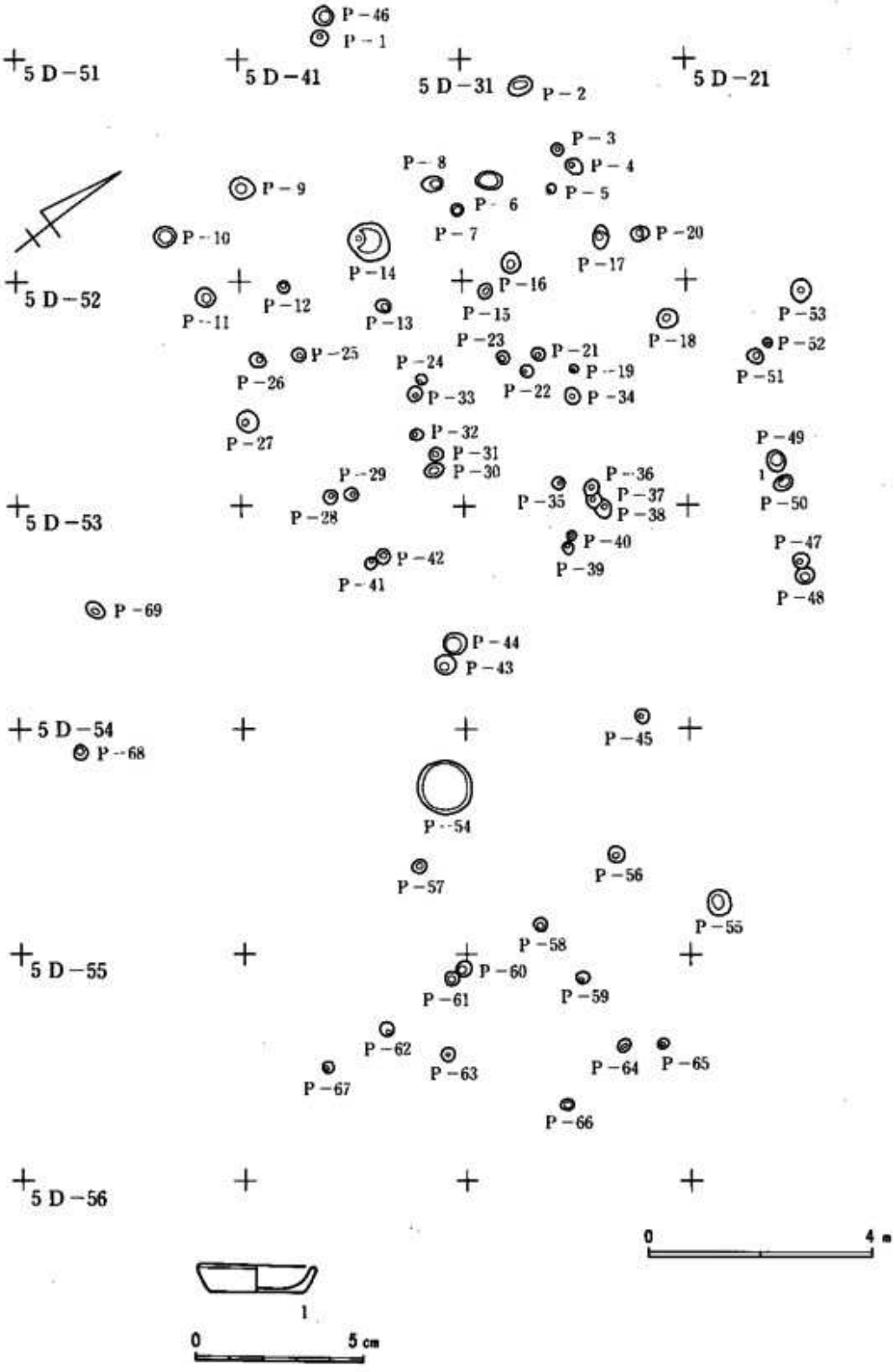
土器（第70図，図版37　1～4）

1は土師の坏である。器高 4.2 cm，口径 12.9 cm，底径 6.6 cm を浅る。体部は外反しながら立ち上がり、深みがある。口唇は丸みを呈する。内外面ともにヨコナデの調整であるが、外面の底部近くは手持ちヘラケズリが施されている。底部においては切り離し技法が不明であるが、最後の段階で手持ちヘラケズリが施されている。完形である。

2は土師の坏である。現高 3.3 cm，最大径 12.4 cm，底径 8.0 cm を測る。体部は外反しながら立ち上がる。ロクロ成形である。外面の底部近くは手持ちヘラケズリ調整が施されている。底部切り離しの技法は不明であるが、最後の段階で手持ちヘラケズリを施している。遺存度1/3。

3は土師の坏である。器高 2.5 cm，口径 13.3 cm，底径 5.2 cm を測る。体部は1よりもかなり外反し、皿形に近い。口唇は丸みを呈する。ロクロ成形である。外面は底部近くで手持ちヘラケズリ調整を施されている。内面は内黒で、ヘラミガキ調整が施されている。底部はロクロ左回転による回転糸切りで切り離した後、手持ちヘラケズリで調整されている。なお、底部には「山田側」と墨書されている。遺存度 5 / 6。

4は土師の甕である。現高 8.3 cm，推定口径 18.6 cm，推定最大径 21.4 cm を測る。器形は胴部でふくらみをもち、頸部で内曲し、口縁において急角度に外反する。口唇は先端が鋭角である。外面の口縁対と内面はヨコナデ調整で、外面の胴部は縦位にヘラケズリ調整が施されている。なお、外面にはススが付着している部分がある。遺存部 1 / 8。



第71図 ピット群実測図・出土遺物実測図（1/120・1/2）

鉄製品（第70図、図版37　5～7）

5は刀子である。現存長 3.9 cm 茎幅 0.7 cm を計る。一部に木質が付着している。遺存部分は茎部の一部である。本住居跡の覆土中から出土した。

6は刀子である。現存長 4.2 cm，刀身幅 1.3 cm，茎幅 1.1 cm を計る。平棟で両関である。刀身と茎の一部しか残存していない。P－7の覆土上部から横位の状態で出土した。

7は錐である。全長 15.7 cm，最大幅 0.6 cm，先端の幅 0.2 cm，基部の幅 0.3 cm を計る。先端は細く尖り、胴部のところでねくむみをもち、基部において細くなっている。原形はもっと細いと思われるが、サビによって膨張している。P－2の覆土中から出土した。出土状態はピット上端から 7 cm 下のほぼ中央のところで、先端を北に向けて横位になっていた。2つに折れていたが完形である。

ピット群（013）（第71図，図版35）

本遺構は5D－22～24・31～35・40～45・51～54の各グリッドにわたってソフトローム層の上面で確認できた。その上部は厚さ1.3mと非常に厚い表土におおわれていた。全部で69個の小ピットを検出し、これらの径は平均 29 cm，深さ平均 29 cm を測る。ピットの配列は散在的であるが、一部において規則性も見られることから、おそらく何棟かの柱穴群と思われる。

なお、径 25×36 cm，深さ 29 cm のP－50の覆土中からミニチュアの須恵質の皿(第71図1)を出土した。確認面から 7 cm 下で、やや西壁際の所から口縁を斜め上に向けた状態で検出した。

出土遺物（第71図、図版37　1）

1はミニチュアの須恵質の皿である。器高 0.8 cm，口径 3.4 cm，底径 2.8 cm を計る。器形は底面が平坦で、口縁部がやや垂直ぎみに立ち上がっている。内外面ともにヨコナデの調整である。底部切り離しの方法は不明であるが、最後の段階でヘラナデを施している。外面の口縁部から内面にかけて自然釉らしきものがかかっている。P－50の覆土内から出土した。

その他の遺構（別図1）

以上の遺構の他に本遺跡が立地する台地上には、土塁・溝・テラス等が台地の周辺に残存している。しかし、これらの遺構は調査区域外に広がるため、発掘調査できなかった。そこで、台地の地形測量を行い、図化することにした。別図1がそれである。

台地の地形は、西から東へ半島状に延び、台地先端の北側と東側の斜面が急傾斜している。東側の低地には村田川が北流している。本台地の先端部は基部より一段低くなっており、比高差は約20mを測る。その先端部に土塁・溝・テラス等が所在する。標高は68mを測り、低地との比高差は約20mである。

土塁は部分的に残存しているため、仮りに第１土塁，第２土塁，第３土塁と呼称することにした。

第１土塁は台地先端の北側の縁辺部、標高66mのところに残存している。低地との比高差は約21mを測る。本土塁の外側の斜面は谷に向かって急激に落ちている。この土塁の規模は全長25m，高さ1.3m，幅３mを測り、断面形が「かまぼこ」状を呈する。おそらく、台地北側の縁辺に沿って、台地先端部を囲むように構築されていたのであろう。なお、本土塁上には篠類および雑草が繁茂している。

第２土塁は台地の基部から先端部に向かって傾斜する斜面上に、先端部を区画するように構築されており、台地の先端部のほうへ湾曲しつつ、台地を横断するように構築された土塁とこの土塁から先端部へ向って延びる２本の土塁から成り立つものである。本土塁が所在する標高は73～75mを測る。規模は全長約150m，平均高さ1.3m，平均幅２mを測る。断面形は「かまぼこ」状を呈する。本土塁上には雑草が繁茂している。

第３土塁は台地先端部の南側、標高約66mのところに、等高線と直交するように構築されている。土塁の規模は全長22m，高さ約２m，幅約２mである。本土塁の北面は２段になっており、南面は道によって若干削除されている。断面形は段階状を呈する。上部は雑草でおおわれている。

溝は第２土塁外側の台地基部側に土塁に沿って掘られている。しかし、台地先端部の南側の所では道によって削除されており、どのように溝が延びているのか不明である。規模は全長約150m，平均幅2.5m，現況の平均深さ１mを測る。現在、溝は完全に埋まりきらずに、断面形が「U」字状に窪んでいる。溝中は雑草および篠類でおおわれている。

テラスは第１土塁の外側の斜面部、標高65～66mのところに、斜面に沿って構築されている。北側の斜面は急傾斜している。規模は全長約30m，幅約５mである。低地との比高差は約20mである。現況は篠類が繁茂している。

本遺跡の周辺には、城跡，砦跡等の遺跡が数多く所在する。

まず、本遺跡の北東側対岸には、板倉砦跡（第１図44）と向砦跡（同図43）がある。また、千葉氏ともっとも関係が深い大椎城跡（同図42）が本遺跡から約 1.5 km 北上した台地上に所在する。その他、土気城跡、南河原坂城跡（同図40），御堂崎城跡（同図41）がある。

このように、周囲には多くの城跡や砦跡が所在し、また、土塁や溝・テラス等が台地の先端部を区画するように集中して構築されており、今回の調査において16世紀後半から17世紀前半頃の陶器片が出土したこと、あるいはピット群の存在などから、本遺跡も城跡に関係する遺跡であろうと思われるが、城・館跡とするには若干の疑問点がないわけではない。

即ち、本遺跡が立地する舌状台地は、先端部が基部より１段低くなっており、比高が約20mとかなりある。もし、城跡であるとするならば、高い基部のほうが主郭となり、先端部が第２

の郭と考えるのが妥当と思われるが、基部にはそのような遺構が現状では確認できなかった。そこで、仮に先端部のみを郭とすると、第2土塁の位置からして台地基部のほうからの攻撃に対しての弱さがあるように思われる。また、第2土塁および溝の構築位置が斜面途中であることは、他に類例がなく台地基部方向からの攻撃に対して効果があるかどうか疑問であり、城郭としての土塁・溝であるならば、斜面ではなく先端部の平坦な所に構築するべきではなかろうか。そして、今回の発掘調査において、城跡に関する遺構が検出できなかったことである。したがって、ここでは早急な結論はせずに今後の調査を待って検討したい。

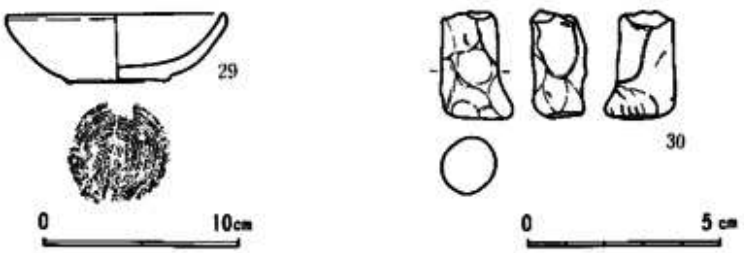
ii グリット出土遺物（第72図，図版39）

土師器（第72図，図版39　29）

29は坏である。器高 3.4 cm，推定口径 11.2 cm，底径 5.2 cm を計る。ロクロ成形による。内外面ともにヨコナデ調整である。底部には、ロクロ左回転による回転糸切り痕がみられる。遺存度 1 / 3 。

土製品（第72図，図版39　30）

30は土製人形と思われる左脚部である。現高 2.7 cm，径 1.4 cm，足長 1.9 cm，足幅 1.4 cm を計る。



第72図　グリッド出土遺物実測図（1/4・1/2）

陶器

16世紀後半から17世紀前半ごろの志野および常滑の陶器片が数点出土した。

鉄滓　羽口（図版40）

詳細は第2表のとおりである。

第2表　グリッド出土鉄滓および羽口一覧表

番号	種　類	出土グリッド	重　量	備　　考
1	鉄滓	5 D－31	225 g	形状は半碗形である。全体的に気孔が多く、比重は重い。比較的サビは付着していない。
2	鉄滓	3 D－45	80 g	比較的比重は重く、平坦面のところにサビが付着している。不整形である。
3	鉄滓	5 D－31	98 g	気孔が多く、凹凸が著しい。比重は比較的軽い。サビはあまり付着していない。不整形である。
4	鉄滓	5 D－32	100 g	比重は重く、全面にサビが付着している。特に平坦面は著しい。不整形である。
5	鉄滓	4 D－32	71 g	比重は比較的軽い。色調は黒褐色を呈している。不整形である。
6	鉄滓	4 D－32	50 g	気孔が多く、比重は軽い。不整形である。
7	鉄滓（鉄塊？）	4 D－32	309 g	比重は極めて重く、全面にサビが付着している。一部には黒光りするところがある。鉄塊かもしれない。不整形である。
8	羽口	5 D－41	22 g	表面はガラス化が著しい。
9	羽口	3 D－45	22 g	一部ガラス化している。
10	羽口	5 D－41	18 g	小破片である。
11	羽口	4 D－18	15 g	小破片である。

第4節　ま　と　め

調査の結果、本遺跡において検出された遺構は先土器時代の遺物集中地点7ヶ所、縄文時代の炉穴2基および土坑9基、歴史時代の住居跡1軒およびピット群1ヶ所である。また、台地の周辺には、土塁および溝、テラス等が確認できた。

この地域における先土器時代の資料報告は初めてである。しかし、この周辺では千葉市土気地区遺跡調査会による発掘調査が進められており、先土器時代の資料を得たとのことである。今後、その報告を待って、この地区周辺の先土器時代の全容を検討したい。

なお、詳細については以下のとおりである。

先土器時代

標高68mを測る舌状台地先端の北側の平坦部に7つのユニットを検出した。出土層位は第1～4ユニットが第Ⅳ～Ⅴ層、第5・6ユニットが第Ⅶ層、第7ユニットが第Ⅷ層である。

第1ユニットは、散発的で、1点のスクレイパーを伴うユニットである。剥片同士の接合資料が得られたが、剥離技法は明らかでない。石材はすべてメノウである。

第2ユニットは、散発的に剥片類が分布するユニットである。

第3ユニットは、小形の剝片および砕片が分布するユニットである。石器および石核は遺存しない。したがって、ここで製品をつくり、石器および石核はもちだされたために、ここでは、屑だけが残ったものであろう。石材はすべて黒曜石である。

第4ユニットは、ナイフ形石器2点，スクレイパー1点，磨石1点を伴うユニットである。また、砕礫が多く分布し、接合できるものが3個体あった。砕礫は火熱によって割れたものが多い。

ナイフ形石器は2点とも両縁調整を施しているものである。しかし、素材の縁辺を残す部分は第53図1は左側であるのに、同図2は右側である。ともに断面は三角形を呈し、縦長剝片を素材にしている。ここで注目しておきたいことは、砕礫は集中しているのに、石器は、その外側に散在的に分布していることである。

第5ユニットは石核が1点伴うユニットである。出土遺物は少なく小規模である。

第6ユニットは3点の剝片が分布するユニットである。

第7ユニットは1点のナイフ形石器を含むユニットである。散在的に分布しているため第60図1の単独ユニットと考えてよいかもしれない。ナイフ形石器は先端部のみの細部調整である。

縄文時代

2基の炉穴と9基の土坑を検出した。炉穴に関しては、1号炉穴が台地平坦部の中央に、2号炉穴が南側の台地先端部で検出された。土坑については、台地先端の北側で検出された。規模としては、第1号土坑の長さ5.06mが最大であり、3号土坑の長さ1.5mが最小であるが、その他は大体2～3m前後のものである。形態から判断して、落し穴と思われる。しかし、各土坑は規則的に配置されておらず、また、各土坑内から遺物は出土しなかったので、それぞれ関連があるのかどうかは不明である。

遺物は遺構外から縄文時代早期から後期にかけての土器片が出土し、なかでも堀之内Ⅰ式のものが主体的である。

歴史時代

住居跡1軒とピット群を検出した。

住居跡は国分期所産のもので、台地平坦部の中央に位置していた。覆土内および床面直上には炭化材が検出されたので、おそらく火災住居であろう。住居跡内から「山田側」と墨書された土師質の坏を出土した。墨書土器はこれ1点だけであり、この文字が何を意味するのかを断定するのは困難である。したがって、今後、資料の増加を待って明らかにしていきたい。

参考文献

小田静夫他「高井戸東遺跡」1977年

加藤晋平他「図録　石器の基礎知識Ⅰ－先土器（上）」1980年

加藤晋平他「図録　石器の基礎知識Ⅱ－先土器（下）」1980年

神奈川県教育委員会「東正院遺跡調査報告」1972年

鈴木遺跡調査団「鈴木遺跡　Ⅲ」1980年

鈴木正博他「取手と先史文化－中妻貝塚の研究－上巻」1979年

鈴木正博他「取手と先史文化－中妻貝塚の研究－下巻」1981年

千葉県文化財センター「研究紀要１」1976年

千葉県文化財センター「船葉市奈木台・藤沢・中芝・清水作遺跡」1979年

所沢市教育委員会「砂川遺跡先土器時代遺跡－埼玉県所沢市砂川遺跡の第２次調査」1974年

藤本弥城「那珂川下流域の石器時代研究Ⅰ」1977年

藤本弥城「那珂川下流域の石器時代研究Ⅱ」1980年

CONTENTS

Preface

Explanatory notes

Contents

Chapter I Introduction

Section 1 Circumstance of investigation

2 Enviroments and surrounding sites

3 Planning and process of investigation

Chapter II Semata-kita Site

Section 1 Location

2 Stratigraphy

3 Remains and artifacts

1) The Pre-pottery Period

2) The Other Periods

4 Summary

Chapter III Semata-minami Site

Section 1 Location

2 Stratigraphy

3 Remains and artifacts

1) The Pre-pottery Period

2) The Jomon Period

4 Summary

Chapter IV Ookido Site

Section 1 Location

2 Stratigraphy

3 Remains and artifacts

4 Summary

Chapter V Itakura-cho Site

Section 1 Location

2 Stratigraphy

3 Remains and artifacts

1) The Pre-pottery Period

2) The Jomon Period

3) The Historical Period

4 Summary

Summary

This report was made on the excavation of the cultural properites conducted along with construction of Chiba-Sotobo toll highway. We investigated the 4 sites; Semata-kita Site, Semata-minami Site, Ookido Site and Itakura-cho Site found along this highway line. These sites lie on the tableland of 70 m above the sea level stretching up the River Murata which flows into the Bay of Tokyo.

The Semata-kita Site is located around 1012-17 Aza-Saburouemonyatsu, Semata, Ichihara -shi, Chiba-ken. The excavation had been conducted from May 10 to July 10, 1982 and covered the area of 2,670 square meters. We found the following remains and artifacts;

remains: one unit of the Pre-pottery Period

four pits (two of them included shell block)

artifacts : stone implements of Pre-pottery Period

(knife-shaped stone implements, a graver, a scraper etc.)

potshards of the Jomon Period

one coin and unglazed earthenware of the Historical Period

The Semata minami Site is located around 1017 Aza-kosakidai, Semata, Ichihara-shi, Chiba-ken. The excavation had been conducted from December 8, 1982 to February 8, 1983 and covered the area of 3,150 square meters. We found the following remains and artifacts ;

remains : three units of the Pre-pottery Period

three pits of the Jomon Period

artifacts : stone implements of the Pre-pottery Period

(knife-shaped stone implements, a scraper etc.)

potshards, grindstones and arrow-heads of the Jomon Period

The Ookido Site is located around 1215-13 Ookido-cho, Chiba-shi, Chiba-ken. The excavation had been conducted from February 8 to March 7, 1983 and covered the area of 600 square meters. We found the following remains and artifacts ;

remains : only one pit

artifacts : little potshards and one hammer stone of the Jomon Period

The Itakura-cho Site is located around 513-1 Itakura-cho, Chiba-shi, Chiba-ken. The excavation had been conducted from July 12 to November 30, 1982 and covered the area of 5,620 square meters. We found the following remains and artifacts ;

remains : seven units of the Pre-pottery Period

two fire pits and nine pits of the Jomon Period

one dwelling pit, one group of pits, one earthwork, one ditch and one terrace of the Historical Period

artifacts : stone implements of the Pre-pottery Period

(knife-shaped stone implements, scrapers)

potshards of the Jomon Period

Hajiki pottery of the Heian Period

ceramics of the Historical Period

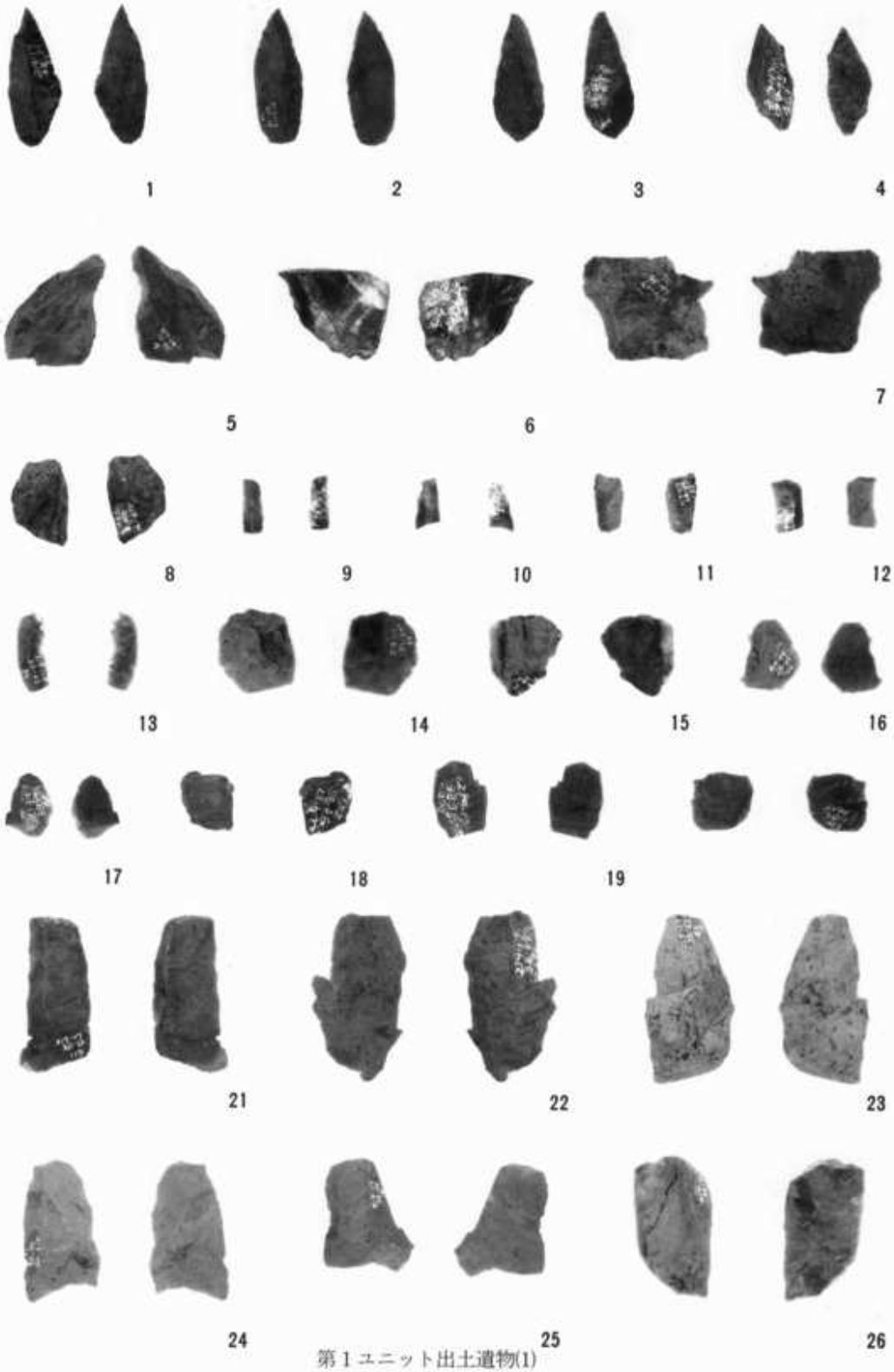
写真図版

調査前遺跡近景(1)

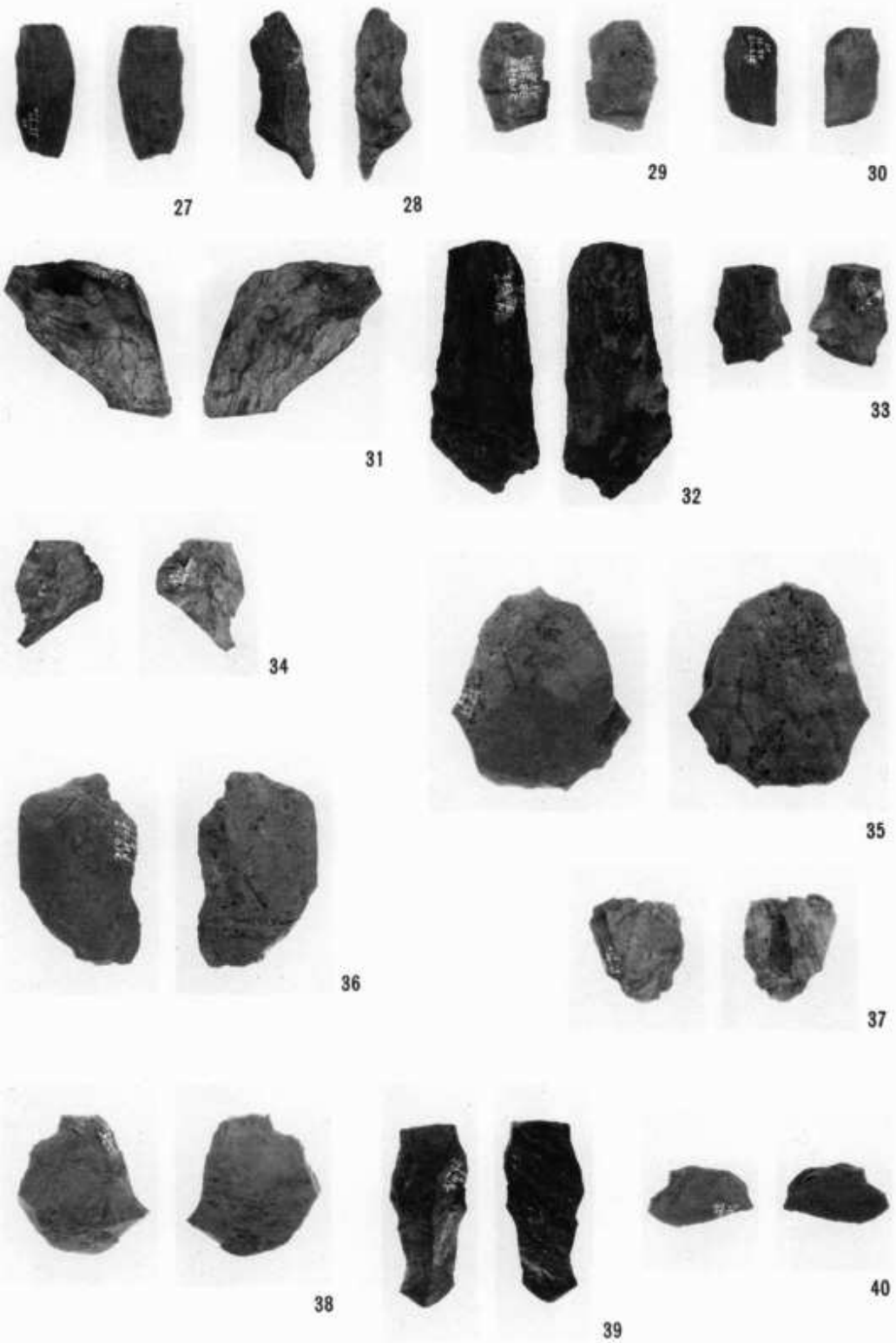
調査前遺跡近景(2)

第１ユニット遺物出土状況(1)

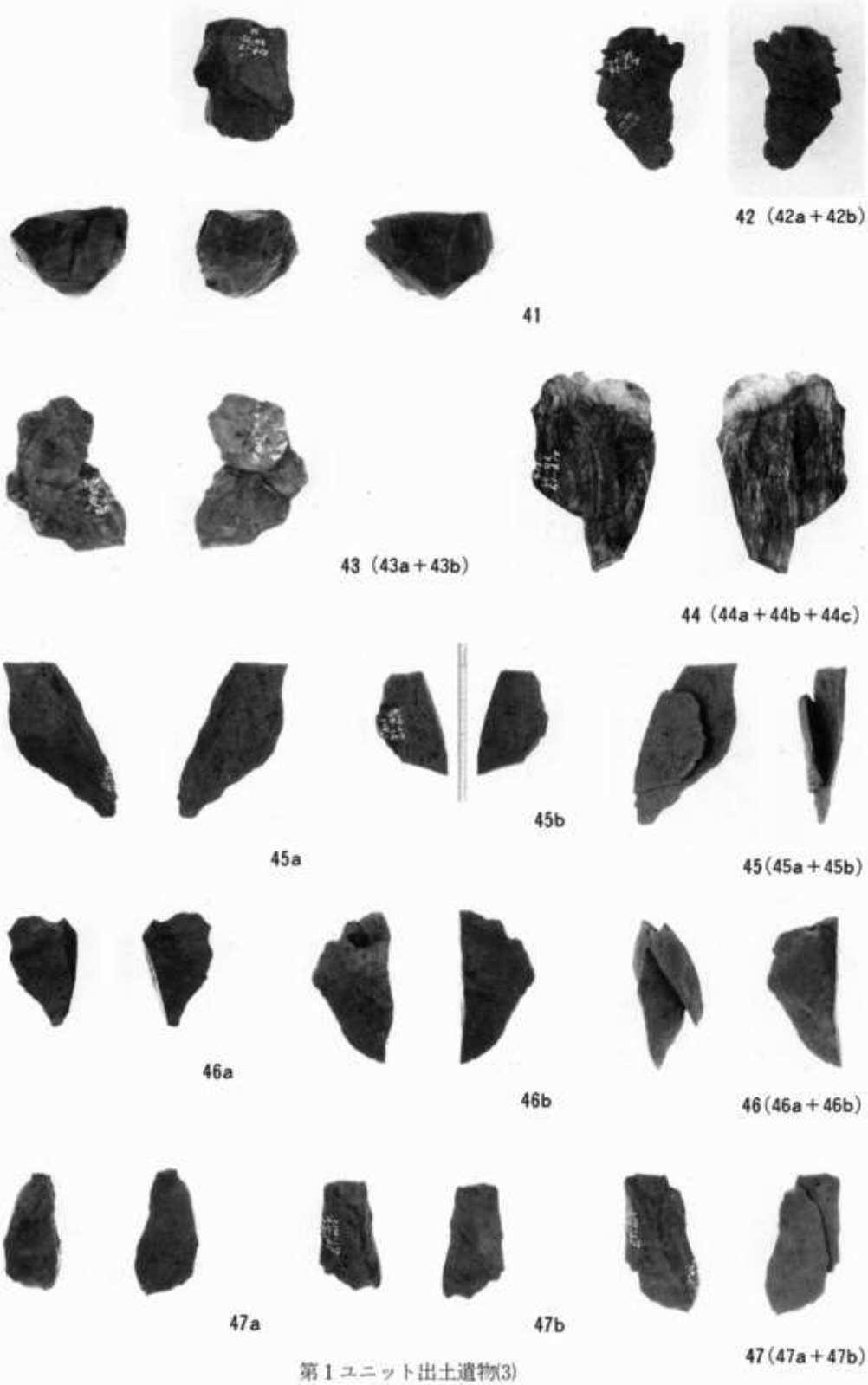
第１ユニット遺物出土状況(2)



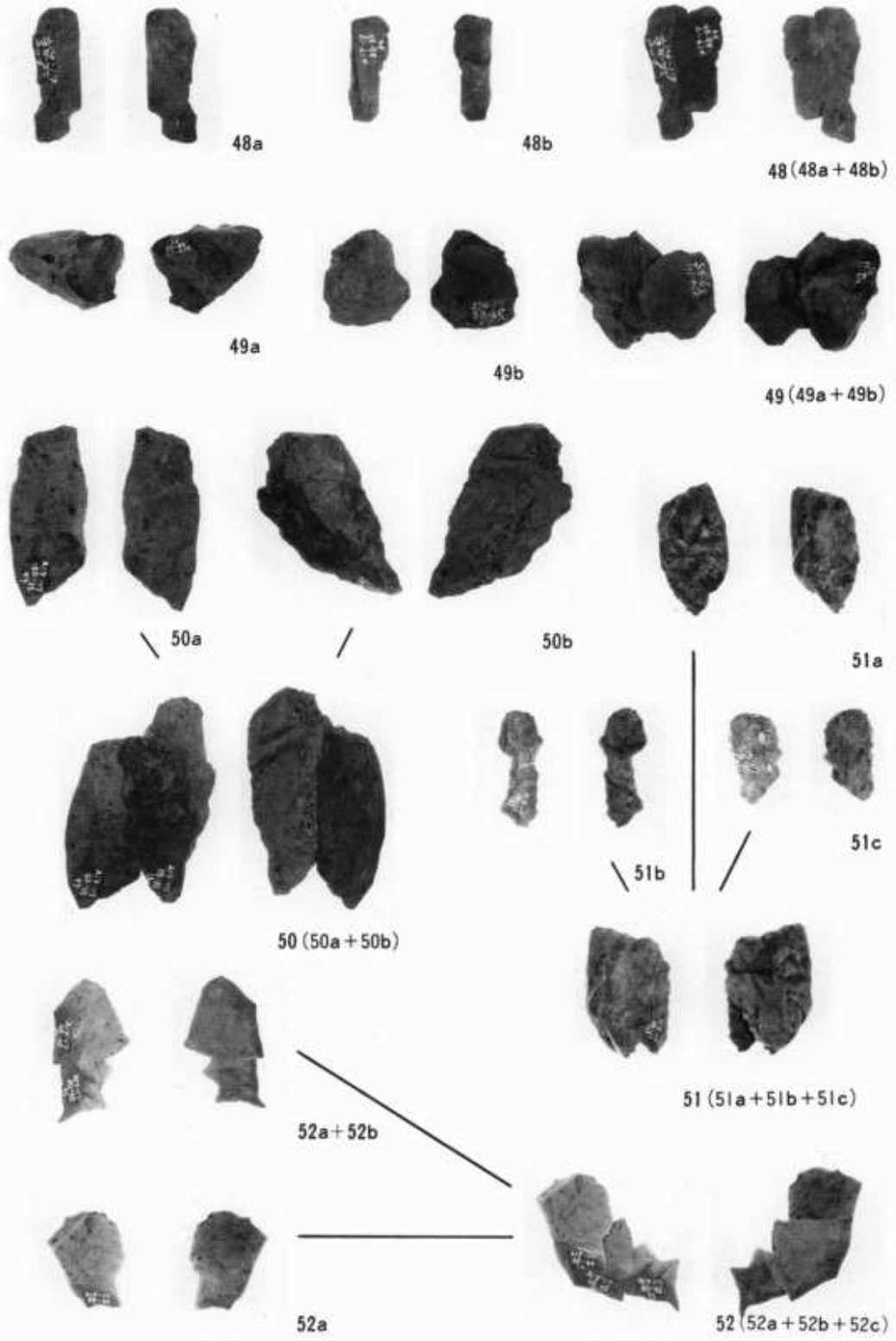
第1ユニット出土遺物(1)



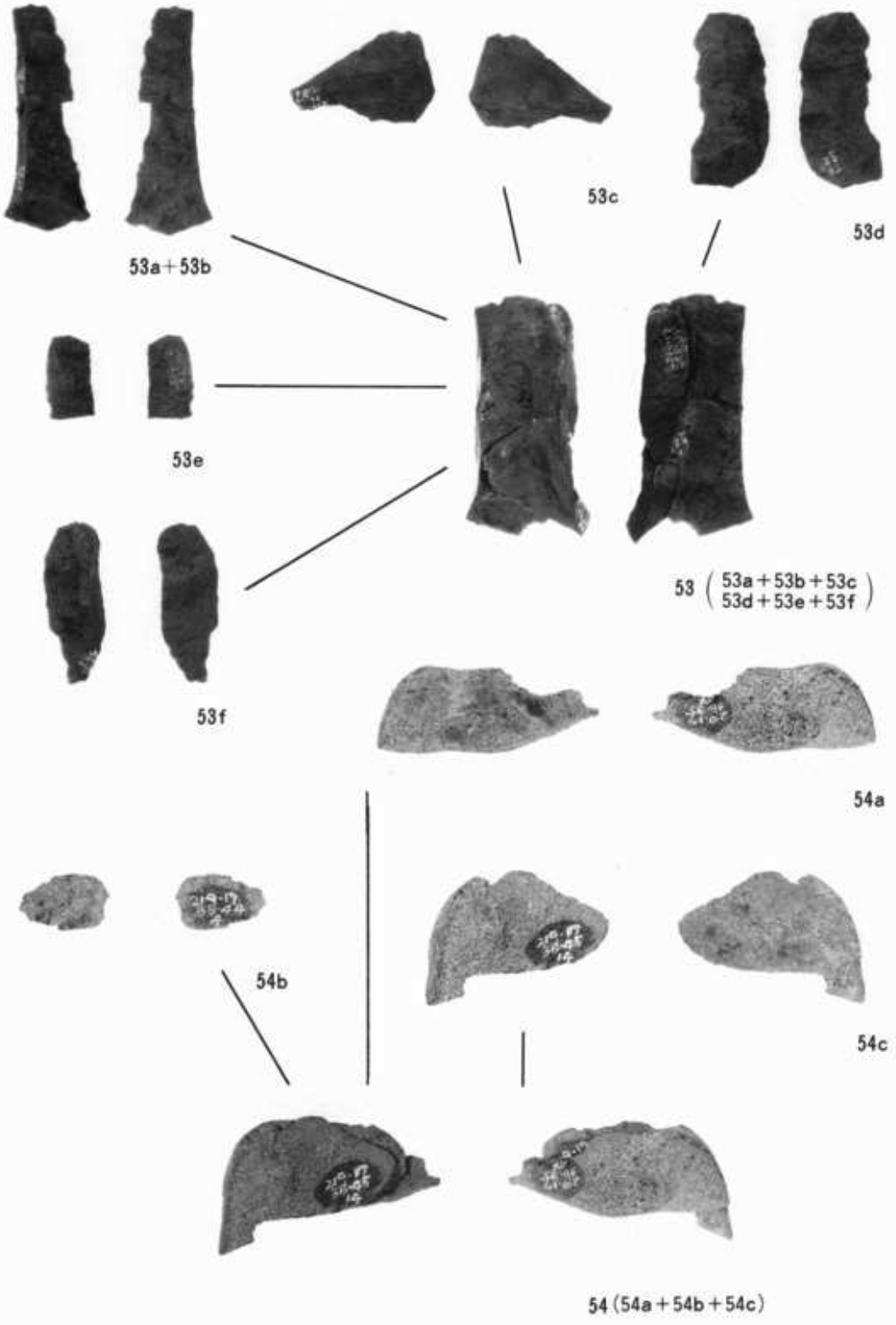
第1ユニット出土遺物(2)



第1ユニット出土遺物(3)



第Ⅰユニット出土遺物(4)



第１ユニット出土遺物(5)

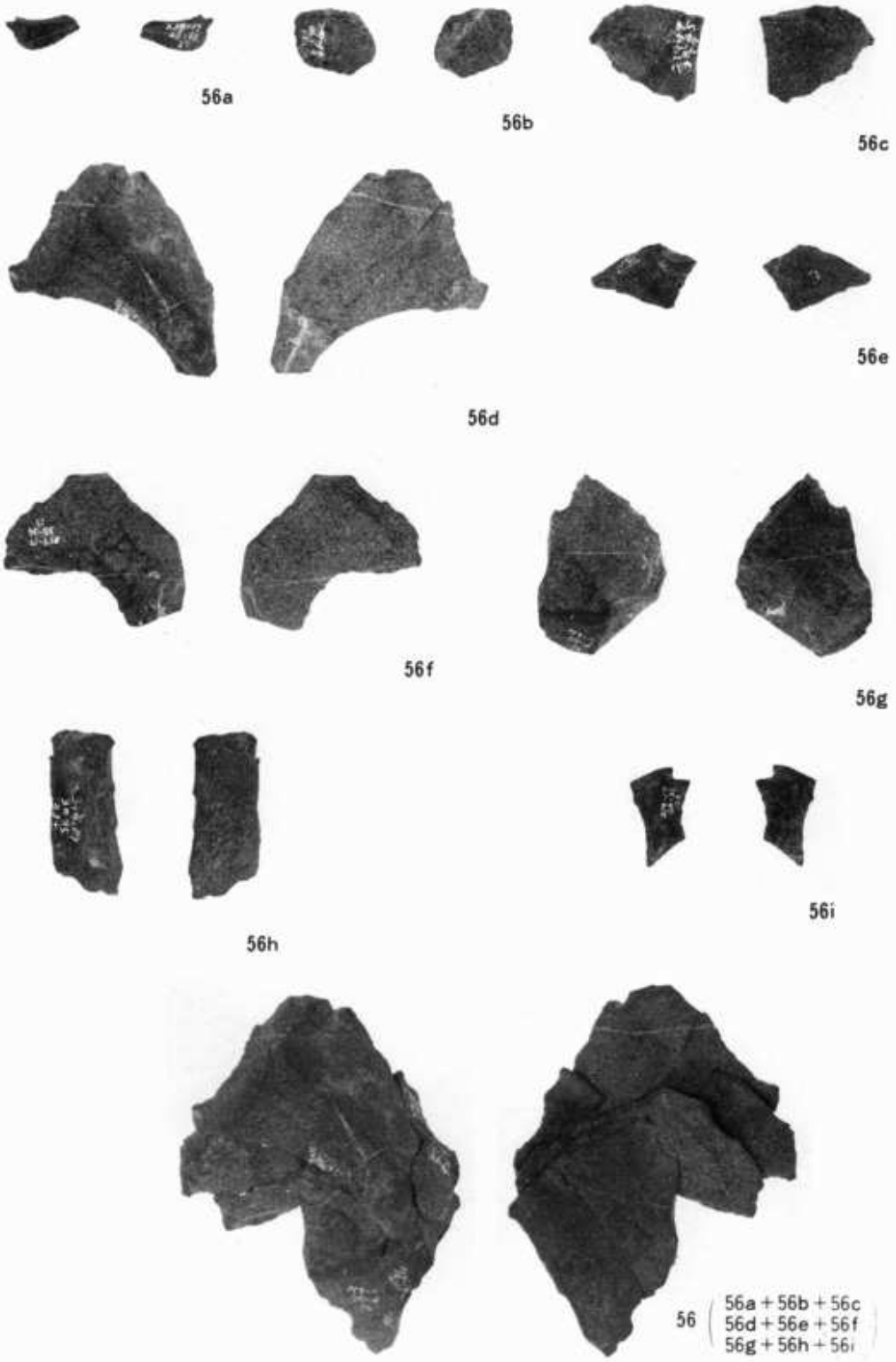
55a　　55b＋55c＋55d

55e　　55f

55g　　55h

55 (55a＋55b＋55c＋55d / 55e＋55f＋55g＋55h)

第1ユニット出土遺物(6)



第1ユニット出土遺物(7)

57a

57b

57c

57a＋57b＋57c＋57d

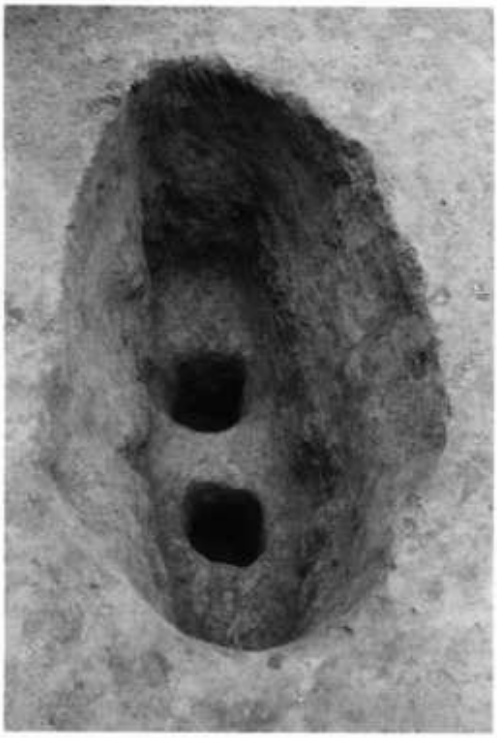
57d

57f

57e

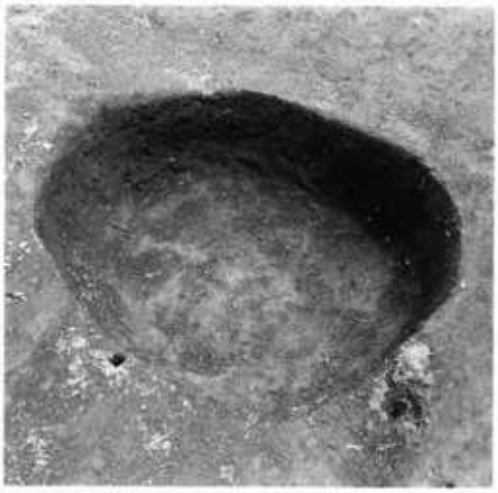
57 (57a＋57b＋57c / 57d＋57e＋57f)

第1ユニット出土遺物(8)



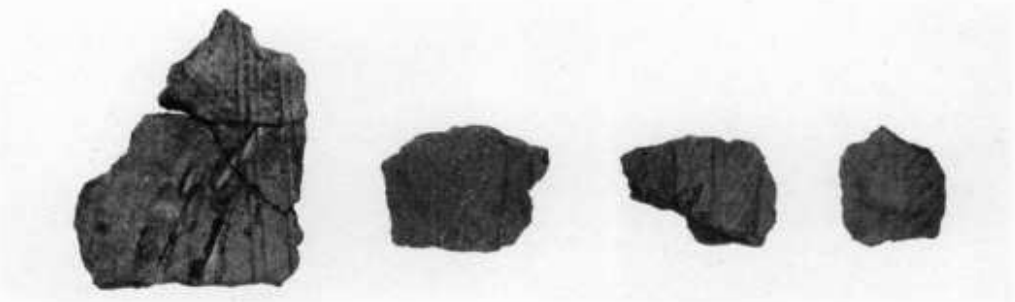
1号土坑全景

2号土坑全景



3号土坑全景

4号土坑全景



グリッド出土遺物

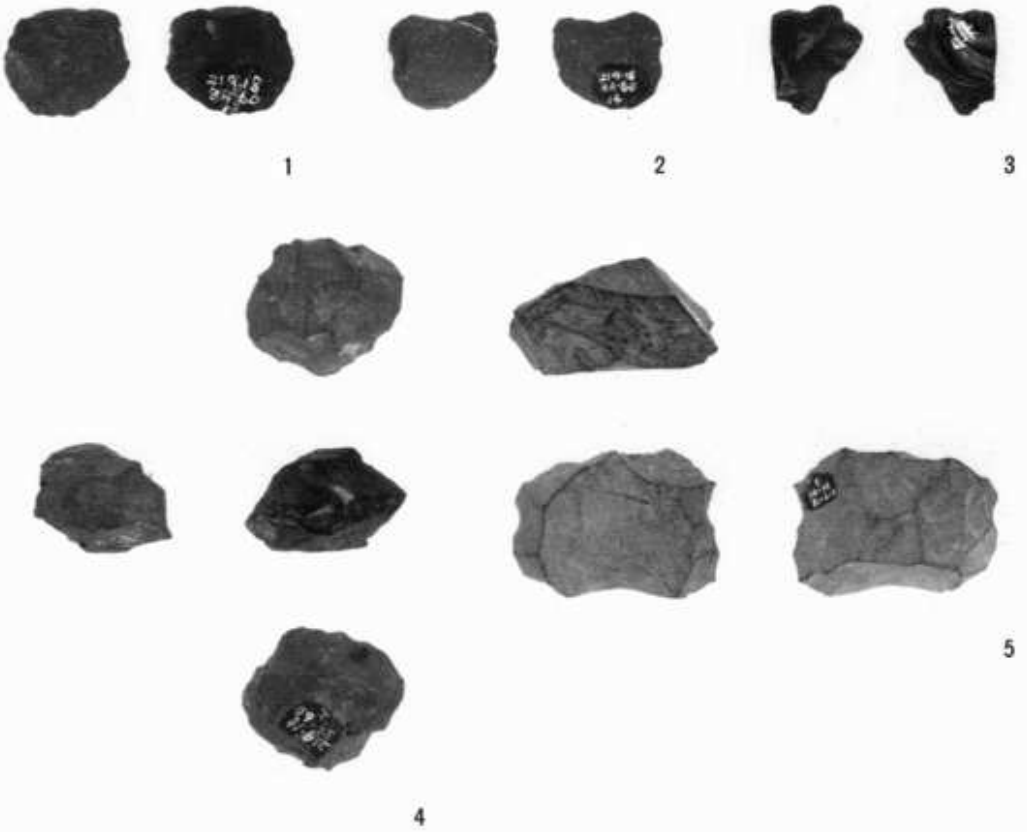
3・4号土坑内貝ブロック出土貝類サンプル

調査前遺跡近景

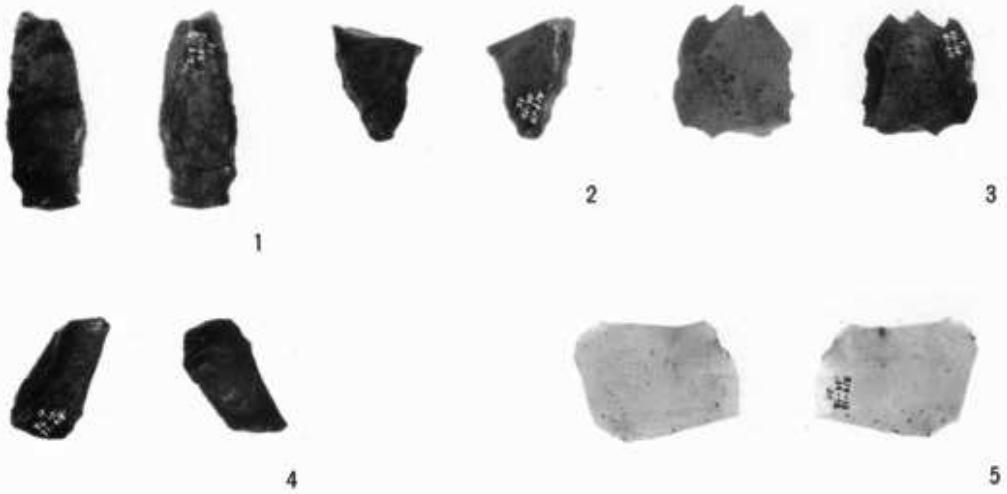
第1ユニット遺物出土状況

第2ユニット遺物出土状況

第3ユニット遺物出土状況



第1ユニット出土遺物

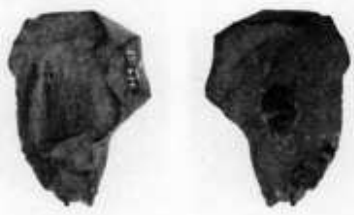


第2ユニット出土遺物(1)

6

7

8e



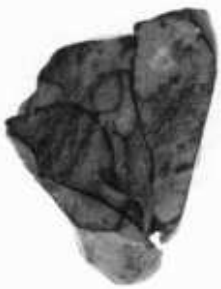
8a

8b+8c

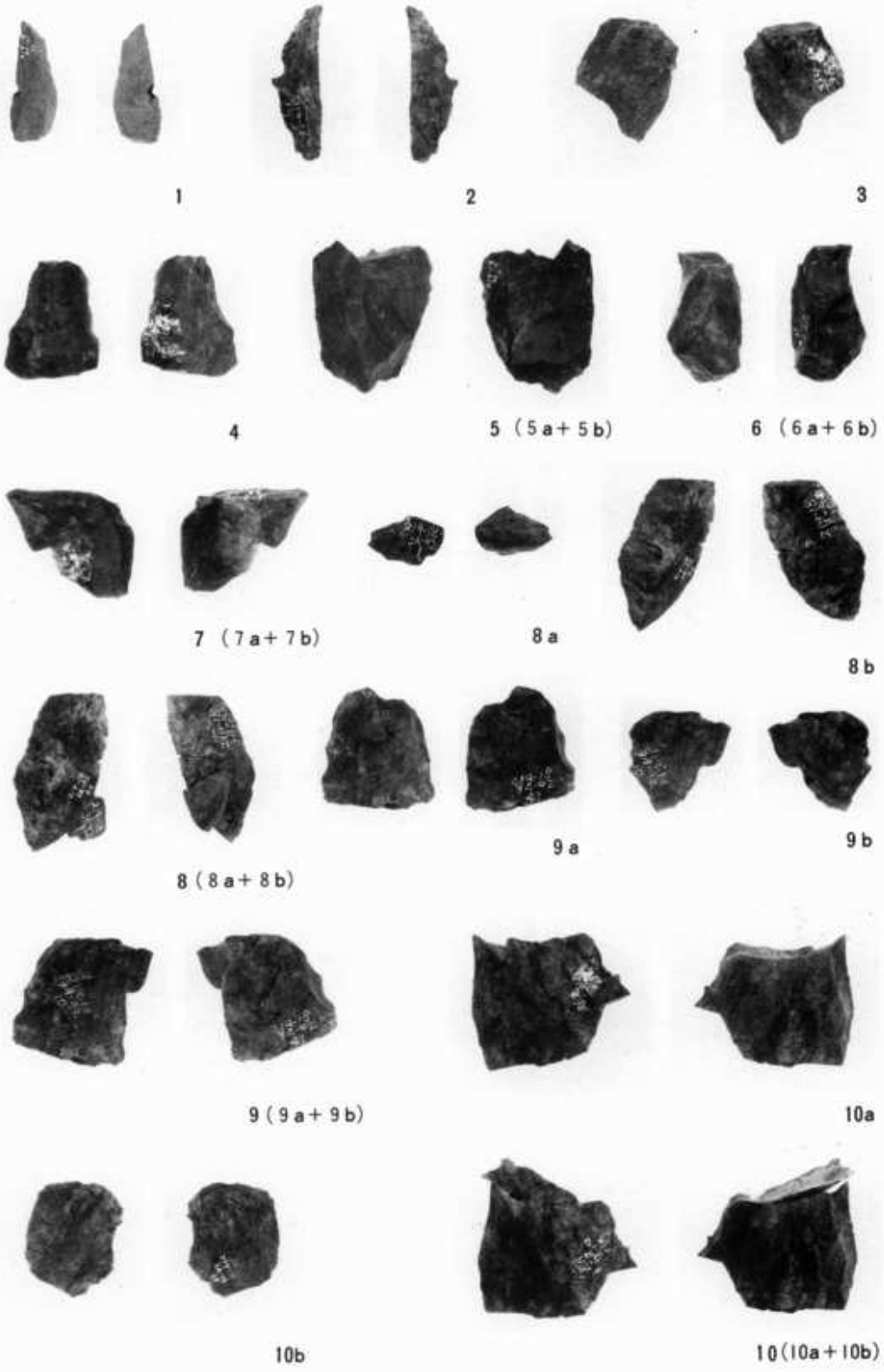
8d

第2ユニット出土遺物(2)

8 (8a+8b+8c / 8d+8e)



第2ユニット出土遺物(3)



第３ユニット出土遺物(1)

11a+11b

11c+11d

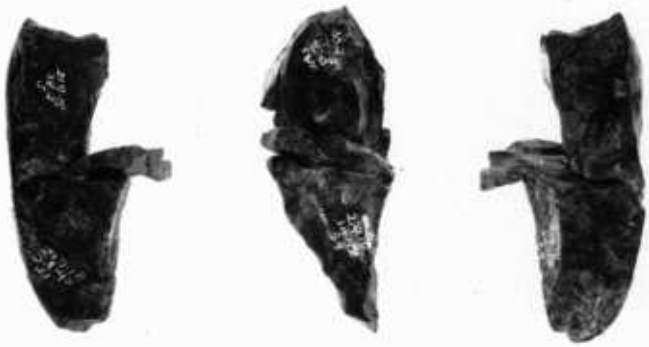
11 (11a+11b+11c / 11d+11e+11f)

12a

12b+12c

12d+12e

12f



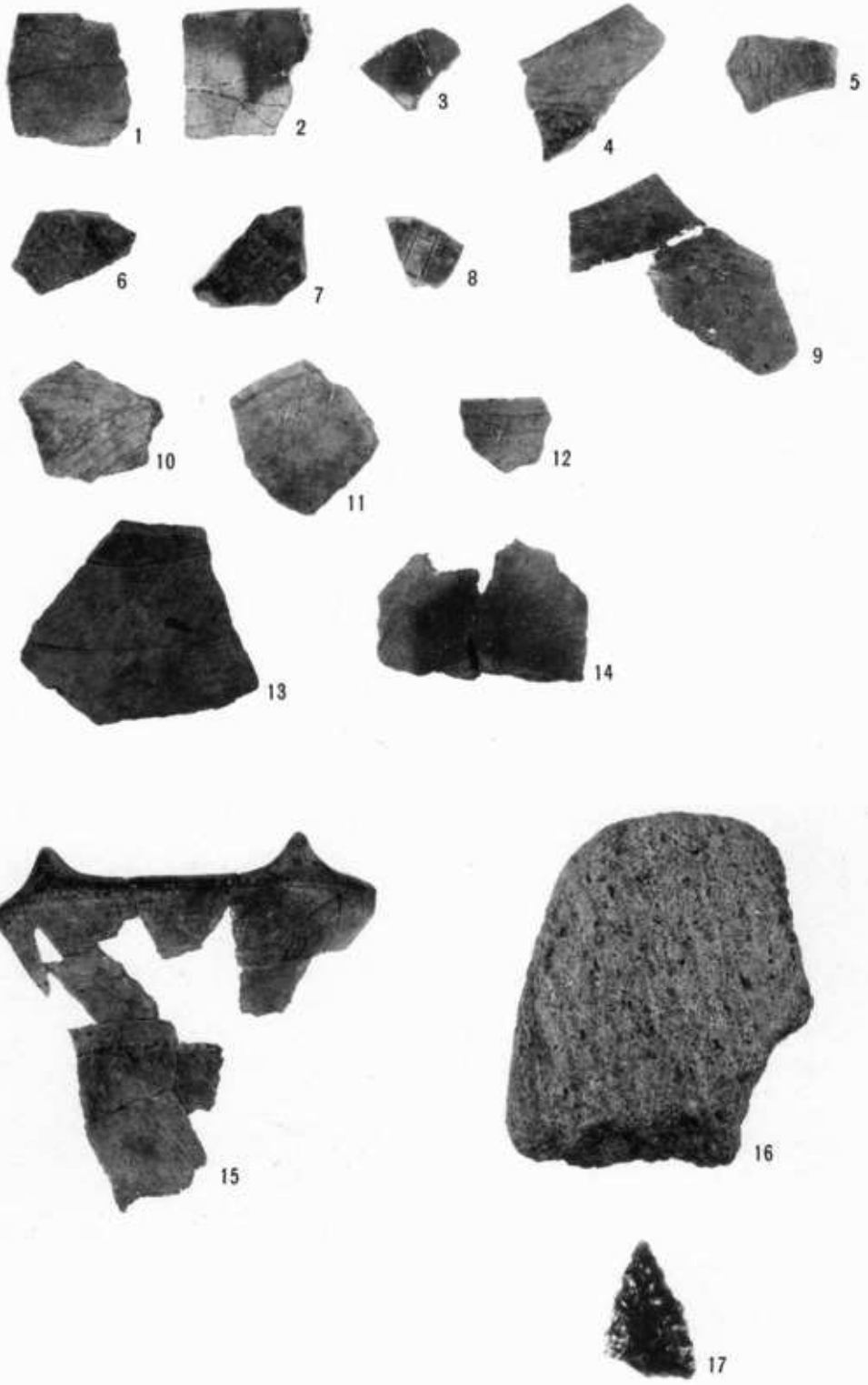
12 (12a+12b+12c / 12d+12e+12f)

第３ユニット出土遺物(2)

1号土坑全景

2号土坑全景

3号土坑全景



グリッド出土遺物

調査前遺跡近景(1)

調査前遺跡近景(2)

1号土坑全景

グリッド出土遺物

遺跡全景（航空写真）

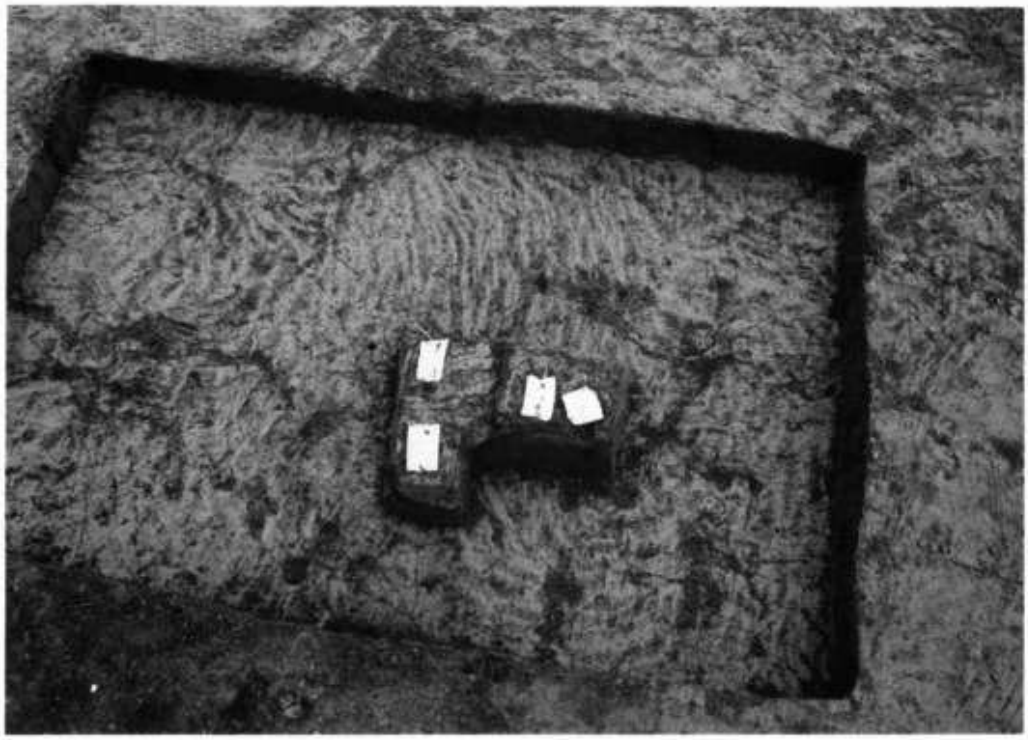
調査前遺跡近景(1)

調査前遺跡近景(2)

第1ユニット遺物出土状況

第3ユニット遺物出土状況

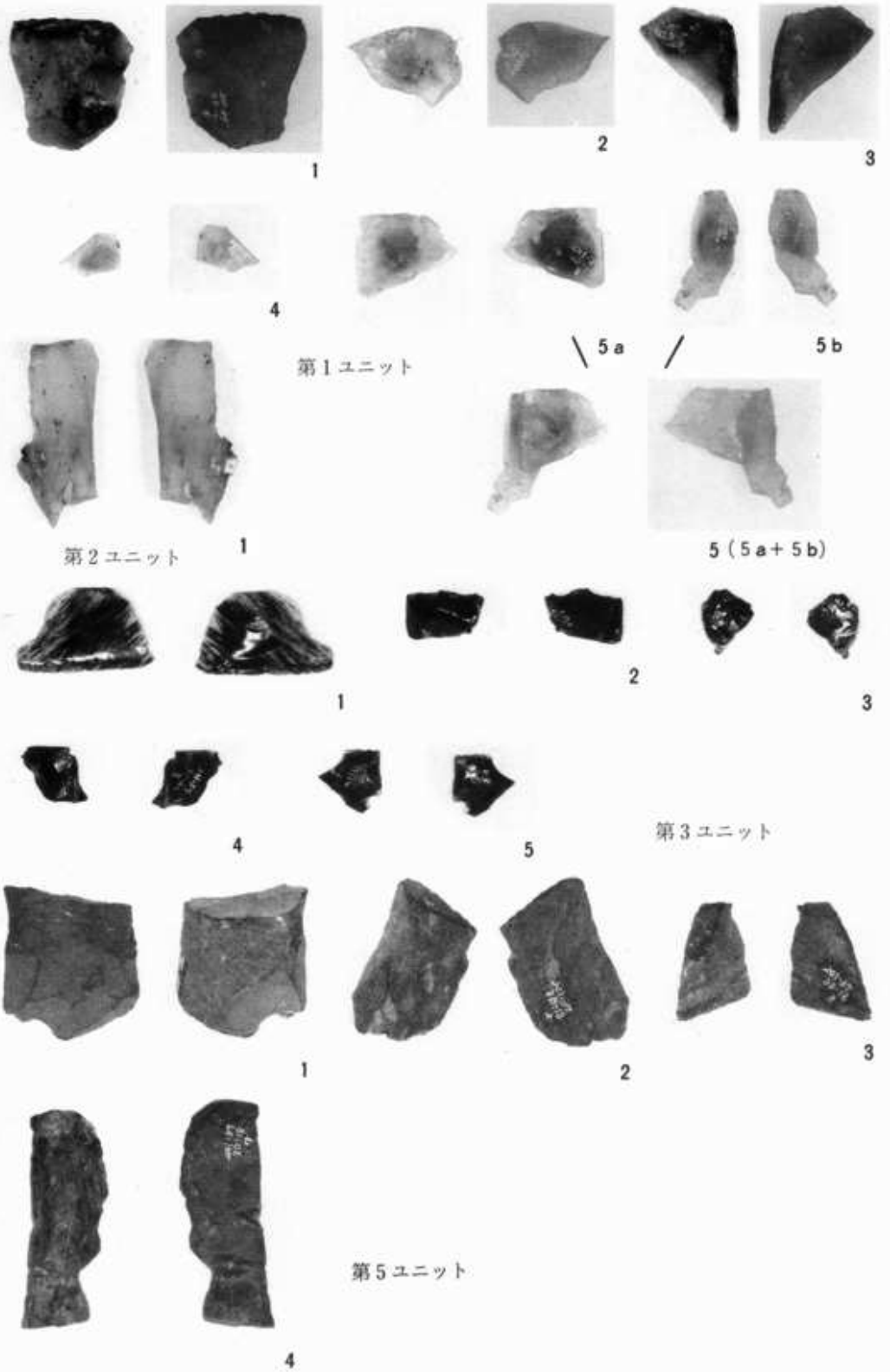
第4ユニット遺物出土状況



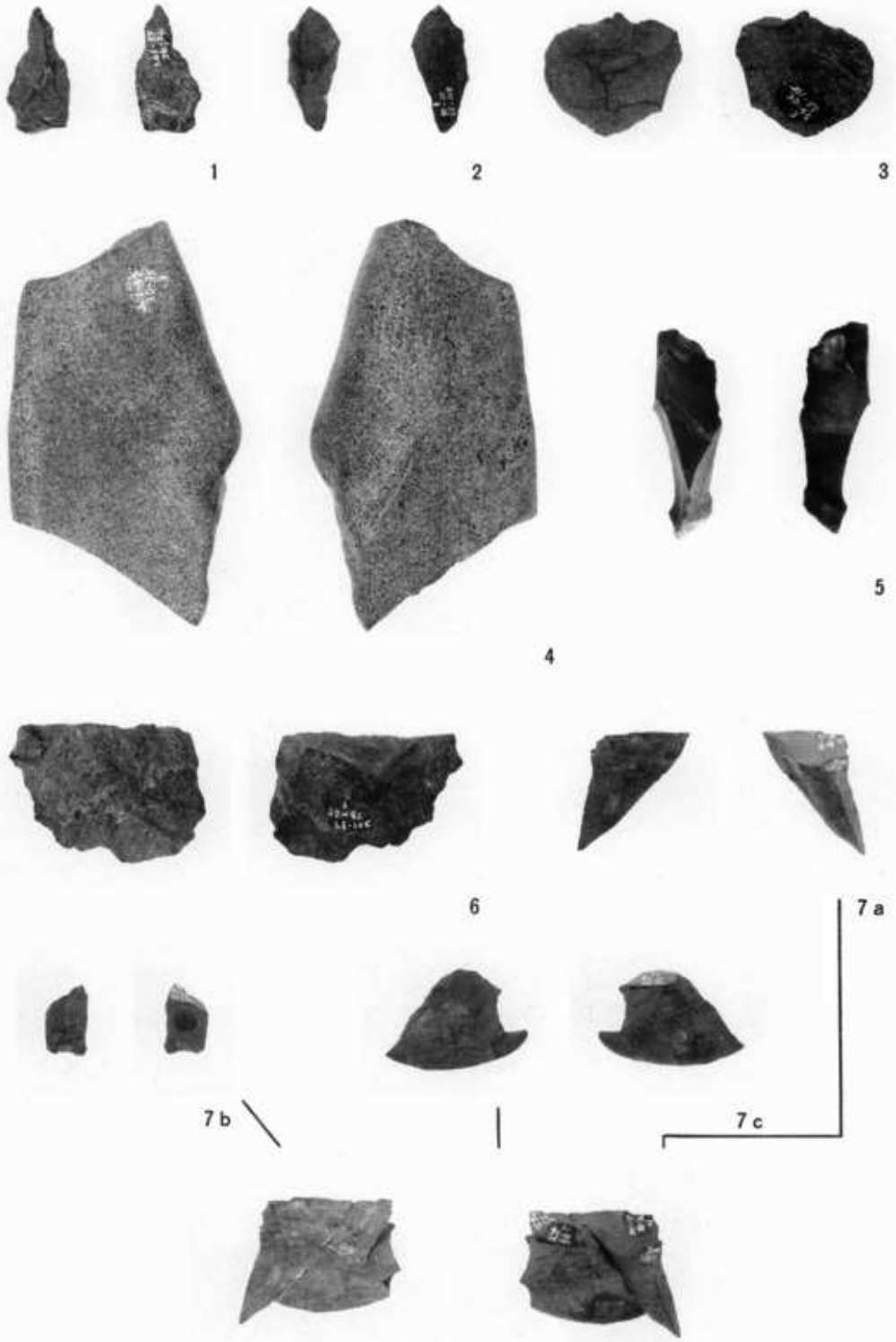
第5ユニット遺物出土状況

第6ユニット遺物出土状況

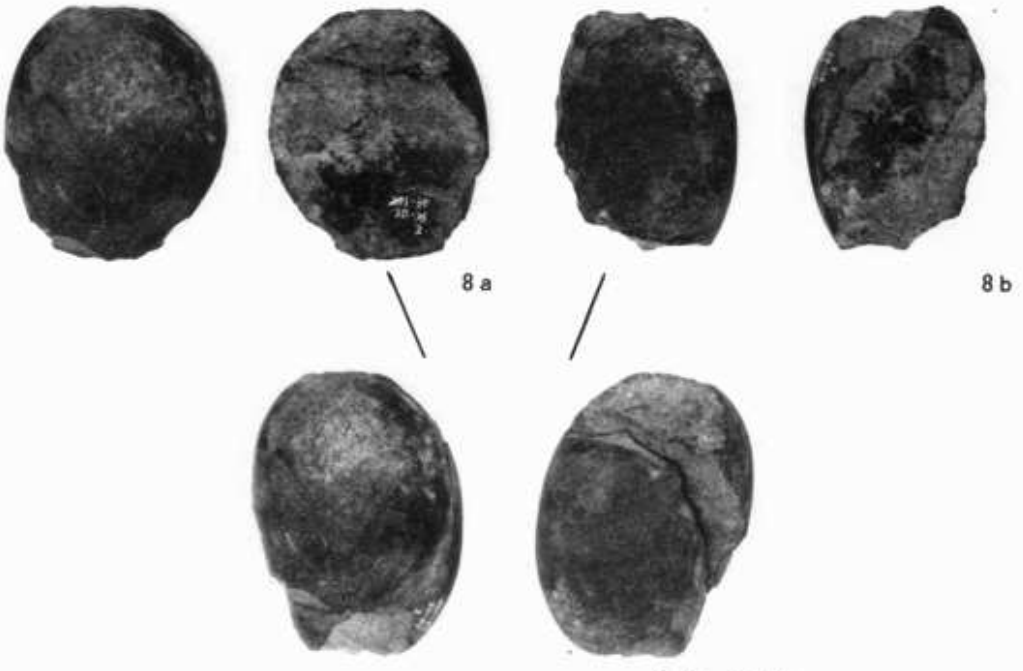
第7ユニット遺物出土状況

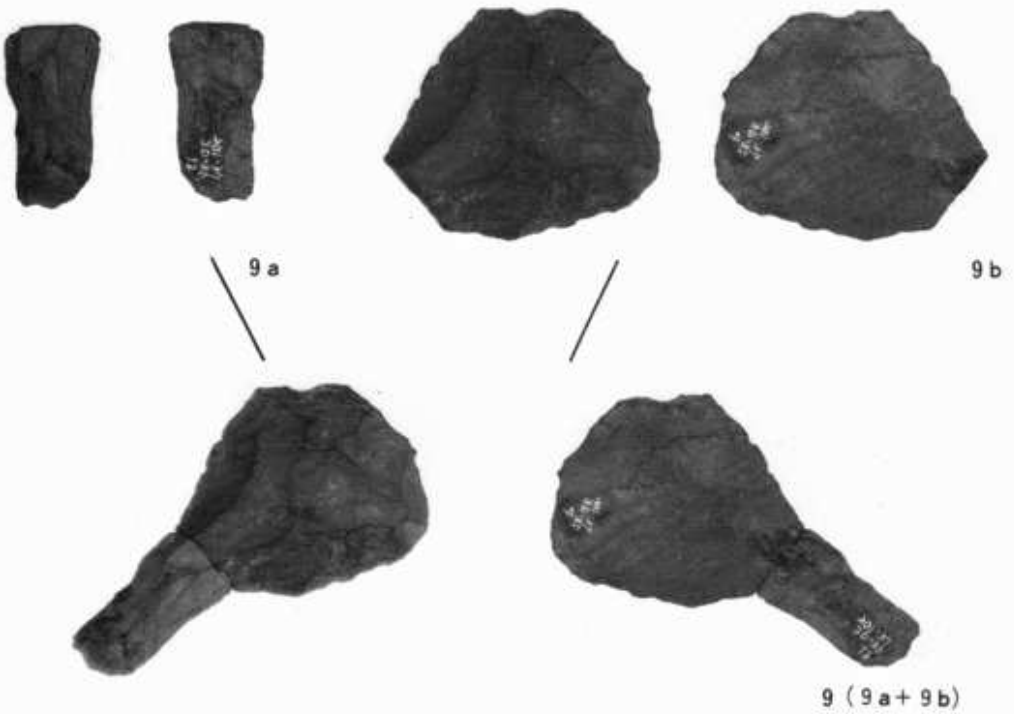


第1・2・3・5ユニット出土遺物



第4ユニット出土遺物(1)





第4ユニット出土遺物(2)

10

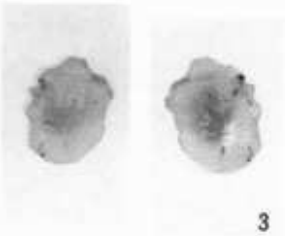
11

12

第4ユニット(3)

1

2



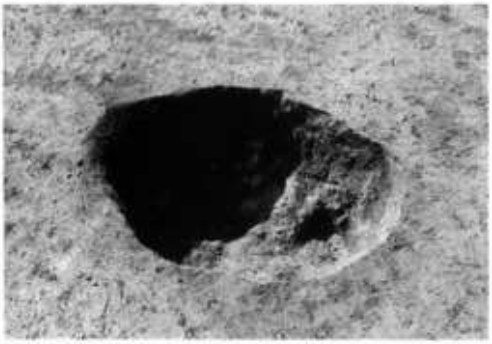
3

第6ユニット

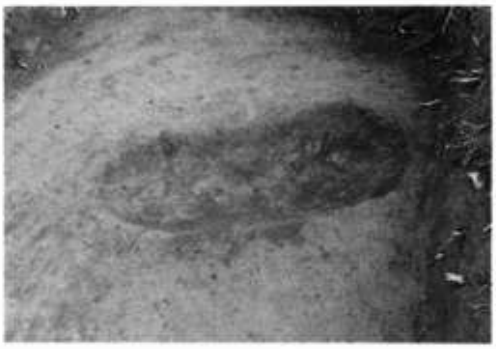
1

第7ユニット

第4・6・7ユニット出土遺物



1号炉穴全景



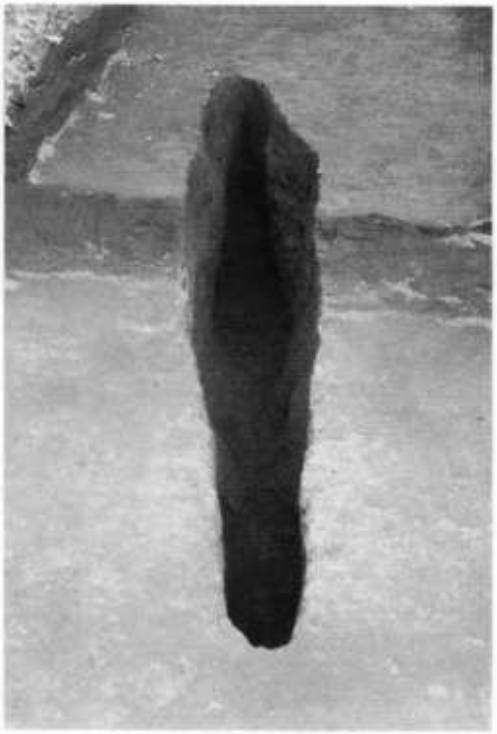
2号炉穴全景

1号土坑全景

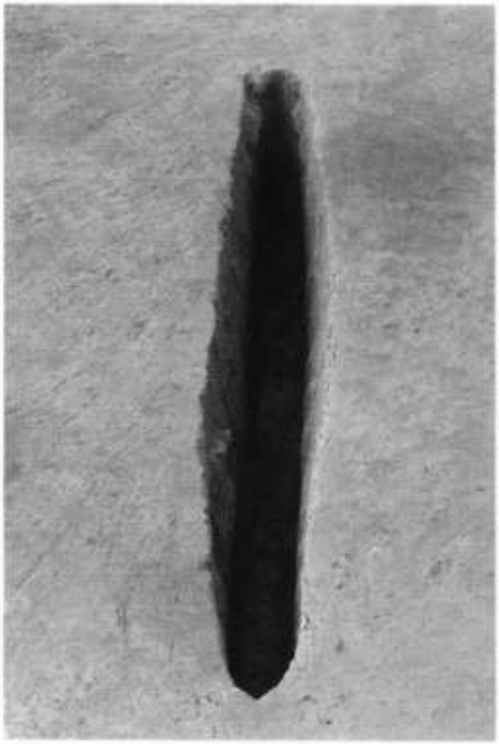
2号土坑全景

3号土坑全景

4号土坑全景



5号土坑全景



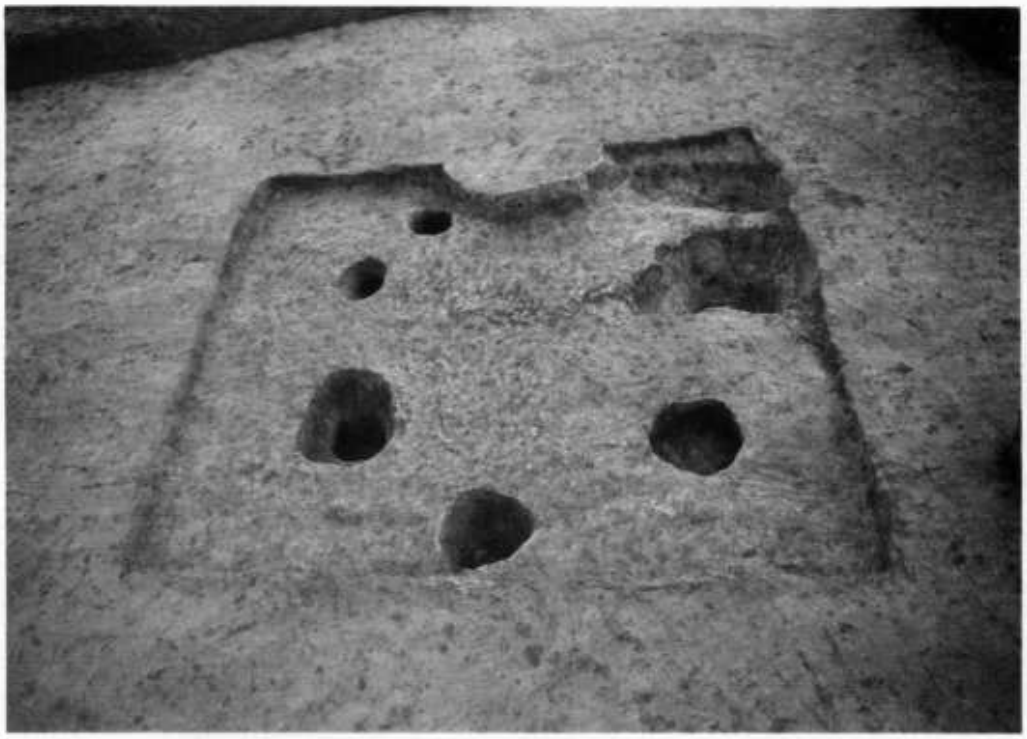
6号土坑全景

7号土坑全景

8号土坑全景

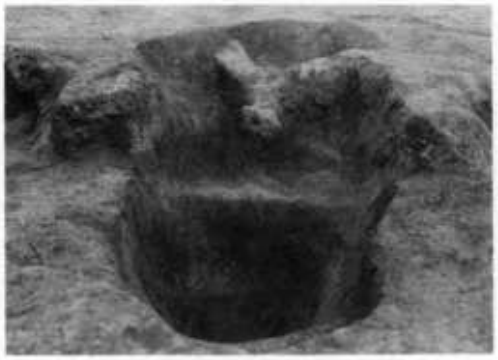
9号土坑全景

ピット群全景



1号住居跡全景

1号住居跡遺物出土状況



1号住居跡カマド

1

2

3

4

5

6

7

1号住居跡出土遺物

1

ピット群出土遺物

遺跡遠景

第1土塁

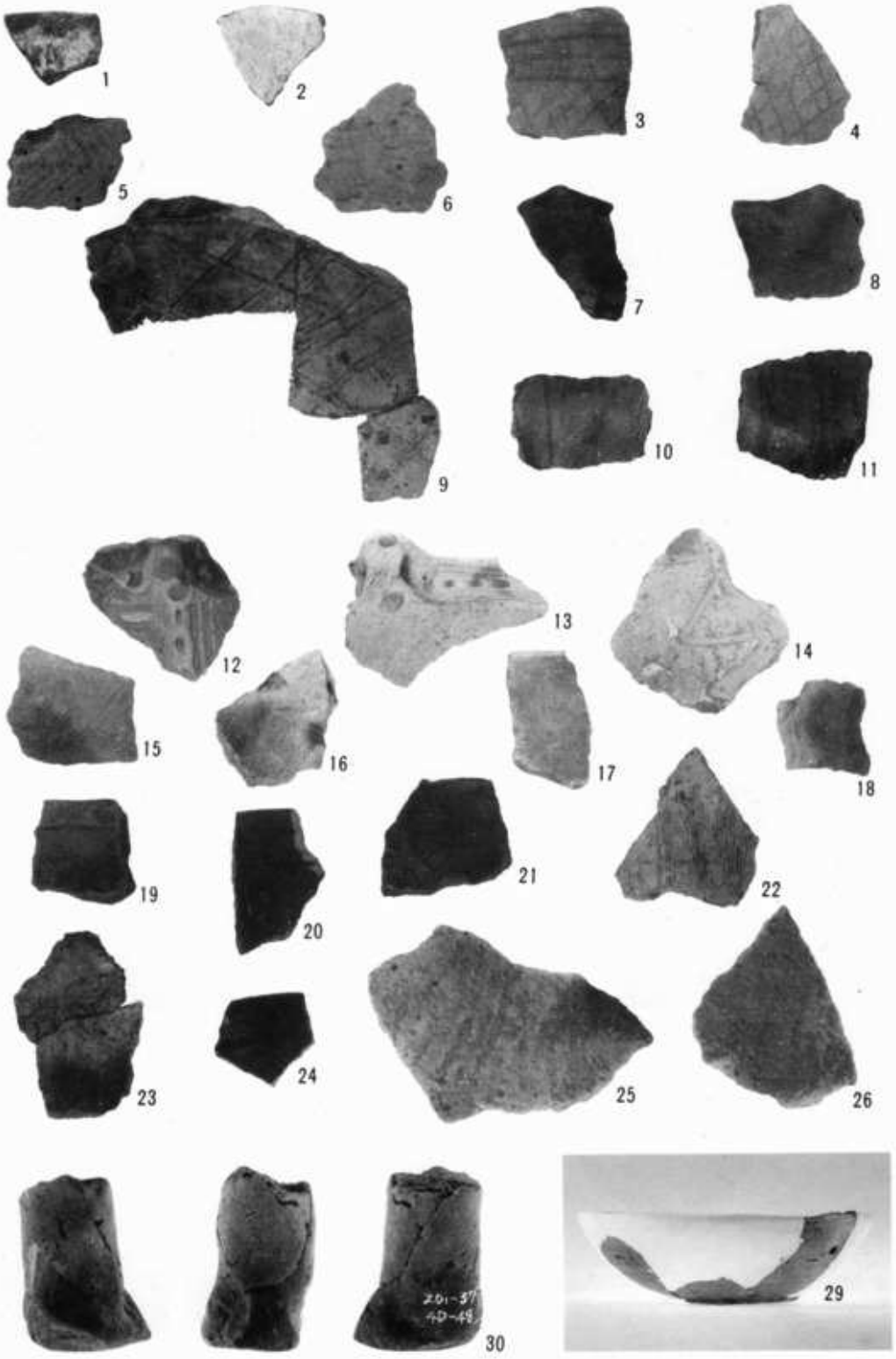
第2土塁(1)

第2土塁(2)

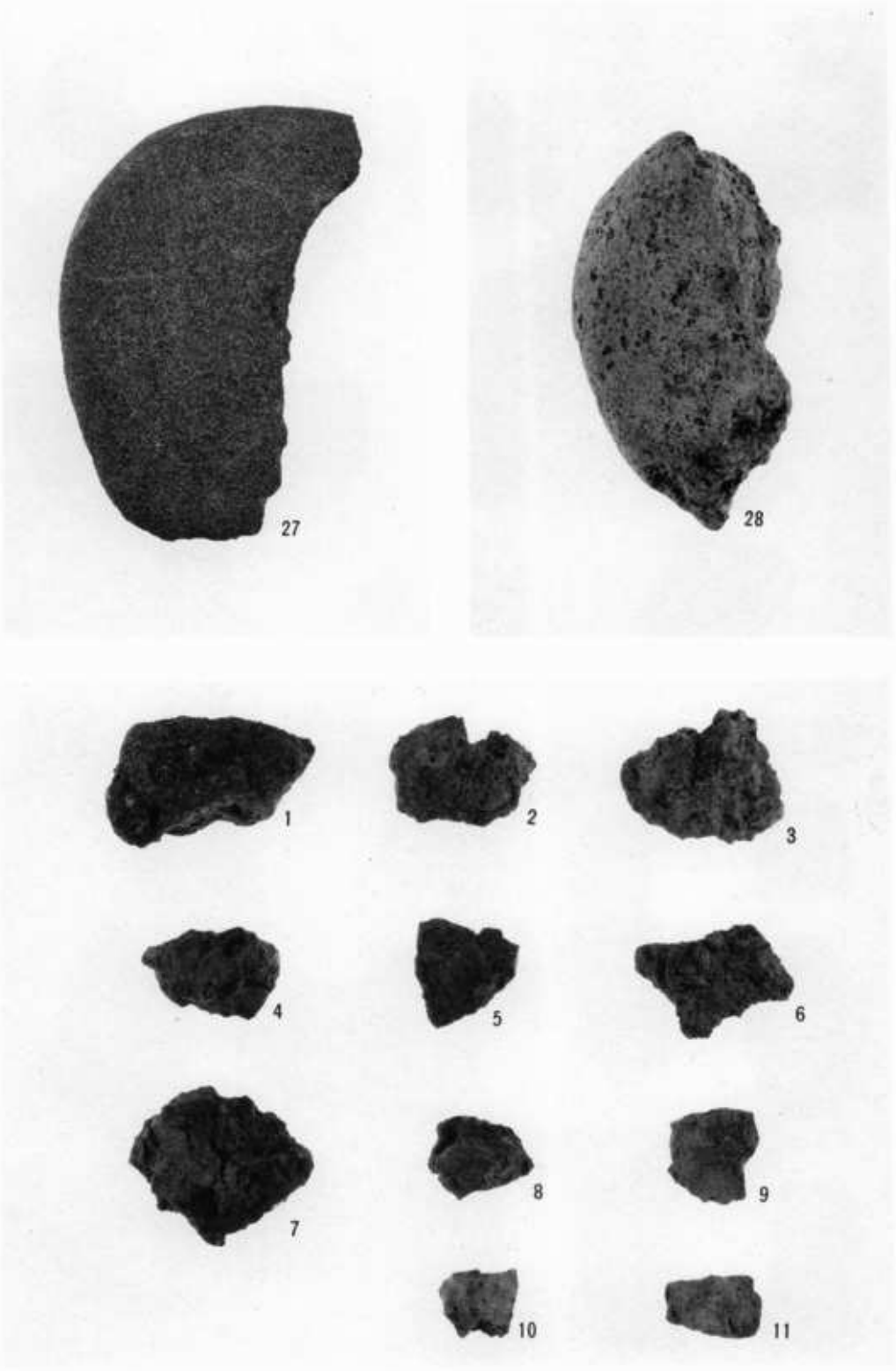
第3土塁

溝

テラス



グリッド出土遺物(1)



グリッド出土遺物(2)

板倉町遺跡地形測量図

昭和59年3月24日　印刷
昭和59年3月31日　発行

市原市瀬又北・瀬又南、千葉市大木戸・板倉町遺跡

－千葉外房有料道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書－

発行　千葉県道路公社
千葉県千葉市中央4－13－28　新都市ビル内
TEL　0472（27）9331㈹

財団法人　千葉県文化財センター
千葉県千葉市亥鼻1－3－13
TEL　0472（25）6478

印刷　株式会社　太陽堂印刷所
千葉県千葉市末広1－4－27
TEL　0472（22）1121㈹